

ゴジラ 2054 終末の焔

江藤 えそら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

◆あらすじ◆

西暦1954年、核実験によって巨大生物“ゴジラ”が目を覚ました。

東京に上陸したゴジラは武力を以てしても止められず、人類にあまりにも多くの犠牲と教訓を残した。

あれから100年。

人類は進化し続けていた。

代わりに、教訓と恐怖を失いつつあった。

そしてついに、100年ぶりとなる核実験が強行されてしまう。

その時、太平洋の海底で、“終末”が目覚めた。

人類の大罪が生み出した大いなる怪獣の進撃が始まる。

ゴジラが歩く先には、一片の慈悲も希望もない。

世界が終わる。

人類が終わる。

終わりが始まる。

圧倒的な絶望を前にして、人類は最期に何を残せるのだろうか。

◆注意◆

この作品は東宝特撮映画『ゴジラ』の二次創作であり、作品には『ゴジラ（1954年）』をはじめとするゴジラシリーズのネタバレや情報が多く含まれています。

また、人が死ぬ描写・無残な状態にさらされる描写が多用されます。その点にもご注意ください。

世界観としては初代ゴジラの物語のみが存在した世界であり、初代ゴジラから100年後の近未来世界が舞台となります。

人間側の登場人物はほぼオリキャラとなりますがご容赦ください。
作者の多忙のため更新は不定期となります。

目次

第一部 怪獣王の帰還

終末 1

混乱 13

再臨 26

上陸 41

決断 55

登場人物・用語などまとめ（第一部）

71

第二部 蹂躪、その果てに

神話 88

覚悟 110

決死 125

苦悶 140

疑心 157

絶望 173

登場人物・用語などまとめ（第二部）

188

第三部 亡国の巨神

背水 204

殲滅 218

蹂躪 232

進撃 249

登場人物・用語まとめ（第三部）

266

第四部 慟哭の島

背德

|

327

孤軍

|

308

禍亂

|

293

探求

|

278

第一部 怪獣王の帰還

終末

1954年、3月1日。

太平洋・ビキニ環礁において、一つの閃光が煌いた。

米国が実施にこぎつけた核実験・“キャツスル作戦”の第一号、“ブラボー実験”によつて、出力15メガトンの水素爆弾が太平洋上の小さな島の上で炸裂したのである。

光は瞬時に周囲の水分と地面を根こそぎ蒸発せしめ、その空間に小さな太陽が現れたと見紛うほどの強烈な光源となつて周辺をまばゆく照らし続けた。

絶大な威力の衝撃波がゆっくりと海面を嘗め回し、周りに浮かぶ島々はその洗礼を受けることとなつた。

高さ数十kmにも及ぶ巨大なキノコ雲が、圧倒的な存在感を以て人類の叡智の行き着いた先を世界に知らしめた。

炸裂後には膨大な量の放射性降下物が飛散し、周囲を死の世界へと変貌させた。それが、全ての始まりである。

否。

人類が最初に核の焰を現世に輝かせた瞬間から、全ては始まっていたのだ。

ブラボー実験が行われた日。

太平洋の海底深くで、一匹の“終末”が目を覚ました。



2054年、10月某日、正午。

「それではこれより、巨大生物“ゴジラ”襲来による犠牲者慰霊式典を開催いたします」
東京某所にある平和公園にて、その式典は行われた。

本日は、巨大生物“ゴジラ”が東京に上陸し、未曾有の大災害を巻き起こしてちょうど100年が経った日である。

“ゴジラ”は、ビキニ環礁の水爆実験によって目を覚ました太古の生物である。

放射能を吸収して異常な進化を遂げ、体内で核分裂を起こす方法を会得し、口腔部から白い熱線を吐き出す術まで身につけた世紀の大怪獣であった。

最初にゴジラが目撃された大戸島の伝説から、彼は“呉爾羅”——“ゴジラ”と名付けられたのである。

ゴジラは、歩く“終末”であった。

人間は様々な手段を講じてこの巨大生物を葬り去ろうと試みた。

武力の行使、発電所の流用……されど、ゴジラには傷一つつけることすらかなわなかった。

ゴジラは悠然と東京を闊歩し、火の海に変えた。

邪魔な建築物、逃げ惑う人々、そういったものに無慈悲なる熱線の攻撃を浴びせ、燃え盛る熱塊へと変貌せしめたのである。

一連の災害による死者・行方不明者は6万人に達した。

首都機能は災害後5年にわたって完全に停止し、大阪に一時的に国家首脳部が置かれるほどであった。

だが、この“終末”に引導を渡したのは、結局のところ人類であった。

若き天才科学者たる芹沢大助博士が考案・開発した破壊兵器・酸素破壊剤——“オキシジェン・デストロイヤー”によって、ゴジラは海の藻屑と消えたのである。

しかし、芹沢博士もまた、この恐るべき兵器が人類の破滅の道を押し進めることを拒み、オキシジェン・デストロイヤーの製法とともに海へと消えた。

人類の叡智の焰から生まれた怪獣は、叡智の泡とともに消え去ったのである。

人類は勝ったのか、負けたのか。

人類は正しかったのか。

生き残った人類はそれぞれの答えを胸に秘めたまま、100年の時を刻んだ。

「あのゴジラが最後の一匹だとは思えない」

ゴジラと芹沢博士が海に消えた日、生物学者・山根恭平博士は一人つぶやいた。

「もしまた水爆実験が続けて行われるなら、ゴジラと同類が現れるかもしれない」

山根博士は晩年、著書に繰り返し警句を記した。

『人類よ、忘れてはならない。もしもう一度人類が生み出した悪魔の焰を世界のどこかで咲かせることがあれば、再びゴジラは現れ、今度こそ世界を焼き尽くすだろう』

この日を境に、世界中で反核運動が活発化した。

第二のゴジラの登場を恐れる各国首脳はこれに同調し、核実験の全面的な規制を約束する条約に世界中の国が調印することとなった。

また、万が一に備え、各国で秘密裏に“対生体兵器（ゴジラをはじめとする巨大生物の殺処分を念頭に置いた兵器）”の開発が進められることとなった。

日本でも新政策として「怪獣対策基本法」が立法され（本法では、『一般の生物に比べ

著しく捕獲及び駆逐が困難・もしくは不可能であり、その対応に武力の行使が問われ、かつその行動に伴う人的・経済的損害が著しく大きいことが予想される生物を“怪獣”と呼称する』と定めている）、怪獣の登場に際して防衛出動による対応の劇的な早期化に成功した。

「では次に、首相の方よりスピーチをお願いします」

この式典は毎年行われているが、今年は100年という区切りの年であることもあつて余計に空気は重い。

眼鏡をかけた恰幅のいい男——吉田康重^{よしだ やすしげ}・内閣総理大臣は一礼し、スピーチを始めた。

「我が国は、100年前の本日、巨大生物ゴジラの襲撃を受けました。その被害におきましては、死者・行方不明者は6万人を数え、——」

吉田の表情もまた重い。

それもそのはずである。

彼の高祖父はゴジラ襲来時、首相だったのだ。

100年経ってその血族が再び首相の座に居座っているとは、これも何かの縁であろうか。

だからこそ吉田は、ゴジラの恐怖を日本人に、人類そのものに、決して忘れさせては

いけないのだと誰よりも強く感じていた。

核兵器という世界の愚かな試みによって日本人は罪なき命を散らすこととなった。

日本は実質三度、核兵器に焼かれたのである。

「——よって、我々は先の悲劇から学び、同じことが繰り返されないよう、努めていかなばなりません」

核兵器廃絶の動きこそ進んではいるが、未だに先進国も途上国も、完全に核兵器を廃棄はしていない。

結局のところ、水中酸素破壊剤オキシエン・デストロイヤーの存在が闇に葬られた現代において、怪獣が現れた際に最も確実に、そして最終的に迎撃手段として用いられるのは間違いなく核兵器である。

皮肉なことに、ゴジラの存在によって未だに世界に核兵器は存在し続けているのだ。

そして今まさに、さらに皮肉なことが起きようとしているなど、誰も想像していなかった。

吉田がスピーチを始めるのと同時刻、太平洋上。

見渡す限り水平線に囲まれた絶海の上空を、何かが高速で突き抜けた。

瞬間。

閃光。

100年前と全く同形状の火球が、洋上に忽然と出現した。

飛翔したのは、核弾頭を搭載した弾道ミサイルだった。

とある小国が国際条約を破り、各国を威嚇するために独断で核実験を強行したのである。

人類は忘れ去った。

100年前の恐怖を。

人類自身が生み出した悲劇を。

1世紀の時を超えて炸裂した水素爆弾は、以前のものよりも強烈な火球と衝撃波を以て海上を再び死の世界へと変えた。

キノコ雲が空へ舞い上がり、雲をオレンジ色に染め上げる。

この世の終わりを感ぜさせるほど美しく儚く悲しい光景がその空間を支配した。

——今この瞬間、本当の意味でこの世の終わりが近づいていることに、いったい誰が気づけただろうか。

「——以上をもちまして、私からの言葉とさせていただきます」

吉田は一礼した。

祖先が抱いた情、被災者の想い、そういったものに思いを馳せるたびに、彼は落涙をこらえるので精一杯になる。

100年の節目となればその思いは一層強い。

もう、あの時の被災者はほぼ生きてはいない。

だが、次世代の人たる我らがその教訓を語り継がずしてなんとするのか。

彼が席に戻ると、官僚が彼に歩み寄って耳打ちするのはほぼ同時だった。

「総理、緊急事態です」

彼の報告を聞いた吉田は目を見開き、そのまま数秒間不動を保った。

“某国の核実験が強行された”

衝撃、以外の感情が吉田の脳内から排除された。

なんと言葉を発していいのかわからず、とりあえず息をつく。

吉田はこの時既に感じ始めていた。

日本の、世界の運命の歯車が狂い始めていること。

人類に、終末が訪れるであろうことを。

歴史は繰り返す。

だがもう、次はない。

太平洋の海底で、何かが動いた。

水素爆弾の炸裂から3時間と47分が経過した瞬間であった。

炸裂点から数百m以内の距離の海面上で、それは起きた。

一瞬、海面は半径数kmにも及ぶドームを形作った。

刹那ののち、そのドームの天井部が弾け飛び、白い光の柱が天に向かって射出された。超高温の光の柱に触れた空気は瞬時に膨張して衝撃波を生み出し、同時に光に押しつけられるように海水が凄まじい勢いで周囲に飛散していった。

水爆などとは比べ物にならない規模の爆散に巻き込まれた全ての物質は超音速で光の柱から吹き飛んでいく。

光の柱を中心として大津波が円状に広がる。

光の柱はすぐに消え、それがあつた海面には深さ数千mにわたって、数千分の一秒ほどのほんの僅かな間だけ、大穴が開いた。

その大穴の底の底から、天空を睨む眼光があつた。

天に伸びていった光の柱は大気圏を超えて宇宙空間へと飛翔していった。

深海にたたずむ“それ”は、自らが発した熱源をじつと目で追い続けた。

光の柱と同じくまばゆい白色に輝く背びれは、地球上でもっとも純粋な“怒り”を表していた。

人類には猶予を与えた。

それでも繰り返した。

そこに生まれる感情は怒り以外の何物でもなかった。

次の瞬間、天を割るようなけたたましい咆哮が太平洋を覆いこんだ。

海が、大地が、その咆哮に呼応するかの如く打ち震える。

その様子はまるで、人類という傍若無人の生物を悉く駆逐する存在を、地球そのものが礼賛しているかのようなであった。

海に空いた大穴はすぐにふさがり、底にいた“何か”の様子をうかがい知ることとはできなくなった。

だが、もしその光景を見ていた人間がいたなら、はつきりと分かることもあっただろう。

例えば、人類の種としての寿命。

この日、“終末”が帰ってきた。
もう誰にも止められない。

混乱

※以降、本作では便宜上、核実験を強行した某国を『X国』と呼称する。



千葉県千葉市。

「えー、（ここ）で $a(n)$ の階差数列をとると……」

高校生の安川やすかわ吉道よしみちは、平常通り学校で授業を受けていた。

この日最後の授業は数学。

午後ということもあって睡魔に襲われる同級生もちらほらみられる。

今日がゴジラ襲来より百年の節目らしい——という情報は朝にニュースで見かけたが、吉道にとっては何ら取るに足らないことである。

退廃的……とまでは言わないが、青春を謳歌しきれているとも言い難い日常に彼は少々飽きを感じている。

そんな時、彼は百年前に上陸した大いなる怪獣王の雄姿に思いを馳せる。

大地に上り詰めた巨大な“力”がすべてを粉碎し、無に帰す。

そんな非日常を、彼は求めていたのかもしれない。

——非日常は、既に訪れていたとも知らず。

授業中にも関わらず、ピンポンパンポン、と放送が鳴る。

「授業中ですが、お知らせします。ただ今、千葉県太平洋沿岸部に津波警報が発令されました。今後、内陸部にも避難勧告が及ぶ可能性がございますので、十分にご注意ください。繰り返します。千葉県太平洋沿岸部に津波警報が発令されました。今後……」

同じ内容を繰り返した後、放送は終わった。

教室がざわめく。

「えーっと、授業続けても大丈夫かな……？」

まごつく数学教師を尻目に吉道は密かにスマートフォン（以後、スマホと呼称）の画面を開き、テレビ放送に繋げる。

画面に映りこんでいたのは、原稿を読み上げるニュースキャスター。

臨時ニュースのようだ。

一応授業中ゆえ、音を出すわけにはいかない。

「太平洋上で大規模な爆発 該当地域に津波警報」

——字幕にはそう書かれていた。

「なになに？ちよつと見せて」

昔からの友人である小幡堅太郎おぼたけんたろうが後ろの席からスマホをのぞき込む。

「爆発？ なにそれ？」

「わかんね」

小幡の問いに吉道はそつけなく答える。

事実、“大爆発”という言葉だけで事態の全貌を捉えるのは不可能だ。

小幡はつまらなそうに自分の席に深く座りなおす。

放送を閉じ、今度はWeb上でニュース記事や情報発信源を端から調べていった。

“謎の大爆発”

“大津波警報発令”

“警報該当区域一覧”

先ほどのニュースと同様の見出しが並ぶばかりである。

しかし、その中に一つだけ、他とは異なる見出し記事があるのを吉道は見逃さなかつ

た。

“X国 太平洋上にて核実験強行を表明”

「核実験……」

吉道は思わずつぶやく。

核実験というワードを授業で耳にしたのは一度きり。

百年前のゴジラ襲来の引き金となったのが核実験であると、社会の授業で嫌というほど聞かされた。

それ以降、世界では一度も核実験は行われていないのだと。

核実験の具体的な場所が載っていないか調べたが、“南太平洋”としか記されていない。

一方、“謎の大爆発”の方は場所が記述された文面が全く見受けられず、位置の特定は不可能であった。

核爆発で南太平洋から日本に到達する津波が起きるはずはないので、“謎の爆発”が核実験とは別物であるのは間違いない。

しかし、どうも吉道にはこの二つが完全に無関係な別の事象には思えなかった。

一つ、最悪のシナリオが考え付く。

核実験によって“あれ”が目覚めたのだとしたら。

「日本、終わったかも」

吉道の小さなつぶやきを辛うじて耳に拾った小幡は「はあ？」と怪訝な顔をした。



同時刻・首相官邸。

『南太平洋における海中爆発とそれに伴う津波発生に係る総理レク』

「とにかく事実の確認が最優先だ!! X国への非難声明なんぞその後でいい!!」

執務室で、吉田康重・内閣総理大臣が怒声を飛ばす。

「えー、ですが総理、現時点では爆発の原因、規模及び周辺被害などの詳細につきましては究明のしようがなく、現場における観測を待たない限り」

「今すぐどうにかならんのか!!」

駒場均こまば ひとし・防災担当大臣の言葉も吉田の無理難題に遮られる始末である。

「総理、今現在各省が総力を挙げて海上爆発の詳細を分析している最中であります。今はまず国民に事態を説明し、適切な行動をとってもらうよう要請するのが最優先かと思

われます」

ひかわ まさつぐ

氷川将嗣・環境大臣が吉田をなだめにかかる、吉田は「そうだな」とつぶやいてソファ―に深く座りなおした。

「津波の到達までどれくらい時間がある？」

「まだ精密な計算はできていませんが、少なくとも見積もっても10時間はかかるものと思われます」

氷川が手元の書類を確認しながら告げる。

「10時間後ということとは到達は夜中か……。それまでになんとしても国民を安全な場所へ避難させなくてはならん。各自自治体の多目的シェルターへの避難誘導を徹底させてくれ」

はい、と閣僚たちは答える。

「総理!!」

突然、声を荒げたのは蒲田良樹・かまた よしき怪獣防災担当大臣。

その手には、秘書官らしき人物から渡された一枚の紙きれが握られていた。

「どうしたね。驚かされるようなことはもう懲り懲りだ」

吉田がうんざりした口調でばやくが、蒲田はそんな様子など全く気にせず一枚の写真をとたたきつけるように机に置いた。

「見てくださいよ、これ!!!」

吉田をはじめ、閣僚たちは写真をのぞき込む。

「これは……」

誰かが思わず声を漏らす。

映っていたのは、はるか上空から映した地球とその大気圏。

だが、遠くの海上から確かに伸びる光の筋を彼らははつきりと認めた。

「謎の爆発が起きた直後に取られた衛星写真です。この光の筋の根元部分は、謎の爆発が起きた位置の座標、さらには数時間前に行われたX国による核実験の位置座標とほぼ正確に一致するそうです」

部屋内は不気味な沈黙に包まれた。

「なんてことだ……」

氷川が重い声でつぶやく。

「それ、〃ゴジラ〃じゃないの?」

その場において誰もが空想しかけたことを、桜坂健信・財務大臣があつさり口にした。

「百年前にどこかの博士が言ったらいいですね。〃もう一度核実験を行ったら、もう一

体ゴジラが出てくる”って。これで海上から放射能でも検出されれば間違いないでしょうな」

「よく危機感もなくそんなことを言えますね。事態を簡単に判断しすぎです。あなたの悪い癖ですよ」

土井三郎・文部科学大臣が桜坂財務相に苦言を呈する。

「海底火山の噴火という可能性もまだ捨てきれないわけですし…」

駒場防災担当相の言葉を桜坂財務相は「はあ？」と一蹴する。

「海底火山でこんなビームが出るんですか？　どんな原理？　説明してくださいよ」

「それは…」と言葉を濁らせる駒場。

「だがな……もし本当にゴジラだとしたら…これは大変なことだぞー」

吉田が声を荒げて言う。

「確信が持てない限りは国民をいたずらに不安にさせるわけにはいきませんが、この件に関しては怪獣災害の側面から考察すべき点が多数見受けられるのも事実です。既に民間のSNSやインターネットなどでは怪獣の再来を予想する書き込みが続出しているとの報告もあります。だからこそ冷静な対応が求められるでしょう」

金田邦子・総務大臣が吉田に告げると、吉田は青い表情のまま頷いた。

「ゴジラが出てきたなら倒せばいいでしょうに。そのためによく分からん兵器の開発に

国のカネを使つたんでしよう？」

桜坂財務相は磯谷敏和いそがいとしかず・防衛大臣に皮肉を言い放つた。

磯谷防衛相は黙して応じなかった。

「あなたは百年前の悲劇を覚えてらつしやらないのですか？ 今日からちようど百年前の、あの惨劇を」

金田総務相が桜坂の不敵な発言に苦言を呈する。

「自衛隊を出動させるだけでも百年前の事件以来前例のない大事だというのに、もしその怪獣がゴジラと同類であつた場合、自衛隊の力をもつてしても倒せるとは限らないと言わざるを得ません。これは国家レベルの非常事態です！」

駒場の言葉に桜坂はチツと舌打ちする。

「どうなんだ、蒲田！ これは本当にゴジラなのか？」

「生物学者と研究グループの意見を聞かないことはどうにも……。ですが、この写真を見る限り光の筋は大気圏を超えて宇宙空間にまで伸びているように思えます……。海中でこれほどのエネルギーを放出しうる自然現象が一般には存在しない以上、怪獣の存在を念頭に置く必要はあるかと思われます」

蒲田は重い声で桜坂の問いに答えた。

「あー、とどのつまりつまりお前はゴジラだと思つてゐるんだな？」

「あ、はい…。個人的な意見になりますが、自分はそう考えます」

「ですが、百年前に発生したゴジラはこんな光線は吐かなかったと記憶していますが」
すかさず土井文科相が口を挟む。

「その点は自分も気になっていました。百年前のゴジラは“高温の白色吐息”を吐いていましたが、この写真に写っているような天高い光線を放出したという報告は存在しません。もしかしたら、ゴジラと形態も内部エネルギー値も大きく異なる別の怪獣の恐れもあります」

「別の怪獣って…。前例もないのにそんなものどうやって対処すればいいのですか？」

金田総務相が苛立たしげに尋ねる。

空氣がますます張り詰める中、「皆様方」と大きな声で呼びかけたのは、大臣たちの議論を黙して聞いていた桐谷隆・内閣官房長官である。
きりたに たかし

「間もなく臨時閣議を執り行います。閣議室への移動をお願いします」

その声を聞いた大臣たちはいったん議論の矛を収め、各々の想いを胸に閣議室へと姿を消した。



学校からの帰り道、吉道はとある病院へと足を運んだ。

受付で面会手続きを済ませ、一気に病室へと階段を駆け上がった。病室に着いた彼を「学校お疲れさま」と声をかけて迎えたのは母親だった。

その傍らには、吉道の曾祖母が静かな寝息を立てて眠りについていた。

「ニュース見た？」

母が問うと、吉道は「爆発のやつでしょ？　こっちは安全って言ってたよ」とそっけ

なく答え、曾祖母に歩み寄った。

夕焼けで紅に染まった病室。

そこに眠る吉道の曾祖母は、今年で108歳になる。

今ではもう誰も存命していないであろう、百年前のゴジラ災害の当事者である。

曾祖母は戦争で父を、ゴジラ災害で母を失っている。

今となつては病室で寝たきりとなつてしまったが、よく今日まで生きたものだ、と吉

道は思った。

彼が物心ついたころにはほとんど動けない体になっていたためあまり話したことはなかったのだが、ゴジラから逃げたという話だけは何度も熱心に聞いたものだ。その話を聞きたびに、映画の中に引きずり込まれたかのような非日常の世界に取り込

まれていたものだった。

——いや、もしかしたら。

その世界は、もう俺の手に届くところに来ているのかもしれない。

実感の湧かない恐怖が吉道の背中を撫でる。

ちようど、今日で百年だ。

曾祖母がはつきりとした意識の中でこの日を迎えたなら、なんと云っただろうか。

夕日が差し込む窓辺からは、東京湾と日本の首都圏がよく見える。

百年前には、これが何も無い瓦礫だらけの平原に変えられたのだそうだ。

吉道には全く想像がつかない。

「母さんの会社でも百年経ってゴジラが目覚めるなんて噂が流れてたよ」

母親が告げる。

「おばあちゃんみたいな辛い目に遭わないか心配だね」

「ゴジラって……なんで日本を襲ったんだろ」

母の言葉には答えずに吉道はつぶやいた。

「そんなの、怪獣の考えることが分かるわけじゃないじゃない」

「……だよね」

吉道は何げなく、病室のテレビをつけてみた。

きつと、まだあの大爆発に関するニュースが流れているはずだ。

『先ほど政府は、南太平洋上における水中爆発の原因が未知の怪獣によるものであるとする見解を発表しました』

二人の体が硬直した。

事態は、思った以上に急速に進んでいた。

再臨



南太平洋上の爆発から約13時間が経過したところ、日本各地に0.5～6mの津波が到達。

迅速な政府や自治体の対応により死者は出なかったが、多くの家屋で浸水被害が発生することとなった。

国際連合は日本政府と同様に今回の海中爆発を怪獣によるものと判断し、声明を発表した。

声明内では、怪獣が原因であると判断した理由は以下のとおりである。

①爆発によって解放されたエネルギーが著しく局所的かつ膨大であること

②付近の海底火山に活動の痕跡が見られなかったこと

③数時間前に同海域で発生した核爆発が怪獣の活動を促進した可能性があること

安保理の管理下にある怪獣対策委員会では、各国の研究者を集い海中に存在したと思われる怪獣の生態活動・予想される被害などを話し合う事態に発展した。

また、核実験を強行したX国に対しては強く批判し、経済制裁などが協議されること

となった。

一方日本では、沿岸部に住む住人たちが怪獣災害を恐れて多目的シェルターに押し掛ける様相が全国で見られるようになり、吉田総理や桐谷官房長官らが何度も記者会見を開いて国民に冷静な対応を求めるに至った。

現時点では多目的シェルターへの入居が認められているのは津波による被災者だけであり、各自治体から避難勧告ないし避難指示が出されない限り、入居は認められないのである。

もつとも、こういった混乱は日本に限ったことではない。

怪獣はどの海から現れるか分からないのである。



2054年10月26日、都内中央合同庁舎。

内閣府特別の機関・怪獣対策防災会議（以後、怪防会と略す）。

『海中爆発の原因たる怪獣の生態研究と対策検討に関する報告会議（第1回）』

（※この会議は、怪防会やその他の調査機関・研究組織らがまとめた怪獣（特に百年前の

ゴジラ)に関する情報を怪防会の幹部に報告するものである)

会議室で机を囲むのは、国務大臣たる蒲田良樹・怪獣防災担当大臣をはじめ、古生物学・海洋生物学・原子力物理学・物性物理学など各方面の有識者の代表であり、さらに対怪獣防衛の有識者として派遣された自衛隊統合幕僚監部の所属者など様々な面子である(吉田総理大臣も本来同席するべき立場にあるが、別件により欠席)。

「海中から大気圏外へと伸びる光の筋は、衛星による解析情報によると20万℃を超える超高温の熱線であることが確認されています。これは百年前に出現した“ゴジラ”の行動からは説明のつかない現象です。よってこの現象は、少なくとも百年前のゴジラとは異なる怪獣のものであると思われます」

怪防会幹部の一人が資料を読み上げる。

「本当にそうなのか? 思い込みで議論を進めるのは危険だ。一度百年前の個体のデータを再確認させてほしい」

池田和宏・怪獣対策防災会議長がそう呼びかけると、呼応して有識者代表たる古生物学者の一人が会議室前方のモニターパネルに自らが持つ携帯端末を触れさせると、モニターにゴジラのスペックが浮かび上がる。

「百年前に東京に上陸したゴジラは体長50m、体重は推定2万トン級。海底洞窟に生

息していた巨大恐竜の生き残りがビキニ環礁の水爆実験によって目覚め、破壊活動を開始した——というのが山根恭平博士による調査書の文言であります。芝浦に上陸したこの個体は、白色で高温の霧のような吐息を発生し、当時木造建築が多数存在していた東京にて大火災を発生させました。鉄塔を数秒で溶かしたことから、吐息の温度は数千度に達するものと思われれます」

説明とともに、当時の悲惨な現状を映し出したモノクロの写真がモニターに次々と浮かび上がる。

「この“息のようなもの”を海中から上方に向けて放った場合、どうなりますか？」別の幹部が質問した。

「高温のため水蒸気爆発が起こる恐れがありますが、数千m上方の海面上にはほぼ影響はないかと」

「やはりゴジラではないのか……」

蒲田良樹・怪防担当相は重い声でつぶやく。

「また、百年前のゴジラの活動においても一つ重要な点があります。その生態活動に伴って、大量の放射性物質が体内から放出されたということです。百年前の解析では、これは核分裂を経た重元素の残骸が分析されています」

「核分裂が百年前のゴジラの動力源だとするのが最近では定説だな。体内に原子炉を持

つ生き物と知ってこれを欲しがる国も多数存在するのも事実だ」

池田議長という言葉に蒲田怪防担当相は頷く。

人類の業によって生まれた怪獣は、人類の欲望の的となっていた。

「で、海中爆発の現場からは放射性物質は検出されたんですか？」

蒲田怪防担当相はついに一番気になっていた事項を尋ねた。

「米国の調査機関が該当海域の水質検査を行ったところ、放射性物質自体の検出はされたのですが、百年前に検出された重元素の残骸とは全く異なるものが発見されました。検出されたのはトリチウム：すなわち“三重水素”。それとヘリウム4とヘリウム3です」

「三重水素とヘリウム：？」

会議室内がざわめく。

「三重水素とヘリウムは核分裂によって生成される物質ではありません。ですが、海中爆発が起きた海域付近で三重水素及び三重水、ヘリウムの濃度が非常に高くなっていたことから、海中爆発との因果関係は間違いなく存在するものと思われます。つまり、海中爆発を引き起こした怪獣の生態活動の結果廃棄物として生じるものと考えるのが最も適当かと思われます」

「三重水素とヘリウム3は地球上にはほとんど自然に存在しない物体だ。つまり、三

重水素が今回の怪物の“排泄物”みたいなものだということか。しかし、なぜ三重水素とヘリウムなんだ……？」

池田議長の言葉に、一瞬沈黙が走る。

「報告書によれば、この怪獣のエネルギー発生源が重水素によるD—D反応と三重水素と重水素によるD—T反応の並行反応、つまり核融合であれば、その合成物として三重水素とヘリウムが生成されるため、この結果を裏付けるものとなります」

「核融合……？」

再び会議室は動揺の渦中に見舞われた。

「馬鹿な……。核融合は核分裂とは条件が全く違う。核融合を起こせるほどの超高温・高圧を維持できる機能が一つの生物に備わっているはずがないだろう！」

有識者の一人が声を荒げて反論する。

「しかし百年前のゴジラでさえ、体内に原子炉をもっているんです。我々の常識を超えた性質を持つのは当たり前のことなのかもしれません」

「しかし……人類が百数十年経っても開発できない核融合炉を、生身の体に持っているなどには信じられない……」

「それに、もしその怪獣の原動力が本当に核融合だとしたら……。そいつは巨大な水爆そのものじゃないか！」

“ 巨大な水爆 ”。

人類が生み出した業そのものに怪獣が変貌を遂げたというのか。

「水素同位体による核融合反応が生体エネルギーの抽出源であれば、重水素は海水から無尽蔵に手に入るから、それこそその怪獣はほぼ無限のエネルギーを持っていることになるぞ……！」

蒲田怪防担当相は重苦しい表情を崩せずにした。

そもそも怪獣という生き物は全てにおいて他の生物とは規格外である。

その生態、対策、駆除法を正確無比に考え付けというのが無理な話だ。

体内に核融合炉をもつ怪獣を如何にして倒せというのか。

「核融合は核分裂よりエネルギー生成効率をはるかに高い。ということは、百年前のゴジラよりも活動時間も吐息の熱量もけた違いに大きくなる恐れがありますね。最悪の場合、多目的シエルターの壁でも熱をさえぎれない恐れがあります」

「あのシエルターでダメなら国民をどこに逃がせというんだ!？」

池田議長の言葉には誰も答えられなかった。

「…と、なれば可能性は一つ。その怪獣がシエルターに到達する前に水際で迎撃し、駆逐するしかない。自衛隊の装備で倒せるのかね?」

「問題ありません」と答えたのは、それまで沈黙を保っていた辻直毅・統合幕僚監部代表

である。

「機密事項のため詳細にお教えすることはできませんが、過去のゴジラの対弾頭防御力を精密に計算し、これに打撃を与えうる最新型徹甲弾及びミサイルの生産を行っております。有事の際にはこれらの弾頭が敵怪獣の皮膚もしくは甲殻を容易に貫通しうると考えています」

「そんなことは何度も聞いています。問題は怪獣が日本に上陸してきたときにどう対応するのかだ」

池田議長は苛立たし気に言いながら机を指でトントンと叩いた。

「失礼いたしました。具体策につきましては、我々統合幕僚監部による綿密な会議のもと、日本のあらゆる海岸を上陸地点に想定し、約500パターンの迎撃作戦を考案しており、また海中爆発があつてから海自では海中搜索を強化しております。いづどこに怪獣が出現しようともすぐに発見し、駆逐することができるよう」

「今回の怪獣は百年前のゴジラよりもはるかに強大であることが予測されるが、それでも倒せるのかね？ 防衛計画を聞かせてもらいたい」

「必ず倒して見せます。今現在計画されている防衛作戦大綱は機密につき発言を控えませんが、考えられる状況に応じて複数の対応策を考案しております。万が一の場合に備え、米軍との連携作戦も視野に入れていきます。怪獣災害から国民を守るため、有事の際

には直ちに統合任務部隊を結成し、陸海空が一体となって戦う準備を整えています。命令さえあれば、自衛隊は迅速に怪獣に致命的な打撃を加えることができます。これだけは確実に申し上げられることです」

辻代表は強い語調で言い切った。

「まさに日本の全戦力を使用した総力戦…というわけか…」

池田議長がつぶやく。



2054年、11月3日。

吉道は、今日は病院によらずまっすぐ帰ることにした。

小幡達と街中をぶらつくという選択肢もなくはなかったが、余計な散財は避けたい気分だった。

街はいつも通りの光景である。

「ですから、我々に残された贖罪の道は滅び去ることだけなのです!」

街の一角で中年くらいの女が胡散臭いことを拡声器で喋っている。

「人類の罪は、もはや取り返しのつかないところまで来ているのです。ゆえに神はゴジラを遣わした！」

吉道は一瞥もせずに街道を歩く。

聞く価値もない戯言だ。

「ねえ、皆さん！ 聞きましたでしょう、ニュースを！ ゴジラは再び現れるのです！」

そして大いなる業火で人類を焼き付くんですよ！」

百年前にゴジラが日本を襲来してからというものの、こういった宗教家崩れが後を絶たないのだということを吉道はたびたび親から聞いていた。

人によって多少の主張の違いはあるが、大抵は“人類は滅びるべし”と身も蓋もない理論を大げさに喚き散らしているのだと。

「そう思うならまずお前が死ねよ！」

喉まで出かかったその言葉をぐつとこらえ、吉道はバスに乗る。

今日は学校で臨時に避難訓練が行われた。

それも、怪獣災害を念頭に置いたものだ。

本来予定されていた午後の授業が取り潰されたことで歓声を上げる同級生もいたが、どうせいつか補講という形で埋め合わせをさせられるのだと知っていた吉道は別段喜ばなかった。

怪獣の避難訓練はハンカチを口に当てる火災訓練や机に隠れる地震訓練よりも簡単で、さっと集まって整列してグラウンドに出るだけである。

本来の予定では、そこから最寄りの千葉高品^{たかしな}多目的シエルターに向かうらしい。

グラウンドに集まった生徒たちは、そこから朝礼のように長つたらしい教師たちの話を聞かされるばかりであつた。

当然、訓練中も訓練後も、吉道の周りの同級生たちは呑気に話す者ばかりだつた。そもそも、今この日本には怪獣などという存在自体に懐疑的な人間がほとんどだ。

百年前にゴジラという名の巨大生物が現れたのは疑いようなない事実であるが、なまじそのような常識外れの生き物がこの世に二体もいるなどということは考えづらい、というのが常人の考えだつた。

吉道もその一人であり、しかし心のどこかで非日常を求める『野次馬』の一人なのだ。

「でも、ああいうのは嫌いだ」

バスの窓からさっきの宗教家もどきを睨みつけ、吉道はつぶやいた。

「ただいま」

少し後、彼は帰宅した。

寄り道をしたつもりはないのだが、家に着いた頃には周りはずっかり暗くなっていた。

日の入りは日に日に早くなっており、晩秋を感じさせる。

「おかえりなさい。ご飯できてるよ」

いつものように母が迎えてくれた。

父親がまだ帰ってないが、料理は温かいうちに食するのが道理であろう。

「……………」

何も言わず席に着く思春期らしい妹・愛菜も交え、夕飯の準備は整う。

「いただきます…」

吉道は箸を運ばせる。

当たり前だが、母の料理はうまい。

食事が始まると同時に母親はテレビのチャンネルを変える。

「おい、今の番組見てたんだけど」

愛菜が不機嫌そうに声を張り上げる。

「ニュース見たいんだもん、我慢してよ」

母親もまた不愛想な声で愛菜の不平を制す。

不穏な空気を抑えようと吉道は何か言いかけるが、愛菜はチツと舌打ちしただけでそ

れ以上何も言わなかったため、言葉を詰まらせて食事を再開した。

「あ、ほら。怪獣情報やつてる」

母が食い入るように見つめた先には、某有名局のニュース番組で取り扱われている速報が映し出されていた。

『速報』 太平洋マリアナ海溝付近で水蒸気爆発の痕跡 米国調査団発表』

「うわー、日本近いじゃない。怖いねー」

母親は興味深そうにつぶやいた。

怪獣にスリルをもとめる自分も自分だが、この母親も大概ではないか、と吉道は思った。

『アメリカの調査機関によりますと、今日未明、マリアナ海溝付近の海底で、高温による水蒸気爆発発生 of 痕跡が発見されたとのことです。同調査機関は怪獣の出現の危険性を呼びかけるとともに「新しい海底火山噴火の可能性も否定できない」としており、さらなる調査を続ける模様です。これに対し桐谷官房長官は先ほど会見を開き――』

ニュースキャスターは緊迫した面持ちで事態を伝える。

「どうする？日本にまた出てきたら」

「逃げるでしょ、そりゃ」

吉道は当然のように答える。

愛菜は未だにムスツとしたまま何も言わず箸を進めている。

「でも多目的シエルターつて入れる人数が限られてるんでしょ？」

「そうだね。ひよつとしたら山奥に逃げた方が安全かもしれないね」

「逃げられるわけないじゃん、渋滞するに決まってるんだから」

「バカじゃないの？と言わんばかりの口調で愛菜が口を挟む。

「…実際、怪獣なんて来たら避難は難しいよね。ひいおばあちゃんとか連れて行くの大変だろうし……」

「助ける意味あんの？どうせもうすぐ死ぬのに」

「お前、その言い方やめろ」

妹の不遜な態度に目を瞑っていた吉道だったが、ここにきて思わずたしなめる。

「そうよ。ひいおばあちゃんは百年前にゴジラのせいでひどい目に遭ったんだから…。またそんなことになったら可哀想じゃない」

母親も吉道に同調した。

「意識ももうほとんどないのに可哀想もクソもあるかよ……」

妹の無思慮なつぶやきを吉道は黙殺することにした。

「今のうちに非常食とか買つていた方がいいのかしらねー」

母親がため息とともに呟いた。

三人の現実味のない防災談義は、数十分後に父親が帰ってきたことで一時の終息を迎えた。

そして、安川一家の団欒は、父親の帰宅の1時間12分37秒後、千葉県九十九里浜沖40km地点において大規模な核爆発が発生し、夜空が紅に染まるまで続いた。

【2054年11月3日 20:37 :千葉県東方沖にて大規模な爆発発生】

人類生存数:92億8656万人

上陸

〔2054年11月3日 20:37〕

この時、千葉県太平洋沿岸部の住民達は奇妙な現象に遭遇した。

一瞬、漆黒であるはずの空に、ぼんやりとした白い光が満ちたのである。

ほぼすべての住民がこの異変に気付き、そして多くのものが外を見まわした。

すると、太平洋の水平線上から、赤く丸い火の玉が、ぼうつと浮かび上がってくる様子を目の当たりにしたのである。

その時には、空は夕暮れのように赤く彩られ、電灯の付いた屋内でも外の異変が分かるようになっていた。

夜空に舞い上がった火の玉は、少しずつ少しずつ大きく膨張しながら、明るさを失って空の黒に溶け込んでいった。

住民たちが、消えていく火球に言葉もなく見とれていた、ちょうどその時だった。

突風が、突然沿岸から陸地に攻め寄せてきたのである。

傘を持った人間ならひとたまりもなく吹き飛ばされてしまいそうな、強烈な台風のような突風が、何の前触れもなく突如として千葉県沿岸を覆いつくした。

住民たちは激しく混乱し、悲鳴と豪風の音だけがひたすら飛び交っていた。

その中に、ほんの微かに、大地を揺るがすような咆哮が混じっていたことなど、誰も気付かなかった。

【20：39

陸地に衝撃波が到達】

そうして初めて、何割かの人間が、沖合で恐るべき規模の爆発が起きたことを認識した。

ある人は慌ただしく避難の準備を始め、ある人はどうすべきか分からずただ怯え、またある人は興味関心をもって爆発が起きた先を見つめ続けていた。



安川家で最初に異変に気付いたのは、父親だった。

「風、強いな」

びゅうびゅうと風の音が鳴る窓の外を眺めながら彼は呟く。

「俺が帰ってきたときはなんともなかったんだけどなあ…」

すると、彼が見ていたテレビから警報音が鳴り、同時にテロップが現れた。

『【緊急速報】 千葉県沖で原因不明の大規模爆発を観測 念のため今後の情報に注意してください 』

「爆発…?」

父親は怪訝な顔で画面を眺めていた。



「20:45頃 内閣危機管理センターが大規模爆発の情報収集を開始」

「状況はどうなっている?」

総理官邸地下・内閣危機管理センターを訪れたのは、その時たまたま官邸に居残っていた桐谷官房長官であった。

「千葉県九十九里東方約40kmの海上で大規模爆発を観測、衝撃波と思われる突風が陸地に到達した模様です」

内閣危機管理監が答える。

「被害状況は?」

桐谷官房長官は空いている椅子の一つに腰かけながら続いて尋ねる。

「まだ確認がとれておりません」

「そうか。爆発の原因として考えられる要因は何かわかるかね？」

次に桐谷は、その場に集められた役員たちに尋ねた。

「気象庁の役員と無線を繋げます」

気象庁と防災無線がつなぐと、向こうの担当役員の声がある場所に響き渡った。

「爆発地点は水深が200m程度と浅く、また非常に巨大な噴煙が衛星写真に記録されていることから熱水噴出孔とは考えづらく、新たな大規模海底火山による水蒸気爆発、もしくは海中核爆発が原因であると考えられます」

気象庁・地球環境海洋部海洋気象課課長がするように述べた。

「海中核爆発……」

桐谷の眉間にしわが寄る。

「しかし、衝撃波が突風となって40km先の陸地にまで到達したとなりますと、海底火山としてはあり得ないほどの爆発規模となります。やはり原因は海中もしくは海上核爆発と考えられないでしょうか？」

同・地震火山部火山課課長が反論すると、役員たちは混乱の様相を呈し始める。

「我が国は核攻撃を受けたのか？」

「しかし弾道ミサイル発射情報は出ていないぞ！」

「核機雷の誤爆ということか？」

「そんなものが我が国の接続水域内にあるわけがないだろう！」

「ここで躍起になってどうする。冷静になりたまえ」

桐谷が一喝すると、紛糾していた議論は一挙に沈静化し、役員たちは自らの向こう見ずさを恥じた。

「総理到着まではあとどれくらいだ？」

「15分ほどです」

内閣官房副長官が答えると、「わかった」と答えて桐谷は立ち上がった。

「総理到着後、すぐに総理レクを始める。引き続き情報の収集にあたってくれ」

「はい！」という内閣危機管理監の返事を背に受けつつ、桐谷は一旦危機管理センターを後にした。

そして慌ただしく人が通り過ぎる廊下を歩きつつ、密かに横を歩く副長官に耳打ちした。

「総理と蒲田君に連絡を。直ちに怪防会の招集を要請したい」



吉道は、いつものようにベッドの上でスマホをいじりながら寝転がっていた。

スマホの画面には、怪獣に関する様々な都市伝説や信憑性の疑わしい情報が並んでいる。

“ゴジラは鉄塔を溶かした”

“その怪獣は東京を一晩で焼き尽くし、数万の人を灰へ変えた”

“戦車砲弾や航空攻撃をもっともしなかった”

「怪獣って、なんだ？」

それは、話を聞くだけではおとぎ話のようなものだ。

まるで小さな子供が強い生き物に憧れて夢想するような、そんな生き物が本当に存在するのだろうか？

存在するのだからこそ、こうして日本史の教科書にも100年前の悲劇が乗せられて
いるのだろう。

それは吉道にもわかっていた。

だがしかし、どうしても彼はそのような生物の存在を信じるができなかった。

ニュースで言っていた、マリアナ海溝の海底爆発についても調べた。

しかし、今一つその原因を特定できそうな情報はない。

もし、本当に“ゴジラ”がいるのなら——

なぜ、100年間もの間現れなかったのだろうか？

1000年経った今、ゴジラを目覚めさせるような何か起きたということなのだろうか？



【21：00頃 吉田総理、官邸入り】

吉田総理が官邸入りすると、直ちに総理レクが開始された。

「———このように、今回の爆発は極めて大規模かつ膨大なエネルギーを伴うものであり、海底火山や熱水噴出孔などの自然現象由来のものとは考えにくいという見解が出されております」

ながしま
永嶋・国土交通大臣が情報を読み上げた。

「他国の戦略原潜の自爆・メルトダウンという可能性は考えられませんか？」

「現場は水深が浅く、原潜が行動できる海域ではありません」

駒場防災担当相の問いかけは、磯谷防衛相に即座に却下されてしまった。

「とはいえ、弾道ミサイルも発射されていないのに核爆発というものの随分おかしい話ですが……本当に核爆発で間違いないのですか？」

金田総務大臣が訝しげに尋ねる。

「核爆発というよりは、“核爆発級の超大規模爆発”と呼ぶのが正しいでしょうが……

そのような爆発がどのようなにして起こるのかは皆目見当も…」

「可能性が一つだけあります」

駒場防災担当相の言葉に、蒲田怪防担当相が答える。

「未知の巨大生物……すなわち、怪獣です」

その一言に、閣僚たちはにわかにざわつき始める。

「やはりか…」

氷川環境大臣が呟く。

「この爆発の状況、先月の南太平洋上海中爆発と似ている。ともなれば、原因は怪獣にあると考えるのが道理だ」

彼の言葉は、皆が内心で感じていたことだった。

「なんだか、この前もこんな議論した気がするなあ」

桜坂財務相が呆れ気味に呟く。

「先ほど桐谷君から怪防会召集の話を持ち掛けられたが、桐谷君もこれを怪獣の活動に起因すると考えているのか？」

吉田の問いに、桐谷は「はい」と答えた。

「過去百年の間に、怪獣の出現の可能性を予報し、海上警備行動を発令した事例は三件あ

りますが、探査機の誤認や軽度の爆発・海水温上昇であつた過去の件とは異なり、今回のケースは非常に大規模のエネルギーを伴う現象が既に発生している他、先月の海中大規模爆発との関連もあります。最悪のケースを想定し、直ちに海上警備行動の発令を行うべきと考えます」

桐谷は簡潔に自身の意見を述べた。

「しかし桐谷長官。今回の爆発は先月の南太平洋上海中爆発で確認された“光の柱”のようなものが確認されておりません。よつて現時点では自然現象の可能性も捨てきれず、悪戯に海上警備行動を発令するとなると野党や世論の反発を招きかねません」と、土井文科相は反対意見を述べた。

「そんな悠長なこと言つてゐる場合ですか！ 件の化け物がいったん上陸なんてしたら、日本はオシマイなんですよ！ 分かつてます？」

すると、桜坂財務相が猛然と土井に詰めかかった。

「落ち着いてくれよ、桜坂君。こんな時に殺気立つちやかなわんよ」

それを駒場防災担当相が何とか押さえる。

「火山の爆発で成層圏まで伸びるキノコ雲ができますかつて話ですよ！ 異常すぎる！

怪獣、もしくは他国の核攻撃の可能性もあるんじゃないの？」

桜坂は苛立ちを押さえきれない様子で、椅子に深く座りなおした。

「核攻撃はあり得ない。ミサイルの発射情報も、該当海域に不審船などが侵入した情報も確認されていない」

磯谷防衛相は改めて否定した。

「原因の究明は後でもできるだろう。今は対応の確認を急ぐべきだ」

吉田総理の言葉を受け、閣僚達は黙り込む。

「怪獣出現の可能性を鑑みて海上警備行動を発令、避難区域を指定し速やかに多目的シエルターへの避難誘導を実施する。異議のあるものは？」

吉田の問いに答える者はいなかった。

「では、閣僚会議を行います。皆さんは至急会議室へ」

桐谷の呼びかけにより閣僚達は席を立った。



【21:15 磯谷防衛大臣が海上警備行動を発令、千葉県沿岸地域に避難指示】

状況が気になった吉田は、もう一度リビングに降りてニュースをつけた。

「ただ今、磯谷防衛大臣は海上警備行動を発令しました。また政府は先ほど、爆発の原因が怪獣である可能性を発表しました。もう間もなく桐谷官房長官が記者会見を開く模

様です」

来た。

吉道が最初に思ったのは、ただそれだけだった。

本当に、来たんだ。

吉道は、自分の心臓がバクバクと脈打つのを確かに聞いていた。

ニュース画面の上の方に、避難指定区域がテロップとなって流れていた。

「うわ……東金も八街も避難区域かよ……こりやこつちもいつ避難指示されるか分かんないぞ」

父が不安げな声でつぶやいた。

「本当に来るんだ……怪物……」

「母さん!! こつち来てー!! 愛菜もー!!」

大声で家族を呼ぶ父親の声も、吉道の頭には入ってこなかった。

【21:17 海上自衛隊館山航空基地より、哨戒ヘリSH-60L(第51航空隊所属)が現場に向け発進】



【21:36 千葉県太平洋沿岸部にて不明物体の目撃情報が寄せられる】

避難指示の発令より、20分あまりが経過したころ。

避難区域である九十九里浜町の住民たちは不思議なものを見た。

月明かりに照らされている水平線上に、黒い何かが浮かび上がっているのである。

「ままー、変なの浮いてるよー」

ベランダから海を眺める幼児が声を上げた。

「ゆうちゃん、お外出ちゃダメ!! 避難の準備終わるまで大人しくしてて!!」

母親の焦燥交じりの叫び声に、幼児はしぶしぶ屋内に戻ろうとする。

だが、その視線は未だに海上の“何か”に向けられていた。

“何か”はか細い月明かりのもとでは視認しにくかったが、岩の塊のように見えた。やがてそれはゆつくりと大きく上に伸びていった。

まるで、海から巨大なものはい出てくるように。

カタカタ、と家が細かく振動し始めた。

「やだ、地震!」

ただでさえ避難準備で慌てている母親は、ますます顔色を悪くした。

それに対して幼児は、揺れていることにも気付かない様子でじつと海の方を見つめていた。

そして母親は、それが断続的な地震ではなく、一定のリズムを刻んで起こる揺れであることに気付く。

その揺れは次第に大きくなっていく。

言葉に表せないほどの未知の恐怖が母親の背筋を撫で回した。

「ゆうちゃん!!!」

母親が叫ぶのと、視界が閃光に包まれるのは同時だった。

雷が光った時のような一瞬の閃光、その光度は太陽にも勝るとすら思えた。

そして、その十数秒後に訪れた絶大な衝撃波が、家屋をはじめすべての構造物を跡形もなく吹き飛ばした。

音速で飛来した瓦礫に叩き潰される直前、親子が最期に知覚できたのは、この世のあらゆる絶望を凝縮したかのような巨大な咆哮だった。

【21:38 二度目の大規模爆発が千葉県沿岸部で観測される】

人類生存数：92億8655万人

決断

二度目の爆発は、火球こそ陸地に届かなかつたものの、絶大な衝撃波は陸地を一掃するに十分すぎる威力を秘めていた。

住宅家屋はもちろん、鉄筋コンクリート造りの建築物ですら破砕され、音を立てて崩れ落ちていった。

人々は驚愕の表情を浮かべる間もなく、瓦礫に押しつぶされて肉塊と化していった。爆発地点付近の海水は瞬時に蒸発し、その高温ゆえに膨大な規模の上昇気流が生まれ、キノコ雲を形作つた。

熱くオレンジ色に染まつた雲が天高く上り、夜中であるにもかかわらず夕方のように明るく周囲を照らしていた。

そのキノコ雲の根元から、海面を割って突き進む黒い影があつた。

この地球上のどのような生物よりも大きく、強く、恐ろしい影。

それが歩いているのは、未だ水深約100mの地点であるにもかかわらず、既に上体は完全に海上に露出していた。

それは、果てしなく巨大であつた。

青く輝く炎のような形状の“背びれ”は、海水に触れた部分が沸騰し、蒸気になるほどの高温を保っている。

黒い岩のような表皮には、不規則な形状の凹凸がいくつも存在している。

それは、人と同じように二足で歩き、人と同じように目や鼻や口を持つ生き物だった。だが、それを見た人間は、誰もそれが自分と同じ“生物”であるとは思わないだろう。純粋な怒りを宿した目には、一瞬にしてそれを見た相手の本能に訴えかける潜在的な恐怖を有していた。

大きく裂けた口には劣悪な並びの歯が並び、短く退化した舌とともに、その生物がもはや捕食を必要としなくなったことを物語っている。

何故、あれほどの規模の爆発とそれに伴う超高温高压を生み出してなおその生物の組織にわずかな損壊の跡さえ見られないのか、人類には到底知ることすらできないだろう。

だが、人類がその生物を眼前にして唯一得られた回答がある。

その生物が、百年前に降臨したあの怪獣王と同形態であるということだ。



【21:53 哨戒ヘリSH-60L、熱源反応付近の空域に到着】

キノコ雲が完全に夜空と同化し、爆発の余韻が消え去った後に、衛星写真を頼りに海上自衛隊の哨戒ヘリが現れた。

荒れ狂う黒雲の下、哨戒ヘリの乗組員達はこの恐るべき生物の姿を目の当たりにした。

あと十数分到着が早ければ、先ほどの爆発の衝撃波に巻き込まれて、一瞬で空を舞う鉄屑へと変えられていたことだろう。

誰もが神話のように考えていた巨大生物は、しかし実態をもって彼らの眼前にたたずんでいたのである。

だが動揺を表に出すことなくパイロットは通信を始める。

「AW、こちら」
BLACK JACK^{ブラックジャック} 1。座標を転送。ゾーン54、456213、

3930497。前方に巨大生物を発見。送れ」

「こちらAW、観測を許可する。送れ」

と、第21航空群本部からの返答。

「了解。観測を開始する」

そう告げるとヘリは大きく旋回し、怪獣から数kmほど離れた空を旋回し始めた。

「BLACK JACK 1、観測映像を転送する」

悪天候でヘリが大きく揺れる中、観測士は懸命にその怪獣の圧倒的威容を映し続け

る。

「目標生物は二足歩行を行い、現在海岸へ向け進行中。背部に鰭のような構造を認む。送れ」

観測士がそう言った直後。

ヘリの乗組員たちは、怪獣の背鰭がぼうつと光を帯び始めるのを確認した。

「……!! 目標生物の背部に発光を確認……わあっ!!」

次の瞬間、思わず鋭い悲鳴のような声が機内を支配した。

「!! BLACK JACK!、回避行動を!!」

緊迫した本部の通信も、機内の隊員たちの耳には入らなかった。

それもそのはずである。

怪獣は、自らの前方に向けて、猛烈な勢いの青白い光を放射したのである。

光は瞬時に空間を突き進み、はるか前方の海面に着水すると、瞬時に海水は弾け飛び、膨大な規模の水蒸気爆発が起きたのである。

青白い光はすぐに止まったが、爆発で舞い上がった蒸気が雨のようになって断続的に周囲に降り注いだ。

その様子はまるで、怪獣が、自分を視察しに来たヘリに自己の力を誇示するかのようであった。

「……」

あまりに現実離れた光景に、ヘリの乗組員たちも言葉を失うほかない。

「こちらAW。BLACK JACK1、状況を報告せよ」

その通信で観測士が我に返る。

「…AW、こちらBLACK JACK1…目標生物は正体不明の光線…らしきものを射出、大規模爆発を認む。これ以上の接近は困難と思われる。送れ…」

「こちらAW、了解。観測を終了し、直ちに該当空域を離脱、帰投せよ」

「BLACK JACK1、了解。帰投する…」

その問答ののち、ヘリは怪獣に背を向けて後方へと退避していった。

瞬時に生み出された圧倒的な“力”を目の当たりにした自衛隊員には、今自分たちが生きていることが奇跡にも等しいとすら感じられたのだった。



同刻、怪防会。

先刻吉田総理の招集で調査活動を開始した怪防会は、次々と押し寄せる情報の嵐に忙殺されていた。

周囲の役員たちが慌ただしく活動する中、先刻の爆発の衛星写真や資料が無秩序にば

ら撒かれた中央の机を挟み、怪防会の幹部たちが真剣な眼差しで議論を行っていた。

「この個体が以前議論した核融合型の怪獣だとしたら、都心部が核攻撃を受け、国家崩壊の可能性があります」

福原副議長の声色には怯えすら感じられる。

「二時間前の爆発、そして先ほどの第二次爆発の規模を考えると、怪獣は先月の南太平洋爆発を引き起こした怪獣と同個体、すなわち核融合型の怪獣と見なしていいだろう」

池田議長はあくまでも冷静に言い放った。

「第二次爆発の大まかな位置から、怪獣はこの一時間で35 kmほどの距離を進んだことになります。このまま進行を続ければ、二時間足らずで都心の中心部まで侵入する恐れもあります」

幹部の一人が報告する。

「我々にできるのは、来る防衛出動の発動に備え、怪獣の情報を少しでも洗い出しておくことだ」

池田の言葉に、しかし幹部たちは暗い面持ちである。

「しかし、現時点では情報が少なく、そもそも怪獣との本格的な交戦は人類有史上二回目であり、前例もほとんどない状態では…」

「ならば黙って怪獣に殺されるというのか!! それで何が怪防会だ!! 自覚を見失うな

!!

福原が鋭い怒号を上げると、池田が「まあ、落ち着け」となだめる。

「冷静にならねば、出る知恵も出なくなる。確実に分かるところから攻めていけばいいだろう」

「議長。核融合によつてエネルギーを抽出しているのであれば、目標生物は体内に核融合炉のような器官を備えているはずです。しかし核融合炉は稼働条件として高温・高圧を必要します」

若手幹部が意見すると、池田が「そうか!」と声を上げた。

「わずかにでも核融合炉に亀裂を与えれば、その亀裂から圧力と温度が逃げ、核融合反応は継続不可能になる。つまり、怪獣の生命活動が停止する可能性があるというわけだな」

「そのように考えます」

「では今の話、統合幕僚監部に伝えさせていただきます」

辻・統合幕僚監部代表が携帯電話を取り出しながらそう言うと、池田は「ああ、頼む」強くうなずいた。

「議長! 海自の哨戒ヘリから、怪獣の全体像の写真が送られてきました!」

その時、役員の一人が彼らの間に割って入るように机に新しい写真の束をばらまい

た。

「ん？ これは……」

その中の一枚を拾い上げてのぞき込んだ池田は驚愕した。

そして、すぐに机に散乱した資料の中からある一枚を取り出す。

「見ろ！ こいつは……」

池田が言うまでもなく、役員たちは全員気付いていた。

「この個体、百年前のゴジラに瓜二つだ……!!」

「なんてこった……」

福原は絶句した。

【21：57 千葉県知事、自衛隊に九十九里町の災害派遣を要請】



ちょうど内閣では九十九里の第二次爆発の報が入り、議論が紛糾していたところだった。

彼らのもとに、海自の哨戒ヘリからの情報が伝わったのである。

「ゴジラ？」

報告を受けた吉田総理は、数秒間絶句した。

「あのゴジラと同個体なのか？」

「まだ詳しいことは分かりませんが、報告では百年前のものと同様の外見的特徴を有する……」

総理大臣補佐官はそれだけ告げた。

吉田は自分の体がぶるぶると震えるのを感じていた。

恐怖、緊張、武者震い、いずれも当てはまる。

いよいよもって本当に日本と怪獣ゴジラの雌雄を決するときなのかもしれないと彼は思った。

「総理、事態急変に伴い、今後の対応を決める必要があります」

桐谷官房長官は冷静に述べた。

「怪獣の実態の確認に伴い、既に内閣官房を通じてJアラートが全国に発令されています。海上警備行動では事態に対応しきれない可能性があり、さらなる対応の拡大はやむを得ないかと思われます」

「防衛出動の発動も視野に入れなければならないということだな……」

吉田の言葉を受け、閣僚達の顔に冷や汗がにじむ。

吉田の言葉が実行されれば、自衛隊創立以来、初の防衛出動の発動ということになる。日本国建国以来の重大な有事に他ならない。

「防衛出動の命さえあれば、自衛隊はどこであろうと必ず侵略者を排除する用意があります。総理、ご決断を」

磯谷防衛大臣が吉田に迫る。

「しかし、怪獣は既に海岸線近くにまで進行しています。防衛出動を発令すれば、沿岸部の逃げ遅れた住民を戦闘行為に巻き込む危険性があります！」

金田総務相が猛然と反論する。

「だが、今こうしている間にも怪獣は内陸部に向けて進んでいるんだぞ！ 早いうちに手を打たねば、後手後手に回って何も追いつかなくなる！」

氷川環境相の指摘に「そうですが……」と金田は語尾をにじませる。

「現状では、もはや逃げ遅れた住民の被害は免れようはなく、黙認すべき犠牲かと」

土井文科相の冷徹な言葉に、「なんてことを言うんだ、君は！」と永嶋国土交通相が義憤する。

「自分は土井さんに賛成ですな。国民の被害を最小限にするには、今すぐにも防衛出動を命じるしかないでしょう」

桜坂は永嶋と金田を睨みながらそう言った。

「……………」

吉田は目を閉じて熟考する。

「時間がありません。総理、ご決断を」

桐谷が迫る。

「…防衛出動は発令する。だが、戦闘区域の住民避難完了を確認するまで攻撃は許可しない。千葉県知事が既に自衛隊の災派を要請しているはずだ。彼らによる被災者の完全救出を待ってからゴジラへの攻撃を開始する。これでいい」

吉田が命じると、磯谷は強いまなざしで了解の意図を返した。

【22：00 吉田総理、戦後初の防衛出動を発令】



【22：00 関東全域にJアラート発動 避難区域拡大】

閣僚会議が紛糾しているころ、安川家はおかしな音色のサイレンを聴いた。

「え、なにこれ!?!」

心の底を揺さぶり、本能的な恐怖心を表側に引きずり出してくるような、極めて不気味で凶悪な音色だった。

“国民保護サイレン”が大音量でなり始めたのである。

「なに、あのうるさいサイレン!？」

愛菜もいらだちを押さえられない様子で二階から降りてきた。

「ちよつと待つて……なんだこりや」

テレビを見ていた父も言葉を失っていた。

先ほどまで臨時ニュースを放送していたのだが、サイレンが鳴り始めると突然画面は暗転した。

そして、真つ暗な画面に「怪獣上陸警報」とのテロップが浮かび上がった。

聞くと、外からはサイレンに続き無機質で機械的な声で防災情報が流されていた。

『怪獣情報。怪獣情報。我が国は現在、未確認巨大生物の攻撃を受けています。直ちに屋内に避難し、テレビ・ラジオをつけてください。放射線被ばくの危険があります。指示があるまで、絶対に屋外に出ないでください。』

その放送内容から、ただ事ではないことがありありと伝わってくる。

「え、見て！ 千葉県全域って書いてある！」

母親が指さした通り、画面のテロップの中に、千葉県全域が避難区域に指定されたことが書いてあった。

「…吉道、愛菜。すぐに荷物まとめて！ 母さんは防災パンフレットもつてきて！ あそここの棚にある！」

「……マジかよ……」

吉道にはそれくらいしか言葉が出てこなかった。

「おい愛菜！　今はそんなことしてる場合かよ！」

「分かつてるよ……うるせえな……」

SNSで友達と話しているのか、いつまでもスマホをいじる愛菜をたしなめると、吉道は荷物をまとめるために自室に戻っていった。

『【速報】吉田総理、戦後初　防衛出動を発動』

慌ただしく避難準備にとりかかる安川家の面々には、もはや新しく表示されたそのテロップなど目に入らなかった。



同刻、防衛省市ヶ谷庁舎地下・中央指揮所。

「たつた今、館山の第21航空群より目標生物の形態について報告と映像が送られました。百年前と同個体の生物で、九十九里から東金方面へ向け海上を進行中とのことです」

統合幕僚監部の一人が報告書を読み上げた。

「統幕副長、総理より防衛出動の下令を確認しました」

「うむ、いいよだな……」

ながの こうぞう
長野功三統合幕僚副長が報告に答えた。

「怪獣の進行速度は予想よりも大幅に早く、沿岸部における水際迎撃”C—4号計画”は不可と判断します。内陸部での迎撃作戦”CB—5号計画”を提言します」

利賀^{とが}・陸上幕僚長の提案に長野統幕副長は大きくうなずいた。

「利賀陸幕長の意見通り、作戦はCB—5号計画で行う。国道468号線を防衛ラインに設定。千葉方面へ移動中の各戦車及び特科大隊をここに配備し、迎撃作戦を実行する。護衛艦隊は東京湾千葉市沿岸部にて待機、岡崎東部方面総監を指揮官とする統合任務部隊の指揮下に入れ。護衛艦隊にはイージスシステム及び対艦ミサイルにて直接火力支援を実行してもらいたい」

「了解しました。既に「むつ」型を主力とする護衛艦隊が横須賀を出港する準備を急がせていますので、準備でき次第至急目標海域へ向かわせます」

幕僚副長の命に、佐々良^{ささら}・海上幕僚長が答えた。

「しかし統幕副長、東金市及び九十九里町の住民避難完了報告を受けていません。住民の避難完了を待たずに攻撃を開始すれば、自衛隊の存続にかかわる恐れがあります」

高木^{たかぎ}・防衛計画部防衛課長の報告に、長野は静かに答える。

「総理からは、住民避難完了まで、各部隊は攻撃は開始せず作戦予定地で待機せよとのこ

とだ。避難完了報告及び総理大臣の攻撃許可が出次第、直ちに攻撃を開始する…ということになっている」

しかし、そう告げる長野の口調は重い。

「仮に総理からの下令の前に目標生物が防衛ラインを突破したとしても、数km圏内であれば468号線上から目標への射撃は可能であります。住民避難完了までの時間は十分に稼げるかと」

おおひら
大平・運用部運用第二課課長が告げるが、長野統幕副長は眉間にしわを寄せた。

「いえ、先の爆発で建物の倒壊とそれに伴う莫大な人的被害が出ていると報告があります。現在展開中の災害派遣部隊は、避難誘導と並行して瓦礫の中に取り残された生存者の救出に当たらなければなりません。短時間での避難完了は困難と自分は考えます」

大平の意見に、井出^い・指揮通信システム部長が反論する。

「私も同意見だ。短期での生存者確認・全員救出は極めて困難。加えて、ゴジラがもう一度同じレベルの爆発を起こせば、救出作業中の隊員にまで累が及ぶ。避難完了後の攻撃という総理の下令は、現場の状況を顧みないものと判断せざるを得ない」

その言葉を受けて、幹部たちは沈黙に包まれる。

「…現在、統幕長が磯谷防衛大臣を通じて総理に災害派遣部隊の一時撤退、そして即時攻撃開始の要求を行っている。その要求が通れば、現場に配備完了した部隊から攻撃を開

始でる」

「…我々の意志が総理に伝わることを祈るしかない…というわけですか」

利賀陸幕長が言うのと、長野は「そうだ」と返した。

「ともあれ、作戦自体は既に発動可能な状態だ。我々にできることを一からこなしにくしかない」

長野は覚悟を問うように幹部全員を見回しながら言った。

「かの能力が未知数である以上、武器使用は無制限を想定する。たとえ迎撃地点が市街地であろうとも、全力をもってゴジラの都内進行を阻止する覚悟で臨んでもらいたい」
はい、と幹部たちの返事を受け、長野は腕時計をのぞき込む。

「岡崎東部方面総監に連絡。現時刻、2215をもって、対怪獣駆逐作戦」呉号作戦の発動を命令する」

【22:15 自衛隊統合幕僚監部、〃呉号作戦〃の発動を下令】

【同刻 呉号作戦統合任務部隊を結成（指揮官は岡崎征爾東部方面総監）

【同刻 在日米軍に作戦通達完了】

登場人物・用語などまとめ（第一部）

・民間人

やすかわ よしみち
安川吉道

性別：男性

年齢：17歳

千葉県千葉市の高校に通う男子学生。物静かで想像力が豊か。成績は中の上くらい。

通称「ミツチー」。

やすかわ あいな
安川愛菜

性別：女性

年齢：15歳

吉道の妹。中学三年生。いわゆる反抗期であり、攻撃的な言動が多い。

ながやま
長山ハル

性別：女性

年齢：108歳

吉道の曾祖母。百年前のゴジラ災害の被害者であり、放射能に被爆したほか、母親を

失っている。現在は病院で寝たきりになっており、会話もほとんど不能になっている。

おばた けんたろう
小幡堅太郎

性別：男性

年齢：17歳

吉道の長年の友人。明るくて活発。時には冷静で現実的な一面ものぞかせる。通称「オバケン」。

・閣僚（第二次吉田第三次改造内閣）

よしだ やすしげ
吉田康重（内閣総理大臣）

性別：男性

年齢：68歳

ICA（イメージアクター）：角野卓造（敬称略）

恰幅のいい眼鏡の男性。正義感と責任感が強くゴジラ対策に執念を燃やす。しかしやや向こう見ずなところがあり、周囲に無理難題を押し付けることも。

かねだ くにと
金田邦子（総務大臣）

性別：女性

年齢：46歳

強気な物言い、有名な女性閣僚。

氷川将嗣ひかわまさつぐ（環境大臣）

性別：男性

年齢：65歳

眼鏡をかけた気難しい顔つきの男性。寡黙で冷静沈着。

駒場均こまば ひとし（内閣府特命担当大臣：防災担当 兼 消費者および食品安全担当）

性別：男性

年齢：60歳

やや頼りない細身で眼鏡の男性。予想外の事態に弱く、まごつくことが多い。

蒲田良樹かまた よしき（内閣府特命担当大臣：怪獣防災担当）

性別：男性

年齢：39歳

閣僚の中では若手。動揺しやすいが、気概は十分。プライベートでもゴジラの生態を

調べている怪獣マニア。

桜坂健信さくらざか たけのぶ（財務大臣）

性別：男性

年齢：56歳

I C A：吉田鋼太郎

髭を生やした男性。軽口が絶えない閣僚内の問題児でよくマスコミにも取り上げられるが、その手腕は認められている。

どいさぶろう
土井三郎（文部科学大臣 兼 内閣府特命担当大臣：科学技術政策担当）

性別：男性

年齢：59歳

眼鏡をかけた神経質そうな見た目の男性。理系出身で、一家代々国務大臣を務めているエリート。冷徹で現実主義者。

いそがい としかず
磯谷敏和（防衛大臣）

性別：男性

年齢：63歳

一般家庭の出身であり、たたき上げの実力派政治家。仕事人気質でありあまり喋らない。

きりたに たかし
桐谷隆（内閣官房長官）

性別：男性

年齢：72歳

I C A : 中尾彬

政界に大きな影響力を持つ大物政治家だが、生真面目で清廉潔白な性格であり多くの後輩から慕われている。吉田政権発足から彼の右腕を務めている。その能力と発言力から「桐谷内閣」と揶揄されることもある。

・怪獣対策防災会議（怪防会）

いけだ かずひろ
池田和宏（議長）

性別：男性

年齢：57歳

I C A : 佐野史郎

正式な役職名は「内閣府怪獣対策防災会議議長」。怪防会の議長で、有名大学出身の元生物学者。物事を客観的に見るのが得意だが、冷静すぎると周囲に評されることがある。

ふくはら けんぞう
福原謙三（副議長）

性別：男性

年齢：48歳

怪防会副議長。元大学教授。研究一本で生きてきた生粋の理系。人づきあいを苦手

としているが、緊急時には優れたリーダーシップを発揮する。

・自衛隊

ながの こうぞう
長野功三（統合幕僚副長）

性別：男性

年齢：56歳

統幕副長。陸将。制服組のトップとして首相官邸に赴いている統幕長に代わり、中央指揮所で統合幕僚監部の指揮を執る。

とが りようすけ
利賀亮輔（陸上幕僚長）

性別：男性

年齢：55歳

陸幕長。呉号作戦の主力を担う陸自のトップ。

ささらの りゆき
佐々良紀幸（海上幕僚長）

性別：男性

年齢：51歳

海幕長。呉号作戦の一翼を担う自衛艦隊を東京湾に派遣させる。

つじな おき
辻直毅（統合幕僚監部運用部運用第二課）

性別：男性

年齢：36歳

統合幕僚監部のメンバー。一等陸尉。統幕監部の代表としてたびたび怪防会に出席している。

・用語

怪獣対策基本法

怪獣の定義とその対策についてまとめられた法律。

怪獣の定義について、

『一般の生物に比べ捕獲及び駆逐が著しく困難・もしくは不可能であり、その対応に武力の行使が問われ、かつその行動に伴う人的・経済的損害が著しく大きいことが予想される生物を“怪獣”と呼称する。』と定めている。

また、国民の安全に重大な危機が及んだ際に必要最小限の実力を行使し、怪獣を駆逐もしくは撃退することを明言している。具体的には、本法では怪獣は無国籍の武力として扱われており、怪獣が領土・領空・領海に侵略行為を行った場合、防衛出動の対象となる。なお、怪獣を武力と同等と見なすのは各国で慣用的に行われている。

また、怪獣の存在が国土領域近郊で露わになり、日本国民に危機が差し迫っていると認められた際、防衛大臣は内閣総理大臣の許可を得て自衛隊に防衛出動待機命令を発令することができる。

多目的国民シェルター

日本国民に降りかかるあらゆる災害の可能性を考慮し、1960年代から各自治体にて建設に着手されている大型シェルター。各種自然災害・核戦争・怪獣災害など、その用途は実に多様であり、「万能シェルター」とも呼ばれている。地下に建設されており高温の炎を浴び続けても中の人間に危害が及ばない設計になっている。政府における防災大綱では、2100年までに全国民を収容しうる数の多目的シェルターを建造することを目的としている。一つのシェルターは東京ドーム二つ分ほどの容積があり、数万人規模の国民を収容できる。

内閣府特命担当大臣：怪獣防災担当

2000年代から内閣に採用されている国務大臣。内閣府に置かれた怪獣対策防衛会議を取りまとめ、また各省と合同で怪獣の生態に関する研究分析の統括を担当する。怪獣に対する対応や怪獣そのものの特徴などには不明な点が多いため、個人的に怪獣に

関して深い知識を修めている”変わり者”がこのポストに就くことが多い。

対生体兵器

怪獣の駆逐・抹殺を目的とした兵器。1954年のゴジラ襲来に際しては防衛隊が出動し戦車や機関砲などで攻撃を行ったが、目視で確認できる負傷は一切見受けられなかった。このことから自衛隊では通常の火器・砲弾ではゴジラに決定打を与えることはできないと判断、生物学的側面からこれに打撃を与えうる兵器の開発を行った。

戦車砲弾については既存のAPFSDSを初めとする徹甲弾の改良を実施し、国産最新鋭戦車である“五〇式戦車”に搭載。また新兵器である“四七式対生体電磁加速砲（レールガン）”の配備も進行中であり、イージス艦への装備が行われた。その他、各分野において対生体兵器が開発されている模様。

怪獣対策防災会議

通称・怪防会。内閣府に置かれた特別の機関であり、二百名程度の職員を擁する。怪獣の生態と予測される災害を研究し、その対応策や駆除方法などを議論する機関である。怪獣の研究に必要と思われる各分野の学者が集められ、また大学や学会などとも綿密な連携を保つことで、怪獣に関する新たな知見の獲得を目指している。議長は認証官

ではないが、内閣府副大臣と同格の扱いを受ける。

定例的に、もしくはは怪獣の行動が原因とみられる異常現象が起きた際、政府首脳に対する研究報告会議を招集する。この会議には内閣総理大臣と内閣府特命担当大臣（怪獣防災担当）が同席するほか、怪防会に所属していない有識者や自衛隊の幹部が呼ばれることもある。

X国

本作に登場する架空の国家。2054年10月某日、南太平洋上にて戦略原潜を用いた洋上核実験を実施した。その数時間後に発生した海中爆発に関しても、当初X国の第二次核実験かと思われていたが、X国首脳部が無関係である旨を表明したことで、人工とは思えないほどあまりにも規模の大きい爆発であったため、怪獣災害と位置付けられるにいたった。

ここ半世紀で急速に軍事的発展を遂げ、それゆえに国際社会から孤立しつつある。核実験の真意は、国際社会への威嚇にあると国連は解釈している。しかし国連による制裁を待つことなく、怪獣災害が発生してしまう。

（作者は、この国家を現実存在するいかなる国家とも関連付ける意図はない。）

・怪獣

ゴジラ（1954年の個体）

身長 50 m

体重 2万トン

第二次世界大戦後の冷戦期、人類の水爆実験が原因で姿を現した巨大生物。元は海棲爬虫類から陸上獣類に進化を遂げつつある中間生物の末裔であり、海中で穏やかな進化を続けていたが、水爆実験によって安住の地を追われ、またその放射線によって急速な進化を遂げ、完全生物となつて人類の前に姿を現した。

その外皮は極めて強靱であり、防衛軍のM24軽戦車の75 mm砲の砲撃においても一切の傷が見受けられず、5万ボルトの電圧に全く動じず、ロケット砲による航空攻撃も効果は皆無だった。さらに、口腔部から超高温の白色の吐息を吐き出し、鉄塔を数秒で溶解するなどの威力を見せつけた。このように、ゴジラは単体の生物としては常軌を逸するほどの圧倒的な戦闘力を有しており、これが後の世に怪獣対策の必要性を強く投げかける原因となる。

1954年某日、ゴジラは京浜地区に上陸。防衛線を突破し、芝浦地区を初めとして当時木造建築が主だった東京の街を火の海に変貌せしめ、国会議事堂や日本劇場など政

治・文化の中心であつた建物を全壊し、東京の機能をほぼ完全に喪失させたのち、海へ戻つた。

一連の死者・行方不明者は6万人に達し、さらに放射能被害による被曝者が後を絶たず、一部の人には“三発目の原爆”と呼ばれるほどの悲惨な被害を出す事態となつた。

もはや人類による駆除は不可能と思われたが、民間の科学者である芹沢大助博士が開発した水中酸素破壊剤オキシエンデストロイの使用によって海中で溶解・完全に死亡した。芹沢博士は酸素破壊剤が核兵器と同様の軍事転用を遂げることを拒み、自らが持つ酸素破壊剤の製造知識とともに海中に没した。

こうしてゴジラは人類の手で完全に駆除されたが、山根恭平博士らの学説では、海中にはゴジラの同種が複数存在し、さらなる核実験とともに同じような災害を世界各国にもたらす可能性を示唆した。ゆえに世界各国は核実験の全面的な禁止を余儀なくされ、一時の平和を見ることができたのである。

芹沢博士は生前、水中酸素破壊剤が大量破壊兵器に転用されることを恐れており、その意を汲んだ関係者によって、水中酸素破壊剤の存在は徹底的に秘匿された。そのため、関係者が死に絶えた現在ではゴジラが死に至つた経緯を具体的に知るものはおらず、漠然と「海中で死亡した」という情報が残っているのみである。

【怪防会及び国連組織による生態研究結果（2054年当時）】

・体組織

一般的な生物と同様、タンパク質を主とする有機化合物であると考えられるが、砲弾にも傷一つつかないほどの異常な耐久性を有しており、予想されるものと全く異なる組成・分子構造を有する物質で構成されている可能性がある。ゴジラの体組織の実物は回収されておらず、現状ではその体組織は未知と言わざるを得ない。

・放射能火炎

白い霧のような極めて高温の息を発し、触れたものを溶解・炎上させる。ゴジラの生物学的攻撃機能であり、判明している中で最も危険な形質である。実際に攻撃を受けた建物の様子から、温度は【2000〜4000℃】程度であると推測される。また、大量の放射線を含んでおり、攻撃を受けた範囲はもちろん、その周囲の被災者にも放射能による原爆症が確認された。

現在、この攻撃の実態は【高温の放射性廃棄物を吹き付けている】という仮説が最も支持されている。体内の核分裂反応の余熱を体外に噴き出し、それと一緒に核分裂の“燃えかす”である放射性物質を吐き出している、というものである。この説は、後述の体内エネルギー生成原理と補完しあうため、支持している学者も多い。

・エネルギー摂取方法

ゴジラは鰓呼吸生物なのか肺呼吸生物なのか、また何を摂食して生きているのか、それは長らく研究者たちの興味を引き付ける研究内容であった。ゴジラの外見には鰓に当たる器官が見受けられないが、海洋生物として深海に生息する以上、肺呼吸生物だと生きていくことができない。また、記録映像の解析によるとゴジラは歯並びが非常に悪く、摂食には不向きな口腔構造を有している。そのため多くの仮説が唱えられ激論が交わされてきたが、1970年ごろに唱えられたとある大胆な仮説が、やがて支持を得るようになっていった。

「ゴジラは体内に原子炉を有し、体内に取り込んだ重元素を核分裂元素に変換した上で、核分裂により生体エネルギーを得ている」というこの仮説は、ゴジラの活動に高濃度の放射性汚染が伴うという事実をも説明づけるものであり、大胆ながら多くの学者たちの賛同を生んだ。この説が本当なら、ゴジラは生態活動のために「呼吸を必要とせず」、摂食も放射性元素の元となる元素を摂取するのみでよいこととなる。しかしながら一個の個体がどのような進化を経て原子炉を獲得したのか、またその原子炉をどのように制御しているか、元素変換機構はどうなっているのか、など数々の謎が未だ明らかになっておらず、今後の研究が待たれるところである。

・知性・社会性・意思

人類とゴジラの最初の接触以降、ゴジラが明確に人類に対して対話・及びそれを思わ

せる行動を取ったことは確認されていない。また、ゴジラが体内から発信した物理的情報は咆哮と放射能火炎のみであり、少なくとも人類と共有可能な言語は有していないとされている。そのため、ゴジラとの対話・交渉は基本的に不可能であると各国調査団は結論付けている。

またその行動は「海中から地上に上陸、東京を闊歩しつつ建物や人間を攻撃した」のみであり、攻撃が本能によるものなのか、攻撃そのものを目的として上陸したのか、一切分かっていない。ゴジラの目的について、

①ゴジラの行動に明確な理由はなく、“とりあえず”地上に現れ、“気まぐれ”に街を歩き、その過程で進路に現れた建築物や人間が邪魔であったから攻撃した

②核実験を“自身に対する攻撃”であると認知しており、防衛本能の一環（または人類に対する復讐心）として人間を攻撃した

③核実験によって急速に進化した自身の能力を“試す”意味で、人工物の密集した東京に上陸した

などが挙げられているが、いずれも仮説の域を出ない。ただし、②については、山根博士らによってゴジラが核実験によって住処を奪われた生物であるらしいことが判明して以来、一定の支持を受けている。

社会性については、ゴジラが他の同種の個体と接触する様子が見受けられなかったた

め不明である（そもそも同種の他個体がいるのかどうかも不明だが、ゴジラの元となった深海生物は多数存在することが山根博士らによって示されている）。

個体の行動の様子から、知性は爬虫類から初期哺乳類のレベルに収まるとされているが、あえて人口密集地を選んで攻撃した可能性も示唆されており、人類に及ぶかそれ以上の知性を有する可能性も秘めていると主張する科学者もいる。

・身体能力

ゴジラは生物としては並外れた体格のため、腕力や脚力といった生物学的基本ステータスにおいても常識外れの数値が予測されており、実際にそれを裏付けるような行動も行っている（鉄筋コンクリートの建物を素手で叩き壊す・橋を体当たりだけで破壊するなど）ため、放射能火炎がなくなるとも生物的な行動を取るだけでそれ自体が強大な災害になりうるという指摘がある。尾による強打も非常に強力であると予想されており、一部の生物学者からは、尾が全力で直撃すれば東京タワーなどもへし折られる可能性がある」と警告されている。

またゴジラの貴重な生態として「強い光に反応する」というものがあるが、この性質を可能とするために非常に高い視力を持っている可能性がある。一説では「ゴジラは核実験を受けて以降、核爆弾が生み出す強い光を恨んでいる」と言われているが、これが真実であれば深海でも水爆の光を捉えられていたことになり、きわめて強力な視力を持

つことが裏付けられる。

第二部 蹂躪、その果てに 神話

木更津駐屯地・ヘリ発着場。

「――先に述べた通り、これは我々にとつて初となる実戦である。敵の能力は全く未知数であり、百年前から大幅な進化を遂げている可能性がある。よつて、本作戦は敵の猛烈なる反撃、強力な放射線とその急性障害により、隊員の高い損耗率が予想される」東部方面航空隊・第四対戦車ヘリコプター隊隊長・大松勇二おおまつ ゆうじ二等陸佐は目前に整列する部下達に訓示を行つていた。

「参加者には特別に用意された対放射能防護服とマスクを着用して任務にあたつてもらうが、それでも戦死・急性被曝の可能性は十分にあると言わざるを得ない。よつて、今回の任務参加者は志願制とする」

隊員たちは口を堅く結び、大松二佐の言葉に耳を傾けていた。

「私は隊長として当然参加するが、諸君らにも家族がいるだろう。参加を辞退したとしても、その判断を非難するつもりはない。私は諸君らの選択を尊重する」

そして、一呼吸おいて命ずる。

「全員、目を瞑れ！ 参加希望者は挙手！」

五秒間、大松は顔をおろした。

その後ふつと顔を上げると、隊員全員の手が寸分の狂いもなく天に掲げられていた。

「手を降ろせ。目を開けてよし」

「全員が希望という結果となったので、隊員の選出はこれまで通りローテで行う。諸君らの救国の志に感謝する」

大松は少しの間沈黙して次の言葉を考えていた。

「隊長。我々は入隊した時より、この国を守るため、命を捧げる覚悟はいつでもできています」

沈黙を破るように、隊員の一人が声を張る。

「自分もです！」「自分もであります」

隊員の言葉につられて、次々に彼らは己の覚悟を語る。

「…諸君の覚悟は十分この胸に届いた。感慨無量の思いである。我らは日本を守る強固にして最後の盾。強大無比たる巨大生物が立ちはだからうと、その任を全うする意思に幾分の迷いもあつてはならない。日本を、日本に生きる命を、断固として死守せよ！」

「了解！」と隊員たちは大松の言葉に答えた。

大松は一息おいて次の言葉を話し始めた。

「……ここからは、隊の意志とは別に私個人からの訓示を述べる」

大松がそう言うと、隊員たちの表情はさらに引き締まる。

「諸君には、次なる任務として災害派遣が残されている」

大松は隊員全員の顔を一人一人見回しながら告げる。

「自衛隊の任務は敵を倒すことだけではない。我らの本懐は、災害に苦しむ日本国民を、一人でも多く救うことにこそある。この次の任務こそが正念場。…であるからには、貴様らはここで死んではならん。必ず生きてここへ戻るぞ。いいな！」

「了解！」

隊員たちの返事を受けると、「訓令、以上。散っ!!」と号令し、大松は訓示を終えた。

「気をつけ！ 敬礼！」

敬礼する部下たちに答礼を返すと、彼らは解散し、出撃に備えはじめた。



一方、先の爆発で建物が廃墟と化した九十九里町では、自衛隊普通科連隊と消防、警察が一体となって災害救出任務にあたっていた。

「誰かいますかー!! いたら返事をお願いします!! 誰かいますかー!!」

懸命に消防隊員が瓦礫の中に声をかける。

「家屋倒壊多数、瓦礫の散乱により短期間での生存者搜索は困難!! 部隊の増援を要請する!! 送れ!!」

普通科隊員が無線機に向かって怒鳴る。

その時だった。

ドン、というわずかな振動が、その空間を一斉に揺らした。

「!?」

瓦礫をどけようとしていた隊員達は手を止め、あたりを見回す。

ドン、ともう一度同じ振動が、今度は先ほどより強く彼らを襲った。

「隊長ーっ!!!」

自衛隊員の一人が悲鳴に近い声で叫んだ。

中隊長は言葉をかける余裕もなくその隊員の元へ駆け寄った。

その隊員は海を見ていた。

水平線上に、大きな黒い影が蠢いていたのである。

ドン、と鈍い音と振動を伝えながら、確実に内陸に向けて進行していた。

「ゴ、ゴジラだ……! 本当にいたんだ……!」

消防隊員の一人が後ずさりしながら上ずった声で言った。

「連隊本部へ報告!! 総員、戦闘準備急げーっ!! 携行火器、射撃用ー意!!!」

中隊長が声を枯らさんばかりの勢いで叫ぶ。

「救出した生存者を後方へ！」

「警察と消防の皆さんは直ちにここを離れてください！ 急いでください！」

「だが、まだ瓦礫の中に人がいるかもしれないんだぞ！」

「命令もなしに持ち場を離れることはできません！」

やがて、部外者を避難させようとする普通科隊員と消防・警察らのもみ合いが後方ではじまり、場は騒然としていた。

その場にいる全員が死を覚悟した。

中隊長が何か言おうとした時、突如として地面の振動が止まった。

「隊長！ ゴジラが進行を停止！ 立ち止まっています！」

「なんだと？」

中隊長が瓦礫から身を乗り出して見てみると、九十九里の砂浜から2000mほどの海上で、ゴジラは立ち止まっていた。

小さい目はどこを見ているのか分からないが、ゴジラは息遣いまでも聞こえるほどに彼らの近くまで来ていた。

「なんと巨大さだ…… 報告では50mと聞いていたが、あれが50mのはずがない。どんなに小さく見積もっても2000mはあるぞ……」

そう呟く中隊長の頬を、冷や汗が垂れ落ちていった。

「小火器では傷一つつけられないでしょう。我々の装備する最大火力である対戦車誘導弾でも、有効打を与えられるかどうか…」

望遠鏡でゴジラの全貌をまじまじと見ながら隊員が呟く。

「退却の命令がない限り、ここを放棄するわけにはいかない。できるだけのことをやるしかないだろう」

「しかし、この街をこんな風ににした規模の爆発がまたいつ来るかも分かりません。一応怪防会からは超大規模のエネルギーの連続消費は不可であると通達されておりますが…」

「怪獣の体の中のことなど誰にもわからん。奴がその気になれば、我々など細胞一つ残さず消し去れるということだな……」

あまりにも死が目前にありすぎるためか、中隊長も隊員も恐怖を通り越し、冷静さを保っていられた。

中隊長は隊員から望遠鏡を借り、ゴジラの全貌をのぞき込んだ。

「あの化け物め……何を考えている……？」

【22：40 ゴジラ、進行停止】



同刻・首相官邸。

「ですから総理、被災した九十九里町の住民を短時間で救出するのは困難です。何卒、災害派遣部隊の一時撤退と迅速な攻撃命令をお願いいたします」

首相官邸では、井村長俊・統合幕僚長が吉田を説得していた。

「しかし……逃げ遅れた市民を見捨てて攻撃開始など……」

吉田は重い表情で渋っていた。

「総理、このまま攻撃せずにゴジラが内陸部に進行すれば、人的被害が尋常でなく拡大する恐れがあります。心中お察し申し上げますが、ご決断を」

磯谷防衛相も井村とともに吉田に迫った。

「先ほど、東金市と大網白里町より住民避難完了報告が届きました。九十九里の災害派遣部隊が撤退すれば、攻撃はすぐにでも始められますが……」

金田総務相が吉田に告げる。

「ううむ……事ここに至っては致し方ないか……」

「国を守るためには、時として冷徹な判断も必要です。ゴジラを迅速に駆除・撃退し、しかる後に災害派遣を再開しましょう」

桐谷官房長官の言葉を受け、ついに吉田は決断する。

「…分かった。九十九里の災害派遣部隊に撤退を命じよう」

「了解しました！」

井村が勢いよく答える。



【22:47 九十九里災害派遣部隊に撤退命令が下る】

「隊長！ 連隊司令部より、即時撤退せよとの通達です！」

依然として生存者搜索と海上に立ち尽くすゴジラとのにらみ合いを続けていた災害派遣部隊に、遂に撤退の命が下った。

「なに!? では搜索は打ち切りということか？」

中隊長は驚きの声を上げた。

「生存者搜索と遺体回収作業は一時中断、なんとしても全部隊の撤収を終えろとのことですよ！ たった今、統合幕僚本部が攻撃開始時刻を2400で決定したと連絡がありました。もう時間がありません！」

「……是非もなし」

悔しさを帯びた声でつぶやくと、中隊長はブルーシートに遺体の破片を並べる部下た

ちに声をかけた。

「各隊、集合ー!!! 本部からの撤退命令である!! 作業は即時中断!! 救出民とともに最寄りの多目的シエルターへ向かう!!」

まだ瓦礫の中で助けを求める命が残っているかもしれない。

亡くなられた遺体をこの場に残して吹き曝しというのも、あまりにも残酷だ。

そうした中での撤退は、彼らにとって十分すぎるほどに心痛いものだった。

しかし、躊躇いを抱く暇はない。

先に後方へ避難を始めた消防警察の後を追うように、彼らも後方へと撤退を開始した。

「ああーっ!!! 嫌ああああ!!!」

救出された女性が、ブルーシートの遺体の一つに縋りつき、泣き叫んでいた。

縋りついている遺体には、上半身がない。

瓦礫に叩き潰されたのだろうか。

この女性も遺体の男性も、つい二時間ほど前まではなんというこのない幸せな家庭だったはずだ。

「間もなくゴジラへの攻撃が開始されます!! ここに残つては危険です!! 奥さん!!」

そんな女性を、隊員の一人がやつのことで引きはがし、半ば強引にトラックへと連

れてゆく。

やりきれない感情を込めた拳を震わせながら、中隊長は海岸にたたずむゴジラへと振り返った。

不気味に直立不動を保つそれは、まるで“待っている”かのようなだった。

人間が全力で自分を駆逐するのを嘲笑うかのように、人間の戦力が整うのを“待っている”のだ。

「借りは返すぞ……必ず……」

吐き捨てるように言う中隊長はトラックへ向かって走り出した。

【23：18 青森県三沢航空基地より第三航空団第三飛行隊が離陸】

【23：25 木更津駐屯地より第四対戦車ヘリコプター隊が発進】

【23：30 石川県小松航空基地より第三〇三飛行隊が離陸】



荒天の中、ヘリコプター隊が木更津の空を東へ飛んでいく。

住民が避難した中、彼らを見送るのは発着場から敬礼を送る隊員のみであった。

“神”との戦いの一番手を担う、大松をはじめとする隊員たちは、どのような思いだったのだろうか。

アパッチは、一挙に列をなして九十九里へと飛んでいった。

「アパッチ1、現着まで10分。送れ」



【23：34 東部方面隊45式機動戦闘車大隊、国道468号線に展開完了】

【23：42 富士教導団特科教導隊及び戦車教導隊、国道468号線付近に空挺完了】

【同刻 米国防省が緊急声明を発表 日本への支持を表明】

【23：45 護衛艦隊第一護衛群第一護衛隊及び第二護衛群第六護衛隊、東京湾千葉港近海に展開完了】

東京都練馬区・朝霞駐屯地練馬分屯地。

東部方面総監部。

「機動戦闘車部隊の展開完了を確認。対戦車ヘリ部隊は現場空域で待機中。空挺を終えた戦車及び特科部隊も現在防衛線へ向け移動中、間もなく展開完了する見込みです」
伊勢・東部方面総監部防衛部長が報告する。

「ゴジラの動向はどうか？」

岡崎征爾東部方面総監が問う。

「撤退中の災害派遣部隊からは、未だ動きなしとの情報が入っています」

「分かった。作戦は予定通り2400に開始する。怪防会からの報告に基づき、攻撃個所は核融合炉を搭載する胸部と腹部に限定。総理の下命を確認後、直ちに作戦第一段階を発動する。今一度全体に通達！」

「了解！」

「總監。ただ今隷下の部隊より、災害派遣部隊と救出民の完全撤収完了を確認いたしました」

なかた
中田・東部方面幕僚長の言葉に、岡崎は「うむ」と強くうなずいた。

運命の時が刻一刻と、日本に迫っていた。

【23:54 富士教導団部隊、国道468号線上に展開完了】



首相官邸地下。

閣僚たちが固唾をのんでスクリーンを見守る。

スクリーンの中では、観測ヘリがゴジラの遠望を映し出していた。

「あれがゴジラ………本物か………」

吉田は重い声を発しつつ、真正面からゴジラを睨んだ。

「報告よりもかなりデカいぞ、あれは……！」

氷川環境相が驚くのも無理はなかった。

目前に立つゴジラは、報告されていた50mとはかけ離れて巨大であるのが、付近の景色との対比だけでも明らかだったからである。

「あんな生き物がこの世に存在するってのか……。神サマか何かかよ、あいつは……」
桜坂財務相すらも怯えを含んだ声を漏らしていた。

「神との戦い、か……。まるで神話だ……」

駒場防災担当相が震える声で言った。

「たとえ相手が神であっても、日本を守り、導くのが我々の仕事です」

土井文科相が無機質な声で言った。

「総理、時間です」

桐谷官房長官が告げた時には、時計の針は24:00を指していた。

吉田は、ふう、と一度深呼吸をした後、一気に吐き出すように言った。

「呉号作戦統合任務部隊へ。本時刻をもって、全部隊に武器の無制限使用、及び攻撃を許可する」

「全部隊へ。呉号作戦第一段階を発動せよ。攻撃開始」

吉田に続いて井村が命じた。



「総理と統幕長の下命を確認！」

「呉号作戦第一段階を発動。威力偵察部隊、射撃開始。繰り返す。射撃開始。送れ」

総理に続き、岡崎も攻撃開始を命じる。

「11月4日 0:00 呉号作戦第一段階、発動」



同刻、九十九里町沿岸部。

「了解。アパッチ1、射撃する」

戦闘ヘリAH-64Eのパイロットはそう答えると、照準器をのぞき込む。

スコープの先には、未だ余裕綽々と言わんばかりに立ち尽くす黒い巨神の姿があった。

「距離800。目標、巨大生物胸部。射撃開始！」

狙いを定め、トリガーを引くと、30mm機関砲が爆音をあげながら猛烈な勢いで弾丸を射出した。

まっすぐ標的にむけて飛来していった弾丸はその速度のままゴジラの胸部に激突し、表皮に弾かれて虚しく海面に落下していった。

第四ヘリコプター隊のアパッチ全機の集中砲火は十秒ほど続いた。

『こちらCP、効果を報告せよ』

「こちらオメガ1、機関砲掃射を実施。目標健在、未だ効果なし。送れ」

付近を飛行する観測ヘリが本部に効果を報告する。

すると、それに呼応するかのようにドン、と地響きが鳴った。

ゴジラが再び動き出したのである。

「目標生物、活動再開!!」

ヘリ隊が機関砲の第二射を行う中、ゴジラは悠然と砂浜に足をつけた。

遂に、日本の陸地へと足を踏み入れたのである。

そして、羽蟲を見下ろすかのような目で自らを攻撃するヘリ部隊に目をやると、大きく口を開けた。

次の瞬間、この世のすべての恐怖を凝縮したかのような咆哮が、全空間を支配した。

その咆哮は、ヘリ部隊のパイロットたちはもちろん、戦闘の趨勢を見守る東部方面総監部や中央指揮所、首相官邸にも響き渡った。

音の波動だけで地が震え、大気が波打つほどの咆哮は、聞くものを唖然とさせるには

十分だった。

「こちらアパッチ1。誘導弾の使用の要あり。許可を求む。送れ」

しかし、そのような巨神を目の前にしてもなお、隊長・大松二佐は冷静に本部へそう告げた。

【0：04 ゴジラ、活動再開】



「怪物め……やはり機関砲では傷一つつかぬか……」

岡崎東部方面総監は冷や汗を流しながらつぶやく。

「総監、既に総理の許可は下りています。直ちに誘導弾の使用を命じましょう」

中田幕僚長に言われると、岡崎は「……そうだな」と答えた。

「アパッチ、攻撃を誘導弾に切り替えろ」



「了解。攻撃を誘導弾に切り替える」

ゴジラは次第に歩行速度を上げ、まっすぐにヘリ部隊の方へ向かっていた。

「目標接近中、アパッチ4からアパッチ7は側方へ退避。アパッチ1、誘導弾射撃開始。送れ」

ゴジラの進路を開けるようにヘリが側方へ退避すると、ヘリ部隊が左右から挟み撃ちする格好となった。

「距離よし。発射用意！発射！」

隊長の合図で、全機一斉に対戦車ミサイルを脇から脇腹に向けて射出した。

ゴジラの体が爆炎に包まれる。

「全弾命中。目標、未だ進行中」

観測ヘリが状況を通達する。

「第二射、発射！」

無数のミサイルがゴジラの体に突き刺さり、爆発する。

その時、ヘリの隊員たちは信じられない光景を見た。

攻撃を受けるゴジラの背鰭が、ぼうつと淡い光を帯び始めたのである。

数時間前の海自の哨戒機の戦訓から、それが何を意味するのかを彼らは知っていた。

「目標、背部発光！ 全機攻撃中止、回避行動始め！」

隊長の命令とともにアパッチは編隊を組んでゴジラの背後に回り込む。

次の瞬間、ゴジラの口からまばゆい光の柱が噴き出た。

光は衝撃波を伴いながら地面に着弾し、凄まじい高温で地面を気化し、一瞬で抉るように大穴を穿った。

地上の建築物など跡形も残るはずがなかった。



「なんだ、あれは…?!?!」

蒲田怪獣防災相が悲鳴のような声を上げた。

「百年前と見た目も威力も全く違う…!! やはり先月の“光の筋”はあいつが…!!」

一瞬にして、閣僚達は驚きと恐怖に包まれた。

「ああ……まるで本当の神様だ……」

駒場防災担当相が泣きそうな声でつぶやいた。

「あんなに簡単に地面を溶かすとは……あれじや多目的シエルターも意味をなさんぞ！」

永嶋国土交通省が言った。

「あんな……あんな核兵器に手足が生えたみたいなのやつがいてたまるか!!」

そんな桜坂の言葉を聞きながら、吉田はただ食い入るようにスクリーンを注視していた。



「総監、敵の打撃力は予想以上です！」

中田幕僚長が驚愕を含んだ声を上げた。

「ヘリ部隊は直ちに退避させろ！ 作戦を第二段階に移行する！」

岡崎はあくまでも冷静にそう命じた。

「了解、威力偵察隊は撤退させます！」



「こちらアパッチー。攻撃を再開する」

敵の圧倒的な戦闘力を見ても少しもひるむ様子を見せないヘリ部隊は、ゴジラの背後から再度ミサイルを放つ。

『こちらC P！ アパッチ、全機直ちに現場空域を離脱！ 帰投せよ！』

本部からの命令が出た直後だった。

熱戦を吐いたままのゴジラが、一挙に振り向いたのである。

そして、回避行動を取ろうとしたアパッチの一機が掃射に巻き込まれ、一瞬で雲散霧消した。

!!!

戦闘に参加する者、戦闘を見守る者、全てに衝撃が走る。

前回のゴジラ上陸以降、日本史上初の“戦死者”が出たのである。

「……了解、これより帰投す」

そう言いかけた機体もゴジラの掃射を浴びて四散した。

『こちらC P、全機直ちに退避せよ！』

祈るような本部の声に、大松隊長機が「了解、帰投する」と答えた。

ゴジラは首を少しひねるだけで、容易に延長線上にいるヘリを撃ち落としていった。

他機が後退する中、大松機だけは最後の一発までミサイルを撃ち尽くし、ゴジラの注意を引き付けた。

「全機、回避運動を怠るな！」

ヘリ部隊は機敏な動きでゴジラの攻撃をかわそうと試みるが、ほぼ無限の射程と貫通力を誇るゴジラの熱線は、どれだけ離れようとも簡単にヘリ部隊を餌食にしていた。

人間は一人も生かして帰さぬと言わんばかりに、ゴジラの攻撃は執拗だった。

流れ弾は山を貫き、森を焼き、九十九里の街を溶解した土が流れる紅炎の地獄へと変貌せしめた。

災害派遣の再出動は、もはや不可能であった。

弄ばれるように一機、また一機と四散し、遺体すら残さず消え失せる一方だった。

やがて、最後に残った隊長機も機の一部に熱線を浴び、操縦系統を喪失して墜落を始

めた。

『アパッチー、脱出しろ!!』

しかし機体は激しく炎上し、脱出機構は作動しなかった。

「無念……」

その言葉に、大松のすべてが込められていた。

熱い、と大松が思いはじめた直後には機は地面に激突し、大松の体は黒炭となってそこから中に散らばった。



「第四対戦車ヘリコプター部隊及び観測ヘリコプター部隊、全滅……」

東部方面総監部に悲痛な報告が届いた。

「……残念です……」

中田幕僚長がこみ上げる感情を押し殺しながら言った。

「……作戦第二段階を発動する。特科全部隊、射撃開始」

幕僚長の言葉には何も言わず、岡崎はただ命じた。



夜中であるにもかかわらず夕暮れ時のように赤く明るくなった世界を、巨神が闊歩していく。

九十九里町の多目的シエルターニ基がゴジラの攻撃の巻き添えとなって破壊され、溶けた金属が濁流となって居住区を埋め尽くしていることなど、誰にも知る由もなかった。

【0：21 呉号作戦、第二段階へ移行】

人類生存数：92億8653万人

覚悟

呉号作戦第一段階発動からやや時はさかのぼる。

千葉市では屋内退避指示が解除され、代わりに多目的シエルターへの避難指示が発令された。

「よし、必要な荷物は持ったね？　じゃあ行こう」

父の言葉を受けて、吉道たち家族は荷物を背負って外に出た。

外には、避難する人々が道を埋め尽くすくらいにごった返していた。

交通の混乱を防ぐため車での避難は禁止されており、住民は消防や警察の避難誘導を受けて徒歩で多目的シエルターへと向かっている。

「本当に怪獣なんているの……？」

愛菜の苛立ちの混じったつぶやきにため息をつきながら、吉道は父の背中についていった。

「人混みが多いからはぐれないように注意しろよ！　俺は途中でひいおばあちゃんを迎えに行くから、三人はマップ見て先にシエルター行つてて！」

「はーいー！」

喧騒の中で放たれた父の声を辛うじて聞いていた母が答える。

「でも、こんなに人がいて入れるかな……」

周囲の人々の流れに目をやりながら母が呟く。

「締め出されるかもね、うちらだけ」

愛菜が相変わらず嫌味を言うと、母は「そんなわけないでしょ」と冗談っぽく笑った。我が家の女子は二人ともなかなかタフな精神だなと吉道は思った。

やがて、歩みを進める人々は、上空から何か物音がするのを耳に拾った。

吉道も何かに気付いて上を向くと、そこには驚くべき光景が広がっていた。

見たこともないほどの数の航空機の群れが、列をなして東の空へと飛んでいるのだ。

これが昼間の空であつたなら、それらの機体に赤々と日の丸マークが描かれていることも確認できただろうが、あいにくの暗闇の中では吉道の目にはそれらしいものは見えなかった。

しかし、誰が言い出したか、「自衛隊だ！」「自衛隊の輸送機だ！」というざわめきが群衆の中に広がっていた。

吉道は改めて目を凝らして航空機の群れを見たが、やはり機体の灯火以外は暗くてほ

とんど見えなかった。

だが、数が多いことやゴジラが出現したと言われる方角に飛んでいることから、確かにそれが自衛隊の機体であることを確信した。

「頑張れー!!」「お願いしますー!!」

人々は上空を進む自衛隊機に、手を振ったり声援を投げかけたりしていた。

「ほら、吉道！ はぐれちゃうよ！」

いつの間にか茫然と立ち尽くしていた吉道は、母の声で現実に取り戻され、人の流れの中に混じっていった。



【11月4日 0:20】

怪防会。

「第四対戦車ヘリコプター小隊、全滅との報告です…」

辻統合幕僚監部代表の報告に、怪防会の面々に沈黙が走る。

「どういうことだ!?! どんな怪獣でも倒せるんじゃないのか!?!」

動転した役員の一人が辻に詰め寄る。

「最新鋭の対戦車ミサイルが効かなかったのだ!! 奴の外皮の防護能力は予想をはるか

に超えている!!」

「だから何故それを予測できてないんだ!! 何のための百年だったんだ!!」

「やめないか、君達」

いきり立つ両者の間に池田議長が入り、興奮していた両者は距離を取って一呼吸おく。

「ゴジラの外皮の組成は分からないが、それほどの硬度を誇るならば、核融合炉を損傷させて反応を停止させる計画は非現実的かもしれないな…」

福原副議長が眉間にしわを寄せて呟く。

「しかし現時点ではそれ以外に明確な駆逐方法はありません。自衛隊の攻撃が通ることを祈るしかありません…」

「…まだ作戦は第一段階です。機甲科と航空部隊の攻撃ならば確実に奴を倒せるはずですよ……」

辻はそう告げたが、一同の重い表情が変わることはなかった。

「…百年前のゴジラを倒したのは、いったい何なんだ…?」

池田の問いに答えられる者はいない。

オキシジェン・デストロイヤー

百年前に怪獣王を葬った最恐の兵器、水中酸素破壊剤は、開発者である芹沢博士の意を汲んだ関係者によって存在が秘匿され、誰にも知ることはできなくなった。

核兵器に次ぐ大量破壊兵器である酸素破壊剤を世界に拡散させないための判断だったが、それによって後世の人間は唯一無二と言ってもよい“確実なゴジラの倒し方”を見失ってしまったのである。



「観測機墜落に伴い、衛星観測と防衛ラインからの直接観測に移行」

「現在目標生物は九十九里町市街地を進行中、間もなく東金市に侵入。送れ」

「了解。」 200 m 自走榴弾砲^S、射撃用意！」

^{まつだ}松田・富士教導団特科教導隊第一射撃中隊長が命じた。

国道468号線上に整然と並んだ各中隊の榴弾砲が一斉に砲身を上げる。

「目標、敵胸部！ 距離7600！ 発射五秒前！ 四、三」

榴弾砲の砲身は天空を睨み、数km向こうの大敵との戦いを今か今かと待ちわびているようだった。

「二、一、^{フタ ヒト}今！」

その瞬間、200 m 榴弾砲が一斉に火を噴く。

「弾着まで15秒！」

ゴジラは、相変わらず紅蓮に染まった九十九里を歩き続けていた。ただ純粹な“怒り”に身をゆだねて、まっすぐに一歩ずつ。

「五、四、三……弾着、今!!!」

観測士が叫んだ瞬間、ゴジラの体は猛烈な爆炎に包まれた。

一瞬で体全体を覆い隠すほど天高く舞い上がった業火は、すぐに夜空へ消えていった。

その中から、ゴジラは悠然と姿を現す。

「全弾命中! 目標、以前進行中! 進路、速度に変化なし、送れ!」

「次弾、射撃用意!」

すぐさま松田中隊長が命じる。

榴弾砲部隊と時を同じくして第六射撃中隊の“38式地对艦誘導弾システム”が射撃を開始。

富士駐屯地に残った第五射撃中隊の多連装ロケットシステム“MLRS改”も長射程ミサイルにて攻撃を開始。

十数両のMLRS改が一齐にミサイルの弾幕を打ち上げる様は、半世紀以上前の湾岸戦争を髣髴とさせた。



首相官邸地下には、ゴジラとの戦闘映像がリアルタイムで映し出されていた。

「ヘリ部隊が全滅とは……。ついに我が国から戦死者を出してしまったか……」

吉田が視線を下に落として無念そうにつぶやいた。

「これが…怪獣……」

蒲田はモニターを見ながらわなわなと振るえていた。

モニター上では作戦第二段階が発動され、ゴジラが特科部隊の猛攻を受けている姿が映し出された。

「統幕長、今後の作戦展開はどのように？」

桐谷官房長官が井村統幕長に尋ねる。

「第二段階は特科と戦車部隊による攻撃、第三段階は航空部隊による空爆、それでも目標生物の進路に変化がない場合、第四段階として千葉港付近に配置された護衛艦隊による誘導弾攻撃を実施する予定であります」

「なるほど……。外務相、米国の動きは？」

続けて桐谷は深溝・外務大臣に問う。

「先ほど国防省が日本への支援の意を表明しましたが、具体的な行動についてはまだ…。国務省も現在対応を協議中であるとの返答です」

「そうか……………」

桐谷はモニターを注視しながらも深く熟考していた。

「失礼します。総理、会見の準備が整いました」

そんな折、首相補佐官が吉田にそう告げた。

「……しかし、今は作戦の趨勢を見極めなければなるまい。会見はもう少し……」

「いえ、総理。恐れながら、一刻も早く国民に日本の現状を知っていただくことが重要と考えます」

金田総務大臣が吉田に反論した。

「同感です。今日日本が建国以来の危機に晒されていることを直ちに国民に理解していただかなければ！」

「……うむ。そうだな。ではこの場合は桐谷君に任せる。原稿を持ってきてくれ」

そう言つて吉田は席を立つ。

去り際、彼は振り返つてもう一度モニターを見た。

猛火を浴びながら、怪獣王はゆっくりと前に進んでいた。

一瞬、吉田は怪獣王と目が合ったような気がした。



十数分ほど歩いたのち、吉道たちは千葉市高品多目的シエルターへと到着した。

大規模な地下鉄駅のような大きい入口から長い階段を経て地下に降りると、いかにも

避難場所というふうな、体育館のような広い空間へと出た。

2 mほどの壁で区切られた四畳ほどの狭い部屋がズラリと奥の方まで並んでおり、ここが避難民の居住スペースとなるようだ。

「入居中の札が張られていない居住スペースを利用してください。お好きな場所を使用していただいて結構です。後から来られるご家族様などはいらっしゃいますか？」

避難誘導の任務に就く消防隊員が尋ねると、母が「夫と祖母が…」と答える。

「では、後ほどご本人様が来られたときに確認を行いますので、お名前と入居される部屋の番号を…」

隊員と会話を交わす母をよそに、吉道は人々でごつた返すシェルター内を見回した。

トイレとシャワーは共用のものがこの空間の端の方に設置されている。

「これ、うちらが入る部屋ないんじゃないの？ もっと下の階行つた方がよくない？」

愛菜が面倒くさそうに言った。

長い階段をさらにずっと降りると、ここと同じ空間がさらにもう二層ほど地下の深くにあるようだ。

避難訓練などでその内部構造や仕組みは嫌というほど聞かされていたものの、実際に見てみると新鮮なものだな、と吉道は思った。

不謹慎であることを自覚しながらも、どこか未知の経験への興奮を抑えられない自分

の存在を認識していた。

結局、安川一家は最深層である地下三階の一角に入居することとなった。

部屋の中には非常食と湯を沸かすためのポッド、ガスコンロや最低限の調理器具などが揃っていた。

地下であるためスマートフォンなどのインターネットは通じていないが、部屋に備えてある小さなテレビは外からの電波を受信して映像を見ることができた。

どこのチャンネルを回しても怪獣上陸の臨時ニュース一色だった。

「お父さん、ひいおばあちゃん連れてここまで来られるかな……。ほとんど体も動かないだろうし……」

母が荷物をまとめながら心配そうにぼやいた。

「不自由な人はエレベーター使えるらしいし、そこは問題ないんじゃない？ 隊員さんがちゃんとこの場所教えてくれるだろうしさ」

吉道はテレビ映像を見ながら答えた。

「ならいいんだけど……。それにしても、こんなことになるなんてねえ……。今朝は想像もしてなかったよ」

「うん……。まあ、避難もできたし、とりあえず大丈夫なんじゃない？ ゴジラに家を壊されないかだけが心配だけど……」

大切なものを大量に家に残してきた吉道にとっては、それだけが気がかりだった。当然だが、彼らは知らない。

十分に防護されていたはずの九十九里の多目的シエルターが既に壊滅していることを。

シエルター跡地には一人の生存者もなく、濁流と化した溶鉄の中で大量の遺体が炭の山となっていることを。

あるいは、知らないままの方が幸せなのかもしれない。



「総理、間もなく記者会見ですが、会見では自衛隊の被害については発言をお控えいただけますようお願い申し上げます」

首相補佐官が吉田にそう頼んだ。

「国内の武力行使反対派への配慮……ということか？」

「はい。既に自衛隊による武力攻撃に対し、野党や左派の一部から懐疑的な意見が出ております。もし自衛隊から戦死者が出たことがこの段階で明らかになれば、国内にさらなる反対と混乱をもたらす恐れがあります」

「…………。君の言うことはもつともだ。…だが、それでも私は敢えて、隠すことなく真実を述べたい」

吉田は強いまなざしでそう答えた。

「この会見の本意は、国民に今の日本がどれほどの危機に直面しているかを認識してもらうことにある。既にゴジラは国土を蹂躪し、爆風で家屋に甚大な被害を与え、果敢に立ち向かった自衛官の命すらも奪った。この事態を、決して画面の向こうの出来事と捉えてもらうわけにはいかない。怪獣は画面の向こうではなく、日本。我々が生きるこの日本にいるのだ。例えば自衛官の戦死が戦闘の結果として批判的に晒されたとしても、それを含めて私は日本人に現実を伝えなければなるまい……」

重い口ぶりで吉田は述べた。

そこには、日本国総理大臣としての覚悟と義務を感じ取れる。

「…………差し出がましいことを言ってしまう申し訳ありません。総理がそこまで考えるにいられているのであれば、何の不安もありません。総理の思うように真実を述べてください」

吉田は強くうなずき、会見場へと入っていった。



【0：32 吉田総理の緊急記者会見】

「総理の記者会見だつてよ」

吉道はいつの間にかテレビにくぎ付けになっていた。

「あれ？ さつき記者会見してなかった？」

「それは官房長官だよ。閣僚の名前も覚えてないの？」

吉道は母の無知さに呆れた。

「総理もこんな時間に働かされて大変だな……。ちよつと音量上げるよ」

「うるさくしないでよ」

毛布にくるまって隅に座り込む愛菜が相変わらず不機嫌そうに言い放った。

『都民・国民の皆様、夜分遅くに失礼します。内閣総理大臣の吉田です。』

日本国非常の事態に際し、現状と政府の対応について述べさせていただきます。

先日11月3日20時38分ごろ、千葉県太平洋沖にて大規模な爆発が観測され、約一時間後、同規模の爆発がより沿岸部にて観測されました。その後、海上自衛隊の哨戒

機が千葉県九十九里浜付近に巨大生物を発見、これを怪獣であると認め、怪獣対策基本法に則って防衛出動の発動を下令いたしました。

今現在、怪獣は千葉県沿岸部から内陸部へと進行中であり、これを阻止するため、自衛隊は陸・海・空の各部隊を統合任務部隊として編成し、今もなお千葉県内陸部で怪獣と交戦中であります。怪獣は百年前に日本に上陸した“ゴジラ”と同個体であり、自衛隊による観測では身長は約260mと報告されております。

被害状況としては、二度目の爆発の衝撃波による家屋の倒壊が多発し、現在判明している分で死者123名、今後も数字は増大すると思われます。また、怪獣との交戦におきまして、自衛隊の攻撃ヘリコプター及び観測ヘリコプター多数が撃墜され、搭乗員全員が死亡いたしました。

自衛隊の苛烈な攻撃にもかかわらず、怪獣は依然として内陸部へと進行を続けております。このまま進行を続ければ、都心部へと到達する恐れもあります。

先に述べました通り、既に我が国は怪獣によって重大な被害を被っております。これは演習や物語の中の出来事ではありません。断固として現実なのであります。その自覚をもって、都民・国民の皆様は、混乱をきたすことなく、各自自治体の指示に従って迅速に身の回りの安全を確保していただけることを願います。今後は、自衛隊が全力をもつて侵略者の排除に当たると共に、わが政府が国民の皆様の安全を守るべく万全の態

勢で臨む覚悟であります。

もう一度申し述べますが、これは現実です。事実として起きていることです。怪獣は我々の住む世界のすぐ目の前に迫っているのです。日本国有事の事態におきまして、皆様のご理解とご協力を伏してお願ひ申し上げます。

…では、質疑応答に移ります…。

』

「現実……」

吉道は震える声でつぶやいた。

人類生存数：9 2 億 8 6 5 3 万人

決死



国道458号線上に配置された富士教導団戦車教導隊は、不気味なほどの静寂に包まれていた。

時節微かに聞こえるのは、同じ国道上の離れたところで火を噴く特科教導隊の榴弾砲の射撃音だけである。

砲身を横に向けて東金方面を睨む戦車と機動戦闘車からは、何の物音も漏れていない。

それに搭乗する自衛官たちも沈黙を保っていた。

国道上からは、地平線と雲に覆われた夜空の境目がオレンジに染まっているのがよく見える。

あの炎の中に、ヘリを駆って怪獣との戦いに臨んだ仲間の遺体が眠っている。

戦車部隊の隊員たちは、“戦争”と“死”が手の届くところに迫っていることを、否が応にも実感せざるを得なかった。

「怖いかな？」

34式戦車車長・小幡幸哉^{おばた ゆきや}一曹が不意に尋ねた。

「……少し」

突然の問いにやや戸惑いながらも、操縦士の長根^{ながね}三曹は答えた。

「なーに、大したことないさ。肩の力抜けよ」

小幡は笑いながら操縦席に近づき、背後から長根の肩を揉む。

「……敵」、もうすぐ来ますよ」

不用意に持ち場を離れた小幡に対し、砲手の山下^{やました}三曹はたしなめるように言った。

「ああ、分かてるよ」と小幡は自分の座席につく。

「なあ、俺たちは死ぬと思うか？」

「さあ……」

小幡の第二の問いに長根は煮え切らない返事をかえす。

「こういう仕事だからな、そうなることも時々考えてたけど……。いざとなるとやつぱり怖いよな」

小幡は目の前の液晶画面をのぞき込みながらつぶやいた。

画面にはまだ攻撃指令は表示されていない。

「…車長は千葉市に家族が住んでましたよね。なら、このラインは絶対に守らなきゃいけませんね」

山下が言うと、小幡は小さくうなずいた。

「そうだな…。最後に家に帰ったのは半年前だからな。もう一回、顔は出しておきたいしな…」

「絶対勝つて、生きて帰りましょうよ！」

今度は長根が小幡を慰めるように声を張り上げた。

「ああ。ありがとな」と小幡は答える。

「でも、なんでだろうな……。これだけ怖くても、何故か見たくてたまらないんだ」
「……？」

小幡の言葉に二人は首をかしげる。

「その、怪獣ってやつをさ……。……ほら、もう見える……」

空いた上部ハッチから身を乗り出しながら、小幡はそう言った。

その視線の先には、映っていた。

地平線とオレンジ色の雲の彼方から悠然と姿を現した、巨大な“神”の姿が。



「総監、小松の三〇三飛行隊が現場空域に到達したとの報告です」

中田幕僚長が岡崎総監に告げる。

「了解した。作戦第二段階と並行して第三段階を発動する。航空攻撃を開始せよ」
岡崎総監が命じると、直ちに航空部隊に命令が伝達される。

【0:28 呉号作戦、第三段階に移行】



航空部隊の攻撃が開始されるにあたり、まず誤爆を避けるために特化教導団の攻撃は一時中断された。

そして統合任務部隊の指令により、小松基地より発進した航空自衛隊第三〇三航空隊のF-51J“ヘルホーク”戦闘機は、第六航空団司令部より攻撃許可の指示を受けた。

Weapons Free. Fire, Now!
「武器使用制限解除。攻撃開始！ 弾薬投下…」

パイロットの号令とともに、各戦闘機から一斉に対地ミサイルが投下され、真つすぐにゴジラの体めがけて飛翔を開始した。

tracking on BINGO!
「目標追尾開始…命中！」

ゴジラの全身が再び爆炎に包まれる。

Fire the second round!
「次弾攻撃開始」

ゴジラは天を睨んだ。

そして、上空を旋回する戦闘機の群れを視界におさめると、大きく咆哮を上げた。怒りに体を震わせるゴジラの背が、青く、強く輝き始める。

「目標、再度背部発光!!」

「奴め、空を撃つつもりか…!?!」

一瞬、その場に太陽が出現したのかと見紛うほどの強烈な閃光が現れた。

それを目の当たりにした隊員たちが咄嗟に目を覆う。

次の瞬間には、ゴジラの口腔部から青白く輝く熱線が空高く射出されていた。

これまでの戦闘で放ったものとは比べ物にならない規模と温度の熱線は、高空へと瞬時に飛翔していった。

同時に、熱線が空気を押しのけているかのように、強烈な衝撃波が発生し、ゴジラの足元にある建造物を跡形もなく吹き飛ばした。

その光景は、まさしく核爆弾が炸裂した時のそれに酷似していた。



「目標生物、熱線放射! これまでのものと明らかに外見が異なります!」

岡崎総監をはじめとする幕僚たちは、食い入るように映像を眺めていた。

「…いつ……熱線の威力を自在に調節しているのか……!?!」

「最初に九十九里沖で発生した大規模爆発も、この規模の熱線を放ったに違いありません」

ん……！」

「だが……まさか…数千mの航空に届くなどということが……」

皮肉にも、岡崎がそう呟いた瞬間にそれは起きた。

F-51Jの一機が、熱線を浴びて爆発四散したのだ。

機体は破片すら残さず一気に蒸発し、無論パイロットの生死など問うまでもなかった。

「……………!!!」

あまりの衝撃に、幕僚たちは言葉を失う。

直撃を免れた他の機も、熱線から放たれた衝撃波で吹き飛ばされ、なんとか持ち直しながらも部隊は大きく散開してしまった。

ゴジラは熱線を吐き終わると目を細め、上空を飛び回る羽虫のような戦闘機たちをじっと見つめていた。



「うわああっ!!」

未だ国道上で待機する小幡たち戦車部隊の面々は、今ゴジラが放った強大な熱線の衝撃波が転じて発生した爆風に襲われていた。

「今のはデカかったな、おい！」

「なんて呑気な……」

小幡が声をかけると、呆れと恐怖が半々に混じった声で山下が呟く。

「俺は長らく無神論者だったが、今日で卒業する！ 間違いなくあれは神様だな！」

小幡は目を凝らして巨神の姿を見ながら叫んだ。

しかし数秒たつても部下からの返事がないので車内をのぞき込むと、長根も山下もそれぞれ運転席と砲手席で震えていた。

「とうとう俺達は人間と戦うことがないまま神様と戦う羽目になった。日本は平和な国だったんだな……」

小幡はこれ以上部下に言葉をかけるのはやめ、車内に入ると感慨深く独り言を言った。

「目標生物、射程内に進入。戦車部隊、攻撃開始。繰り返す。攻撃開始。送れ」

その時、戦車教導隊司令部より通達が入る。

「射撃開始!! 目標、前方巨大生物胸部! 距離5000!!」

小幡は人が変わったかのように重い声で叫んだ。

「てーっ!っ!!」

号令とともに山下が引き金を引く。

ドン、という轟音とともに車内に振動が走る。

十数kmの長さの国道上から一斉に砲火の光が輝き、その火力は全てゴジラの胸部に炸裂した。

ゴジラは少し歩行速度を落とし、再び咆哮を上げた。

これほど力量の差を見せつけられてもなお攻勢の手を緩めない人類の愚かさを嘲笑うように。



状況を絶望視し始めたのは、東部方面総監だけではなかった。

官邸の面々と同じく戦闘の趨勢を見守っている中央指揮所においても、自衛官たちの意見は二分していた。

「統幕副長！　これ以上の戦闘の続行は任務部隊の全滅すら招く恐れがあります！　呉号作戦の中止を岡崎総監と統幕長に進言すべきです!!」

利賀陸幕長は語調を強めて長野統幕副長に詰め寄った。

「私も同感です。前線部隊は撤退させ、ゴジラの反撃を受けない長距離ミサイルによる遠距離攻撃に徹すべきです。幸い、我が護衛艦隊は万全の戦闘態勢を整えています。命令さえあれば」

「馬鹿を言うな!!」

利賀に同意しようとした佐々良海幕長を怒鳴りつけたのは、有永^{ありなが}・航空幕僚長だつた。「ここで前線部隊が退けば、ゴジラは都心に進むだろう！ 未だ避難を完了していない千葉や都心の民間人を見殺しにするつもりか！」

「では、ここで虎の子の教導団と航空部隊をみすみす失えと言うのか！ 現状でヘリ・特科・戦闘機による全力攻撃を受けてなお、ゴジラには明確な損傷が一つも無い！ はつきり言おう、これ以上の作戦続行は無意味だ！ 被害が少ないうちに撤退し、次の作戦を練るべきだろう!!」

たまらず利賀も語気を強め、反論する。

「貴君は幕僚長の地位を戴きながら、作戦の目的を把握していないのか!? 呉号作戦の目的はゴジラの駆逐だけではない！ ゴジラの進行を可能な限り遅らせ、避難民が避難を行う時間を稼ぐことも目的の一つだ!! 現にゴジラは今、歩行速度を低下させている!! 前線部隊を退かせたら、それも叶わなくなるぞ！」

「そんなことは分かっている!! だが、その目的のために任務部隊に配属された数千の自衛官とその魂である兵器を丸ごと切り捨て、炎の海に投げ捨てる必要性はあるのか!？」

席から身を乗り出して言葉を交わしていた二人だが、長野統幕副長がダン、と机を強く叩くと冷静さを取り戻し、席に座りなおした。

「…失礼。少し…動転していました」

「私も同様です…。申し訳ありません…。しかし統幕副長、何卒前線部隊の撤退はいたしませんよう、伏してお願ひいたします」

「下の者たちが命を賭けて怪獣を食い止めている中、上に立つ我々が小田原評定を続けていては申し訳が立たない。任務部隊の幕僚達の意見を聞いたうえで、簡潔に結論を出したい」

「統幕副長！ 岡崎総監より通信です！」

長野が言い終わると同時に通信兵が叫んだ。

「丁度いい。繋げてくれ」

「はっ！」

『統幕副長、岡崎です。呉号作戦続行の可否について報告があります』

奇遇にも、それは今まさに長野が尋ねようとしていたことだった。

総監部においても、中央指揮所と同様の議論が紛糾していたようである。

『先ほど、被撃墜を出した三〇三空より交信がありました。“攻撃任務の続行を切望する”と』

「……………」

長野達に衝撃が走る。

しかしそれは、自衛官として当然の責務と覚悟の表れであることは誰しもが理解していた。

『間もなく現着する航空部隊からも、攻撃中の戦車教導隊からも、同様に攻撃続行を希望されました。よつて総監部は、呉号作戦は続行すべしという意見でまとまっております』

「……だ、そうだ。異議のあるものは？」

長野は周囲を見渡したが、利賀や佐々良も口をつぐみ、異議を唱えようとするものは一人もいなかった。

考えてもみれば、当然の帰結ではあった。

僚機が撃ち落されてもなお命令を忠実に実行し続けたヘリ部隊がそうであったように、前線部隊が自ら撤退を希望するなどということがあらずがなかった。

防衛線を放棄してでもいち早く撤退して戦力を立て直すのと、全滅を覚悟しつつも避難民のための時間を稼ぐのと、どちらがより合理的で効率的な判断なのか、誰にもはっきりとしたことは言えなかった。

ならば、“撤退しない”方の選択肢を選ぶのは必然であった。

「だが、私から一つ言わせていただきたい」

佐々良海幕長が声を上げた。

「自らの命を顧みず任務を達成し、国民を守ろうとする隊員達の志には心より敬意を表する。自衛官の鑑と呼ぶにふさわしいだろう。だが、我々は自衛隊だ。日本が受けた数々の苦難と悲劇から学び、成長してきた自衛隊だ。特攻や玉砕の時代とは違う。絶対に人命を無闇に消費するな。諸君らは国を守る自衛隊員でもあり、守られるべき日本国民でもある。どんな時でも脱出と撤退の準備を怠るな。生きて帰ることも任務の一つと思え」

佐々良の言葉は、前線に立つ兵士だけでなく、総監部や中央指揮所の人間たちにも重く響いた。



【0:32 第三航空隊が現場空域に到達、攻撃開始】

三〇三空が第二波攻撃を行おうとする中、三沢を飛び立った三空が遅ればせながら東金上空に現れた。

三空の国産戦闘機、F-3“スーパー・ファルコン”とF-4“リファインド・ゲール”の混成部隊が、同胞を焼き尽くしたゴジラへの怒りをぶつけるかのように一斉に猛火を散らした。

戦車隊の砲撃が止むと、十数秒後には空対地ミサイルと誘導爆弾が雨のようにゴジラに降り注ぐ。

そしてその何秒か後には再び砲弾が山のように飛来。

ゴジラは息をつく暇もなく猛烈な攻撃を受け続けざるを得なかった。

自衛隊の高度な情報共有システムだからこそ成せる綿密な連携攻撃だった。

戦車部隊が砲撃を続ける中、突如戦場は閃光に包まれた。

ボン、と衝撃波が広がる爆音が轟き、掃射された熱線が国道を割った。

熱線の射線上にいた機動戦闘車は痕跡すら残さず乗員ごと雲散霧消し、すぐ横にいた車両も衝撃波で車体ごと吹き飛ばされ、国道から転げ落ちていった。

車外に出ていた人員などは衝撃波だけで体がバラバラに千切れて飛んでいき、あるいは吹き飛ばされた車体の下敷きになって潰れていった。

ゴジラが熱線を横向きに掃射していたら、ゴジラの視界内にいる国道上の車両部隊は全滅していただろう。

いや、今からでもそうするかもしれない。

これは最早、“戦い”ではない。

百年の歳月をかけてもなお、人類はゴジラと同じ土俵に立つことすら叶わなかった。それでも戦車部隊や航空部隊は、一切攻撃の手を緩めなかった。

ゴジラと“戦う”ために。



「動け動け!! 全速だ!!」

小幡が怒鳴ると、長根の運転で戦車は国道上を猛スピードで動き出す。

いつ熱線が飛ぶとも知れぬ戦場で、車両部隊は国道上を駆け巡らざるを得なかった。

幸い、日本の戦車は行進間射撃の精度においては他国の追従を許さない性能を有していたため、全速で走り回ってもなお攻撃力は健在だった。

「次弾装填!! 射撃用意!! てーっ!!」

小幡は顔を真っ赤に染め、汗を滝のように流しながら叫ぶ。

『目標生物の周囲の空間放射線量が急激に増大中、被曝の恐れあり! 各員厳重に警戒せよ!』

本部からの通信も、小幡の耳には話半分にししか聞こえていなかった。

だが、この指令は決して軽視されるべきものではなかった。

ゴジラの、ひいてはその元凶となった核兵器の真の恐怖は、まさしくそこにあるのだから。

ゴジラは歩みを止め、ゆっくりと息を吐いた。

人類がかつて広島と長崎にまき散らしたものと同様の放射性物質を大量に含んだ黒

い吐息が、ゴジラの口元から周囲の空間に広がっていった。
死と絶望の黒い霧は、すぐそこに。

苦悶

「目標進行中。攻撃続行するも、未だ効果無し。送れ」

「タイガー2、残弾無し！」

「タイガー4、残弾無し……」

各部隊が次々に残弾を失って落伍していく中で、健在な部隊による砲撃と爆撃はまだ続いていた。

ゴジラは熱線を吐くのをやめ、戦車部隊が並ぶ国道へと足を速めた。



「ゴジラ、速度上昇！ 時速50km前後で国道へ向け突貫する模様！」

「戦車隊はゴジラの進行方向の国道上から退避中！ 左右に分かれて残存火力を投射します！」

通信士が現状を告げる。

「7500発の対生体徹甲弾を浴びてなお健在……。奴の体表は一体何でできているのだ……!!」

岡崎総監はそう洩らしながら苛立たしげに机を叩く。

「総監!!　ゴジラ周囲の空間放射線量が急激に増大中!!」

「何だと!？」

思わぬ報告に岡崎は狼狽える。

「奴はエネルギー生成を核融合に移行したことにより、核分裂を用いる百年前の個体よりは格段に放射線の漏洩は少ないだろう…と怪坊会の報告書にはありましたが…これは一体……」

幹部の一人が不安げにつぶやく。

「分かるものか…!!　あんな怪物の常識など…たかが人間に分かるはずがないんだ…!!」

中田幕僚長がこぶしを握り締めながら呟く。

「戦車部隊、損耗率63%!　特科部隊、損耗率33%!」

通信士の報告が入ると、幕僚達の表情はより一層重みを増した。

「全部隊に到達!　全車、戦域より後退させろ!　彼らはもう十分に戦った!　空爆は続行しつつ、作戦を最終段階に移行する!」

事ここに至り、岡崎が撤退指令を下す。

「了解!」



「全車全速後退!!」

その教導団長の指示を待つまでもなく、各戦闘車両は左右に分かれてゴジラと距離をとっていった。

残弾が存在する車両は後退しつつ依然として砲撃を見舞い、ない車両はひたすら全輪を駆動して後退を続ける。

「もう少し…もう少し踏みとどまれ! 後ろの味方が下がりきるまで残弾を撃ち続けるぞ!」

小幡は枯れそうな声で車内の部下二名に叫んだ。

彼らの車両の後ろを、残弾を撃ち尽くした車両が列を成して退却していた。

「小幡車長! 残弾は残り二発になっ…」

砲手の山下三曹はそこまで言いかけて言葉を止めた。

「…車長、血が……」

「なんだ…? 聞こえないぞ!」

そう問いかける小幡の口と鼻からは、とめどなく血が流れていた。

「血、血が出てます、車長! 分からないんですか!」

山下は血相を変えて叫び、前の座席に座る長根も「どうしたんです!」と振り向く。小幡はそつと自分の口元に触れ、その指に血が付着しているのを見た。

「どうしたも……こうしたも……あるか……」

そう呟くと、小幡は車長席にぐったりともたれかかった。

「ヤバいぞ山下! ハッチ閉めろ!!」

長根の必死の叫びに応え、山下は戦車のハッチを閉める。

「一体何なんだ、これは!? 車長、しっかりしてください!」

山下は半分パニックになって両手で小幡を揺さぶった。

「放射能だよ! あいつが、ゴジラが出してるんだよ!!」

長根がそう山下に怒鳴りつける。

「うるせえな……。ゴジラは……近付いてるのか……?」

小幡は急に体力を失いながらも、二人に問いかけた。

「は、はい……。1kmほど先を歩いています……! 防衛ラインは……今まさに突破されるところです……!」

動揺しながらも山下が応える。

「うう………」

二人の問答のそばで、長根が呻きながら目をこする。

「真っ白だ……どうなってる……」

「長根、どうかしたのか!？」

「視界が真っ白になってる……意味が……分からん……」

その返答を聞いて、山下は一瞬言葉を失った。

「長根……お前まで……」

その症状が、放射線白内障によるものであることは一目瞭然であった。

「山下……お前が長根の『目』になってくれ……。攻撃はもういい、撤退命令が出てる……」

小幡がやつとの思いでそう呟くと、「……了解しました!」と山下が応える。

「長根、そのまま後ろに! 俺が合図したら左に旋回、さらにバックで離れるぞ!」

「わ、分かった……」

そう答える長根も急速に体力を失い、口からはとめどなく血が流れ落ちていた。

しかし、長根が車両をバックさせ始めた直後だった。

外の光景を映し出すモニターは閃光に包まれ、同時に彼らが乗る車両は激しく吹き飛ばされた。

「わあああああつ!!」

三人の隊員は車両の中のあらゆる箇所に叩きつけられた。

小幡と長根は悲鳴をあげる力すら残っていなかった。

やがて車両の動きが止まると、全身を打撲しながらも山下が何とか動き出す。

「……やられましたね……横転してます……」

山下が言うとおり、戦車は至近距離の熱線発射に伴う衝撃波により十mほど吹き飛ばされ、国道の脇で横転していた。

「生きてますか、車長、長根……」

「山下……車両を出て……原隊に戻る……。まだ体が動けるうちに……」

と、小幡の掠れた声が返ってきた。

長根は衝撃で気を失っているようだった。

「車長と長根を置いていけということですか……」

「二人を抱えて原隊に戻るのは無理だ……足手まといになる……。早くしないと……お前も被曝で動けなくなる……」

山下は反論しようとしたが、すぐにその言葉を胸の内に押しとどめた。

ここで押し問答をしても時間の無駄になることは明白であり、小幡の意を汲むのが最良の判断だと理解したためであった。

「了解しました。必ず……必ず友軍が助けに来ます……！ お先に原隊でお待ちしております……！」

山下は敬礼をしてからハッチを開け、外に出た。

小幡にはもはや敬礼を返す力はなく、微かに手を動かして手を振るくらいのことしかできなかった。

「……っ!？」

ハッチを開けて這いずるように車両を出た山下は、外の異様な光景に驚愕した。

真夜中であるにもかかわらず夕暮れ時のように全体がオレンジの靄に包まれた国道には、至る所にひっくり返った車両やその残骸が転がっていた。

周囲の木々が轟々と燃え盛り、その熱気が痛いくらいに山下の肌に伝わってくる。

そして何よりも凄惨なのは、あらゆるところに数分前まで人の体を成していたであろう肉片や装備の一部が転がっている様相だった。

あるところでは苦悶の表情を残したまま真っ黒に焼け焦げた隊員の死体が横転した45式機動戦闘車のハッチからはみ出ており、またあるところでは衝撃波の直撃を受けて千切れ飛んだ隊員の脚が木の枝に引っかかっていた。

それは、まさしく戦争そのものを忠実に再現した地獄であった。

その世界に面食らいながらも山下は一、二歩前に進んだ。

彼自身も体に急速な疲労を感じ始めていた。

が、彼の歩みは突然の大きな地面の揺れによつて遮られた。

「うわっ!!」

山下は大きくアスファルトの上に転び、咄嗟に後方を見た。

そこには、オレンジの靄に紛れた巨大なゴジラの姿があった。

彼は、山下が首を目いっぱい上に向けても頭部を視界に捉えられないほど近くに迫っていた。

わざと出力を落とし、熱線ではなく赤い炎を吐いて森を焼き払いながら、一歩ずつゆつくりと都心の方角へと歩を進めていた。

「……………」

不謹慎にも、山下が最初に抱いた感想は“美しい”であった。
そしてそれは、同時に最後の感想でもあった。

ゴジラは今一度、大きく咆哮をあげた。

大気が震え、大地がその震動に共鳴する。

人類の罪が生み出した大いなる神。

それを前にしては、人類は跪くことさえも許されない。

山下はしゃがみ込んだまま、血の混じった涙を流した。

その直後、ゴジラが国道を、蹴って叩き割るようにして横断した。激しい揺れで山下はアスファルトにしがみつくのがやっとだった。

ゴジラの脚に粉碎された衝撃で瓦礫の破片がそこら中に飛来し、車両やその残骸に当たって大きな凹みを与えた。

そして、茫然と巨神を眺めていた山下が己の任務を思い出して立ち上がろうとした瞬間、その上半身を飛来した瓦礫が吹き飛ばした。

一瞬にして上体が丸ごと雲散霧消し、腹から下の部分だけが十数mも吹き飛ばされて炎上する戦闘車両の中に突っ込んでいった。

「長根……逝っちゃったのか……長根……」

暗く、熱気に包まれた戦車の中で、息も絶え絶えに小幡は呼びかけた。

瓦礫が車両に当たり、そのたびに大きな衝撃音と振動が彼に伝わる。

長根の返事はなかった。

そして今原隊へ返したはずの山下も外でバラバラに吹き飛ばされていったことなど、小幡には知る由もなかった。

「……………」

小幡は血の塊をボトリと吐き出した。

「堅太郎………堅…太郎………けん………」

目の前にはいない息子の名前を何度も呟く彼の声は、次第に聞こえなくなっていた。

【0：52 ゴジラ、呉号作戦防衛ラインを突破】



同刻、千葉高品多目的シエルター。

「オバケン!? オバケンじゃん!」

吉道は、シエルターの中にぶった返す人々の中に親友の姿を見つけ、思わず大声をあげた。

「おっ………ああ、ミッチーか…」

吉道の姿を見つけた小幡堅太郎の声は、しかし冴え冴えとはしていなかった。

「お前もここ来てたんだな! 会えて良かったー! てかどうした? 元氣なくね?」

いつもの大人しさとは打って変わって、吉道は非日常に満ちたこの状況下で親友に出

会えた嬉しさから格段に饒舌となっていた。

一方、覇氣のない堅太郎の様子はさながら普段の吉道のように大人らしく、二人の共通の友人が今の彼らを見たら誰もが訝しむであろう様子だった。

「いやー、悪いな……。ほら、前にも言っただけ俺の親父、自衛隊だからさ……今頃何してんのかなあつて」

「あつ……」

吉道は避難中に見かけた、上空を飛んでいく自衛隊の航空機の群れを思い出した。

そして、軽率に悦びを露わにしていた己の不謹慎さを恥じた。

「あ、いや、気にすんなよ？ 親父の部隊がいるかどうかも分からんし、仮にいたとしてもあのバカ親父が簡単に死ぬわけねえしな」

「ま、まあ……そうだといいいけど……」

「実はそれよりも心配なことがあつてさ……。ミッチー、九十九里のシエルターが連絡途絶えてるって話、聞いた？」

堅太郎の言葉を聞き、吉道は数秒間言葉を失った。

「……嘘だろ？」

「SNSで見た話だからホントって断言はできないけどな。本来許可をとれば他のシエルターにいる家族と連絡をとれるはずらしいんだけど、九十九里のシエルターだけは繋

がらないらしい……」

「いやデマでしょ、そんなの」

吉道は平静を装ってそう返したが、表情に浮かんだ焦燥は隠しきれていなかった。

「そうかね。九十九里って、ちょうどゴジラが歩いてるところだぞ」

「だってさ!! 避難訓練の時間いたじゃん! ゴジラが変な息吐いても、シエルターは平気だって! そういうふうには設計されたのがこのシエルターなんだろ!!」

吉道は思わず語気を強める。

「そんなに人間に都合よくできてるはずないんだよ、この世は」

堅太郎はやけに哲学めいたことを言った。

「……シエルター内でネットが繋がらないのも、設備が不十分なんじゃなくて、国が意図的に遮断してるだけかもしれないな。SNSとかでそういう事実が広がるのが嫌だからって……」

「いや、マジで考えすぎだって! てかさ、ここがダメならどこに逃げんの!」

吉道の額にはいつの間にか冷や汗が浮き始めていた。

「さあね。ゴジラの進行方向と違う方に全速力で向かう……とかじゃないか?」

「そんなもん、怪獣がどこ行くかなんて分からないだろ……」

『……で速報です。政府は、新たに避難区域の拡大を指示しました。避難指示が出てい

る区域は、千葉県全域に加え、東京23区、神奈川県横浜市、川崎市、横須賀市、鎌倉市、茨城県守谷市、取手市……』

シエルターの壁に設置された大きなテレビ画面では、ニュースキャスターがそう告げていた。

都心が避難区域となったためか、このニュースは大阪のテレビスタジオから中継されている旨が下方に表示されていた。

「このタイミングで避難区域の拡大……。おかしいだろう？ 既に自衛隊が駆除に向かって、国家のできる最大限の対応は終了したっていうのにさ」

堅太郎は皮肉っぽく笑いながら言った。

「自衛隊、負けたのか？」

「ゴジラは都心に来るぞ！」

「じゃあこの真上を通るんじゃないのか!？」

テレビ画面を見ている避難民たちは思い思いに不安を呟く。

「親父、やられちゃったかも……」

堅太郎は画面を見上げながら茫然と呟く。

『また、アメリカ国防省は先程、「同盟国の危機に対応するため、また在日米軍基地と米大使館防衛のため、今後は日本の自衛隊と統合的な作戦運用を行う準備が整っている」

と発表しました』

やがて吉道は堅太郎と一旦別れ、家族が待つ避難スペースへと戻った。

「…友達に会えて良かったね」

避難スペースに一人で残っている愛菜が、皮肉っぽくそう言った。

「…あれ？ 母さんは？」

「お父さんとひいお婆ちゃんを迎えに上の階に行った。ねえ、ウチも友達探して来ていい？ ぶっちゃけココ、暇なんだよね」

「……………」

愛菜の願いをよそに、吉道は深く考え込む。

もしオバケンの話が本当なら、このシエルターもいずれ焼かれるかもしれない…。

逃げるなら、まだゴジラが遠くにいる今のうちじゃないだろうか？

もし逃げ遅れたら、本当にみんな殺されてしまう。

シエルターの耐久性を信頼していいのだろうか？

「ねえアニキ、聞いている？ ウチもう行くけど、いい!？」

愛菜が苛立たしげに尋ねる。

「いや、ちよつと待って！ もしかしたらここにいちやいけないかもしれない…」

「はあ!? 何言ってるの? ここ避難所だよ? 頭イカれた?」

「だから……」と吉道は言いかけたが、変に妹を不安にさせるのも気が引けて、それ以上言えなかった。

「……ごめん。ちよつと混乱しててき。友達、探して来ていいよ」

「こんなんでもメンタルやられるとか雑魚かよ……。じゃ、行ってくるから」

相変わらずどぎつい口調で兄を罵りながら、愛菜は部屋を出て行った。

「……………」

一人でしばらく考え込んでいたが、吉道はどうしても嫌な予感を振り払うことができなかった。

ここで判断を間違えたら、自分も家族も全員死ぬ。

ぐずぐずしていたら手遅れになるかもしれない。

でも、行政の管理下に置かれているこのシエルターを抜け出すことは可能なのだろうか。

吉道はいてもたつてもいられなくなり、部屋を出て上階へと向かった。

目的は、母や合流するであろう父、曾祖母に会うことだった。

ここを出るべきか否か、両親に聞いてから判断しても遅くはないだろうと思ったためである。

未だ外にいるかもしれない父なら、SNSの情報をキャッチしている可能性もある。慌ただしく人が行き交う階段を一気に駆け抜け、吉道は地下一階へと向かった。

「……………?!」

息を切らしながら地下一階の入り口にたどり着いた吉道は、驚きのあまり言葉を失った。

入り口付近は、下層よりもさらに人でごった返していた。

だがそれは入ってくる人が多いからではなく、むしろもともと中にいた人たちがこの場に集まっていたのである。

「ここから出せ!! 出せよ!!」

「やめてください!! 下がってください!!」

「ここにいたらみんな死ぬぞー!!」

「他の方の迷惑ですから!! 戻ってください!!」

「ネットを繋がらせろ!! 情報規制断固反対!!」

入り口では、暴動が起きていた。

吉道や堅太郎と同じように、シエルターの安全性を信用できないあまり疑心暗鬼に陥った人々であった。

“やはり堅太郎の不安は本当なんじゃ……”

そう吉道が思った時だった。

暴動騒ぎの声に負けぬほどの音量で大画面のニュース映像の声が轟いた。

『ここで速報です！ 現在巨大生物は東金市を超え、千葉市から都心方面へ進行中であると情報が入りました！ 付近の住民は一刻も早い避難を……』

群衆は一瞬で暴動をやめ、画面にくぎ付けになった。

そして、彼らの表情は少しずつ絶望に支配されていった。

【0：58 避難区域拡大】

【1：00 米軍第7艦隊、横須賀を出港】

人類生存数：92億8652万人

疑心



これは、某SNSにおける生配信動画の内容である。

【0:48】

画面には、車のフロントガラスとその向こうに映る夜の街並みが映し出されていた。運転席に固定されたスマートフォンからライブ動画を配信している、というわけである。

しかし目前に映っては過ぎ去ってゆく街並みの様子は明らかにおかしい。

全ての建物の電気が消え、道には車も人影もなく、走行する車の音以外は不気味な静寂を保っている。

端的に言うならば、この街は既に“死んでいる”のだ。

「今ですね……大網街道を直進して、国道468号線に向かってます。本当なら捕まってるところなんです、行政が混乱してるせいなのか、警察には追われていません」
助手席に座る男がそう語りかけた。

配信者は、運転手の男とこの男の二名である。

動画のコメント欄には、彼らを通報しようと試みる者、批判する者、逆に応援したり期待を込めたりする者など、多種多様な思想が飛び交っていた。

二人の配信者は今、ゴジラがいるであろう場所に向かっているのだ。

「見えますかね？ あつちの空がちよつと赤いです……」

そう言つて助手席の男は配信を行つているスマートフォンを手に取り、山の向こうから空に立ち上るオレンジ色の光を映した。

その時、山の方角が、まるで稲妻が落ちた瞬間のようにピカリと光った。

「あ、待つて光った！ うわヤバイ!! 見えますか、空!」

動画には、閃光が光った一瞬後に空に伸びていく光の柱がはつきりと映されていた。

「あの光のところにですね……怪獣がいます。今その方角に向かつてます」

「どうする？ あつちの道入る？」

不意に運転手が尋ねる。

「いや、大通りは自衛隊いるから見つかったらヤバいつて。とりあえず田んぼ道行こう。国道の下くぐつて向こう側出ようぜ」

助手席の男は配信用のスマホを持つたままそう答える。

「皆さん。今から我々が、世界で初めて、いま日本に上陸してる怪獣の全体像を公開しま

すよ。どこのテレビ局も新聞社も公開してないですからね。我々が世界初ですよ…」

そう述べる助手席の男の手は細かく震えていた。

それが恐怖ゆえなのか武者震いなのか、それは本人だけが知っているだろう。

「あれ？ ……待つて待つて?!?! あれじゃない?!? いるよ、あそこ!!」

数分後、突然助手席の男が大声をあげた。

「えっ、待つて、どこ?」

運転手の男も身を乗り出して辺りを見回す。

「いるいるいる!!! なんか黒いのいるよ!! ほら、あっち!!」

助手席の男が指さした先には、国道468号線が通る小高い稜線、さらにその向こうに佇む不気味な黒い生物が小さく映っていた。

「ヤバイ…ヤバイ、マジで…!! 分かりますか視聴者の皆さん!? ホンモノがいますよあそこに!!」

助手席の男はひどく興奮した口調で何度も画面に向かって語り掛けた。

動画の視聴者数、コメント数もこの瞬間から爆発的に増加し、処理が重くなり始めていた。

「いや、おかしいだろ、あれ……。なんであんな遠くにいるのに見えるんだよ……。デカいとかそういうレベルの話じゃないって……」

対照的に、運転手の男は震える声でそう呟いていた。

「もう無理だ、次の曲がり角で戻る！」

「いや待てよ!! まだいけるって!! 全身だけ見たらすぐ戻るから!!」

怖じ気つく運転手をなだめるように助手席の男が呼びかけると、渋々運転手の男は曲がり角を無視して進んだ。

やがて、彼らの車は国道468号線の下を抜け、大網白里町から東金市へと続く広大な水田地帯に出た。

そして、どちらが言い出したわけでもないのにすぐに車は止まった。

「……………」

二人とも、絶句していた。

言葉が生まれなかったのである。

広大な水田地帯の中で、“その光景”と二人の男を隔てるものは何もなかった。

彼らの車の左方、5kmほど遠くに、しかしそれだけ遠くにいるとは信じがたいほど巨大な黒い生物が、オレンジ色の靄に包まれて歩いていたのである。

自衛隊の熾烈な攻撃によってその体は時節爆炎に包まれるが、その度に傷一つない巨体が黒煙の中から現れる。

だがそれよりも二人を驚かせたのは、その黒い怪物が歩いてきたであろう海岸線の光

景だった。

海の方角は、右から左まで見渡す限り、火の海だったのである。

車で移動しているときにはぼんやり空がかすむ程度にしか見えていなかったオレンジ色の靄が、地平線の全てを覆いつくすように広がっているのだ。

その時、巨大な咆哮が赤い空に響き渡った。

続けて、怪獣の足踏みの振動で小さな地震が発生し、彼らの車は小刻みに震え始める。

「戦争だよ……これ……」

運転手の男が小さく呟いた。

次の瞬間、視界は閃光に包まれた。

「わあっ!!!」

先ほどとは比べ物にならないほどの明るさの光が画面を満たし、同時に光の筋が雲を突き抜けて天へ昇っていく。

そして、絶大な衝撃波が彼らの車へ向けて迫ってきていた。

「あ、あ、ヤバイ、なんか来てる、ヤバいつて!!!」

建物や瓦礫を飲み込みながら迫ってくる衝撃波を見て、助手席の男が声を枯らしながら叫ぶ。

彼らが逃げる暇もなく、衝撃波は車を飲み込んだ。

「ぎやああああああっ!!!」

ガラスが割れ、暴風が車内へと流れ込む。

男の悲鳴とともに動画を映すスマホが吹き飛び、画面は激しく動いた。

数秒後、スマホは運転手の男の手の中にあつた。

衝撃波を浴びながらも車は横転せず、そのままの向きで横にずれ、片輪が田んぼの溝に嵌つて車体が大きく傾いていた。

「あー……あー……痛い……！　痛い……！」

運転手の男の泣きそうな声が聞こえる。

画面には男の指がわずかに映つたが、その指はガラスの破片が当たって出血していた。

「んん……うう……」

続いて、助手席の男のうめき声が聞こえた。

「トシヤ……!?! ……えっ?!」

運転手の男が助手席の男の方を向いて、そして硬直した。

画面には、一瞬だけ助手席の男の姿が映った。

両目と顔、左腕にガラスの破片が突き刺さり、激痛で呻くことしかできない彼の姿が。

生配信はこの瞬間をもって中断された。

この配信はSNSを通じて即座に全国、ひいては世界に広がり、国民を恐怖のどん底へと突き落とすこととなった。

そして、人類が見失っていた戦争と核爆発の恐怖を大いに思い起こさせた。



【1:00】

首相官邸地下。

モニターには未だに空爆を続ける航空隊の様子が映し出されていたが、作戦の可否は最早誰の目にも明らかであった。

その空間は沈黙に包まれていた。

彼らは、日本の威信をかけた精鋭部隊がなすすべもなく蹴散らされる様子を、ただ黙って見ていることしかできない。

そして、自衛隊を一蹴した破壊と絶望の化身は、この場所へ向けてまっすぐに突き進

んでいる。

誰もが言葉を失わざるを得なかった。

「総理、さきほどＪアラートを通じて避難区域の拡大を指示しました。ここも避難該当区域です」

桐谷官房長官が吉田に呼びかける。

吉田は目を見開いたまま下を向いていた。

半ば放心しているようにも見える。

「我々もここを退去しろと？ 避難指揮はどうなさるおつもりです？」

金田総務相が桐谷に問いかける。

「都庁が機能している間に都庁に避難指示を委託し、その間に国家機能を立川広域防災基地に移転する。立川の多目的シエルターで首都機能が復活後、再び対応を再開すればいい」

「ならば先に都庁の職員を移転させればいいじゃないか……。都庁も国民も置き去りで我々が真つ先に逃げるというのは……」

吉田が力なく反論するが、桐谷が「総理！」と強く呼びかけて黙らせた。

「我々は国民に選出された内閣です。日本をより良い方向へ導く義務を遂行せねばなりません。このような事態においては尚更！ 違いますか？」

「……………」

「命の価値は皆等しくとも、非常時において脱出に順番が生ずるのはやむを得ぬことです。首都機能の停止を最小限に抑え、行政の混乱を防ぐためには、我々の避難こそが最も迅速に行われなければなりません。総理、どうかご理解を！」

「ああ……そうだな。すまない……」

吉田はそう答えて立ち上がる。

「永嶋君……交通の状況はどうか？」

「は、案の定と言うべきか……主要な道路はどこもかしこも大渋滞で、警察や消防、自衛隊の懸命の避難誘導にもかかわらず解除の目途は立っていません」

吉田の問いに報告書類を見ながら永嶋国交相が応える。

「でしたら、陸自のヘリを要請しましょう。練馬からここまでならそう時間はかからず到着するはずですよ」

桐谷が告げると、官房副長官らが自衛隊に連絡を取り始めた。

「自衛隊でも勝てないとは……日本はどうなるのでしょうか……」

蒲田怪防担当相が震える声で呟く。

「蒲田!! まだ彼らは戦っているのだぞ!! 言葉を慎め!!」

すかさず磯谷防衛相が声を張り上げた。

「無理でしょう、磯谷さん！ この状態から勝てますか!？」

その言葉に呼応するように桜坂財務相が言った。

磯谷は答えなかった。

「百年経つてもこの様か…。進化しないものですね、人間は」

土井文科相が皮肉めいたことを言った。

「とはいえ、百年前に比べればまだ救いのある状況だと思いますよ。百年前と違い、明確な対怪獣保護施設の多目的シエルターもあることですし…」

蒲田が何とか言葉を取り繕うが、閣僚の表情は浮かばれない。

「そういえば駒場君…九十九里のシエルターとはまだ連絡がつかないのかね…?」

吉田が駒場防災相に問いかけるが、「懸命に調べさせていますが、まだ詳細は………」と言葉を濁す。

「この混乱下ですから、通信が込み合っているのでしょうか…?」

「そのことです…」と井村統幕長が口を挟む。

「シエルターに派遣した隷下の災派の部隊から一切返答がありません。最悪の事態を覚悟する必要があるでしょう……」

「最悪の事態というのは……」

「多目的シエルターの壊滅、ですか」

「まさか、そんなことは！」

桐谷の言葉に駒場は思わず立ち上がって反論した。

「だって、他ならぬゴジラの熱吐息を想定して作られたシエルターですよ!」

「ゴジラだって百年前のものとは比べ物にならないくらい進化してるんだ! それぐらいのことが起きたって今更驚きはしない!」

氷川環境相が顔を真っ青にしながらもそう駒場に告げた。

「そ、総理……!! 多目的シエルターがダメなら、一体どこに国民を逃がせと言うのですか……!! 1300万人の東京都民と数百万の周辺区域民を!」

「それは……」と吉田は言葉を詰まらせる。

「桐谷先生、立川の防災基地も危ないんじゃないですか?」

桜坂が桐谷に詰め寄った。

「いつそのこと、大阪ぐらいまで逃げるべきだ。奴はシエルターだってぶち破る。関東のどこにいたって奴からは逃げられない。そうでしょう、桐谷先生!」

「……」一時の情報だけですべてを判断するのは危険だ。ヘリが来るまで情報を集め、移転先はその後に決めても良からう」

「そんな悠長に構えられる相手ですか……!!」

桜坂は額の汗をぬぐいながら呟いた。

「ともかく、九十九里のシエルターのことは絶対に外部に漏らすな！　今ここで国民に知られたら、全国が大混乱だ！」

吉田の指示に駒場は小さくうなずいた。

「隠蔽していたことがバレたら総辞職ものだが……。そんなことを気にしている場合ではない。我々が辞めさせられたって、日本がその時に残っていればそれでいい……！　情報管理を徹底させてくれ……！」

「恐れながら総理……先ほど本省でインターネットの調査を行わせたところ……！」

金田総務相の報告に、吉田はぎょつとして振り返る。

「九十九里が焼き尽くされている様子を収めた動画がSNS上で広がっていると……！」

「総理！　隷下の部隊から、各地のシエルターで暴動が起きていると報告があります!!」
金田と井村統幕長の報告がほぼ同時に入ると、吉田は「一体どうすれば……！」と弱々しく呟いた。

【1：02　呉号作戦、最終段階に移行】



「あ、吉道!？」

人々が騒ぎ立てる多目的シエルターの中で、吉道は不意に自分を呼ぶ声を聞いた。

「母さん! 父さんとひいばあちゃんは!？」

人ごみの中で吉道は母を見つけて近付いていった。

「さつきから探してるんだけど全然見つからなくて…。怖い人たちがずっと騒いでるから……」

母は不安そうに入口の方を見ながら呟いた。

「マジか…。病院から徒歩だとしても時間的にはもうそろそろ帰ってくる頃だと思うんだけどな……」

「おいみんなー!! 外に出てこの動画を見ろ!!」

入り口の階段を降りてきた男がスマホを振りかざしながらそう叫んだ。

「九十九里はマグマの海だ!! シエルターもみんな焼かれた!! ここにいちやダメだ!! 俺たちは国に騙されてる!!」

その男はすぐに警察に取り押さえられた。

が、人々の不満の渦は遂に爆発した。

何人もの人間が、一斉に階段を駆け上がって外に出始めたのである。

「やめてください!! 許可なく出ないでください!!」

警察が必死に抑えようとするが、少人数で人の波を押さえつけることはできなくなっていた。

だが、大半の人間は相手にせずシエルターの中に残っていた。

「いたいた、ミッチー!!」

そんな様子を茫然と見ていると、吉道は背後から友人の声を聞いた。

そこには、愛菜の袖をつかんで連れてきた堅太郎の姿があった。

「今ならいけるぞ! 妹さんも見つけて連れてきたから、一緒に逃げようぜ!」

「ねえ、兄貴!! この人何とかしてよ!! 絶対イカれてるって!!」

愛菜が堅太郎の手を振りほどこうとするが、堅太郎の手は袖をつかんで離さなかった。

「えっと、吉道のお友達の堅太郎君だよね…?」

「あつ、お母さんですか!? このシエルターにいたら死にますよ!! 早く逃げましょ!!」
「待って待って、お母さんちよつと混乱しちゃった…。なんでこのシエルターにいたら死ぬの…?」

母は堅太郎の言葉を理解できずに怪訝そうな顔をした。

「オ、オバケン……いくらなんでもやりすぎだつて……!!」

「やりすぎなもんかよ!! お前は俺と違って一緒に住んでる家族がいるんだから、一緒

に逃げなきやダメだろ!? さ、ほら早く!!」

そう言うとき堅太郎は愛菜から手を放して階段の方へ駆け寄った。

「…母さん、愛菜、行こう」

覚悟を決めた吉道は堅太郎の後に続いた。

「え? ここから出るの!? せつかく避難したのよ!?」

「兄貴さあ、正気じゃないでしょ!?」

「ゴジラはこのシエルターだつて焼き尽くすんだよ!! ここ…千葉市はゴジラの進路上だ! みんな殺される!」

「な、なんでだよ!! ここシエルターなんだよ?!? 焼かれないようにできてんじゃん!!」

何度言っても分かってくれない兄に苛立ち交じりの悲しさを覚えたのか、愛菜は目に涙を浮かべ始めていた。

「じゃあさ、いったん外に出て、あの人が言ってる動画だけ見てみようよ! それで全て分かるはずだから……」

そう理由をつけて吉道は無理矢理母の腕を引っ張った。

「じゃあその動画見て、父さんとおばあちゃんだけ見つけたらすぐ戻してくれる?」

母が問うと、吉道は「いいよ」と返す。

「…嫌だよ……怪獣来たらどうすんだよ……」

愛菜は弱々しく愚痴をこぼすと、母の腕にしがみついた。

「吉道急げ!!」

「分かってるよ!!」

堅太郎の声に答えて吉道は一步ずつ階段を駆け上がる。
恐怖と興奮に高鳴る胸を押さえつけながら。

——階段を駆け上がると、そこは戦場だった。



【人類生存数：92億8644万人】

絶望



【1：03 護衛艦「むつ」を旗艦とする第一、第六護衛艦隊、誘導弾攻撃開始】

【同刻 ゴジラ、千葉県中野IC付近を通過、進行速度約時速60km】

【同刻 ゴジラの進路付近に存在する全シエルター、及び全組織との連絡が途絶】

シエルターから外に押し寄せる群衆に紛れて、吉道は一気に外に出た。

そして、そこが戦場と化していることを思い知った。

彼らの頭上を、光弾が列を成して飛来していった。

東京湾の方角を見ると、数十もの護衛艦が群れとなつて一斉に対艦誘導弾を打ち上げていたのである。

そして、それらのミサイルは全て東金方面……ゴジラが進撃しているであろう方向へと突き進んでいった。

戦争映画のような光景が彼らの目前に現実となつて浮かび上がっていたのだ。

「なにこれ、すごい……」

吉道に遅れて外に出てきた母が思わず感嘆の声を漏らす。

群衆は我先にと逃げ出していき、それを警察や自衛隊員が追いかける様子が繰り広げられていた。

「奥さん！お宅の車つてどこにあるんですか？」

堅太郎が母に問うと、母は「えっ？ 家にあると思うけど…」と返した。

「じゃあ吉道の家に向かいましよ！ 早く！」

そう言つて駆け出そうとする堅太郎に、吉道が「ちよつと待てよ！」と声をかける。

「父さんとひいばあちゃんを見つけないといけないし、例の動画つてのも見たいし…」

「バカ！ 動画のことは外に出る理由が欲しかったから言っただけだよ！ 一刻も早く

ここから離れないと！ ”アイツ”が来るぞ！」

「おかしいんだつてこの人!! もう戻ろうよ!!」

愛菜が泣きそうな顔で母に訴える。

「…あれ、待つて!? お父さんいるよ!？」

そう母が指差した先には、群衆に紛れた父の姿があつた。

「おお！ 母さんに吉道と愛菜も！ あと、吉道の友達だよね、君？」

父はこちらまで近づいてくると、その場にいる者を一瞥しながらそう言つた。

「小幡堅太郎です！ お父さんの力を貸して欲しいんです！」

堅太郎は迷わずそう告げた。

「俺もちょうどみんなを呼びに行くところだったんだ！　これ、見てくれ！」

父はそう言つて自らのスマホの画面を家族に見せた。

そこには、件の生配信の映像が映っていた。

溶岩のような赤い液体が流れ、あらゆるものが燃えている九十九里の様子がはつきりと映し出されていたのである。

「転載されたやつだから画質悪いけど……」

「うそ……」と母親が口に手を当てながら絶句した。

「なんだ、結局見るのね。まあ、これで奥さんも妹さんも信じてくれるでしょ？」

画面に釘付けになる愛菜と母に対し、堅太郎が呼びかける。

「この映像を見る限り、噂は本当だ。多目的シエルターも怪獣の攻撃で全滅してる。ここもヤバイんだよ。車で遠くまで逃げないとヤバイ！」

【1：06　ゴジラ、千葉県野呂町付近を通過】

「話のわかる親父さんでよかった。これで助かるぞ、ミッチー！」

堅太郎は嬉しそうに吉道の肩を叩く。

「ていうか父さん、ひいばあちゃんは？」

「ああ、助けに行こうと思っただけど、病院の入り口で門前払いされちゃってさ……。動けない患者はレスキュー隊がヘリで運ぶらしいから、下手に患者を移動させないでく

れって」

「じゃあ、おばあちゃんのこととは任せて大丈夫なのね？」

母が問うと、「うん、大丈夫」と父は力強く頷いた。

「じゃあ、家まで戻って車で遠くへ行こう。交通規制で車が止められてるから、大通りに出なければ行けるはずだ。小幡君は家族と一緒に行かないのか？」

「あ、俺、一緒に住んでる家族がいなくて…」

堅太郎がそう言うのと、父はバツが悪そうに「あー…。ならうちの車に乗せてくよ、うん」と返した。

「あんな映像、作り物だつて!! 空気読めない馬鹿がビビらせようとして作っただけだよ!! なんてみんなそんなことも分らないの!？」

未だに状況を信じようとしないう愛菜は顔を赤くして叫んだ。

「愛菜!!」

吉道が怒鳴ると、愛菜はビクツと肩を震わせた。

「これは現実の出来事なんだぞ。映画でもゲームでもないんだ。正しく行動しないとみんな死ぬ。死んだらもうやり直せないんだからな？」

「吉道もそんなに怒らないで! 愛菜は怖がつてるんだから! お母さんだつて突然こんな目に遭つてもう頭が真っ白なんだから……」

母が涙ぐむ愛菜の頭を撫でながらそう言うと、吉道は「そっか……ごめん」と頭を下げる。

「そんなことしてる場合か！ 早く、走れ！」

堅太郎が怒鳴るように呼び掛け、父は既に前を走っていた。

吉道達も後に続いて走り出そうとしたが…。

その時、彼らは確かに聞いた。

山の向こうから響く咆哮。

今までに聞いたどんな生き物のそれとも一致しない、身の毛もよだつような雄たけびを。

そして、彼らは山の向こうの空が夕暮れのようにぼんやりと赤く染まっていることに気付く。

その様子は、さつき見た生配信の時のそれとまさしく一致していたのである。

その場にいる全員の動きが止まった。

【1：14 ゴジラ、千葉県千葉市若葉区に到達、進行速度低下】

「……………あ、」

やがて、その声を漏らして愛菜はガクリと膝を落とした。

「……ハハハ、本物だよ………本当に来た……」

吉道は顎をガタガタと震わせながら何故か笑っていた。

シエルターから逃げ出した人々は怪獣王の存在を認識し、泣き叫びながら我先にと思っている方向に逃げてゆく。

逃走をあきらめてシエルターの中に戻っていく人もいた。

しかし、あの生配信で繰り広げられた地獄を見たものなら、それがむしろ死地に自らを追いやる行為であることをよく分かっているだろう。

そして、その姿はすぐに目に見える形となつて現れた。

高い建物も塔もないその風景の中で、その怪獣の姿は、あまりにも巨大だったのである。

その様子はまさしく山そのものが自力で動いているのと同等の迫力をもって、人々が己が神たる所以を知らしめていた。

天高くそびえる巨軀に、黒い岩のような表皮。

その肌は、既に数万発の徹甲弾とミサイル、爆弾を浴び続けてなおかすり傷の一つも残していない。

大きく裂けた口からは赤い火炎が噴き出し、怒りに血走った眼ははるか遠くの人間す

らも見据えている。

時節護衛艦の巡航ミサイルが命中し、その体は爆炎に包まれる。

しかし、その度にその煙の中から悠然と傷一つない巨体が現れるのである。

一步一步の歩幅がとてつもなく大きいその体は、あつという間に安川家と堅太郎の元に向かいつつあった。

「親父のバカヤロー!!!」

堅太郎は遠くから迫りくるゴジラに向けてそう叫んだ。

「なんで負けたんだ、親父!!! こんな奴に!!! こんな奴に!!!」

「しつかりしろ!! みんな逃げるんだよ!! 走れ!! 走れ!!!」

興奮し、あるいは怯える一同を一喝したのは父だった。

吉道が愛菜の肩をおぶって立たせ、ようやく走り出す。

ドン、という振動が彼らに伝わる。

怪獣王は、その足踏みの振動すら届くほど近くに迫っているのだ。

「家まで戻ってる時間ない! そこら辺の車でいい!! 鍵空いてる車探して!!」

父が汗をまき散らしながら叫ぶ。

災害時ならば車はキーを差し、いつでも運転できる状態にして放置されているはずだ

からだ。

しかし、不幸にして彼らの近くに車は見当たらない。

吉道は自分の心臓が破裂しそうなほど脈打っているのを感じていた。

ゴジラの方は見ないようにしていた。

夢だ、きつとこれは夢だと己に言い聞かせながら、車が置いてあるであろう京葉道路へと足を進める。

だが、終わりは突然に訪れた。

ピカッ、と彼らの視界が閃光に包まれた。

後ろを走る吉道と愛菜、母は頑丈なブロック塀の影に隠れて閃光を浴びなかったが、前を走る堅太郎と父は運悪く閃光を身に受けた。

そして、何が起きたかもわからないまま、至近距離からの衝撃波が建物を全て吹き飛ばした。

「ああああーっ!!!」

吉道は後ろを走る愛菜の腕を手繰り寄せ、ただ全力で悲鳴をあげることしかできなかった。

ブロック塀のすぐ横でうずくまり、荒れ狂う嵐が過ぎるのを待った。

数秒後、吉道の視界は黒煙に包まれていた。

「あ、愛菜ーっ!!」

右も左も見えぬ中、ただ一つ感じる妹の手のぬくもりを頼りに吉道は叫ぶ。

「あ……あに……兄貴……」

愛菜の途切れそうな声が返ってくる。

「母さん!! 堅太郎は?」

妹の生存を確認した吉道は続けて声をかけるが、返事はない。

吉道は周辺を触って状況を確認しようとした。

が、すぐにその手を引っ込めた。

ブロック塀の断面が、凄まじい高温に熱せられていたのだ。

やがて、すこしずつ黒煙が外に漏れ出て周囲の視界が回復していった。

吉道は、周囲が何もない更地になっていることに気付く。

一分前までは、ここは家が立ち並ぶ住宅街だったはずだ。

何故、何もなくなっているのか?

吉道は状況を飲み込めず、口を開いたまま立ち尽くしていた。

奇跡的に吉道が身を寄せていた箇所ブロック塀だけ吹き飛ばされずに残っていたが、それ以外の部分は他の建物と同じように何処かに吹き飛ばされてなくなっていた。

吉道は言葉を生み出せないまま、背後にいる妹の様子を見た。

愛菜は、吹き飛ばされた塀のブロックのいくつかが直撃し、見るも無残な姿に変貌していた。

右腕の付け根にブロックが命中したらしく、腕の骨が砕け、肉は裂けて血がとめどなく流れだしていた。

さらに側頭部、眼孔の真横にもブロックの角が当たり、皮膚と骨がごとっそり無くなり、右目は挟れて頬の下にまで垂れ下がっていた。

「……い……痛い……」

残った左目から涙をこぼし、全身をガクガクと震わせて愛菜は呟いた。

「あつ……愛菜……!!!」

吉道はあまりのショックで腰を抜き、その場に尻もちをついて動けなくなった。

「兄、貴………い、痛い………痛い……」

左手でぶら下がった右目に触れながら愛菜は訴える。

「あ、あーっ……あーっ……」

吉道は汗と涙にまみれた顔を拭うことすらせず、上ずった悲鳴を漏らすことしかできなかった。

愛菜の斜め後ろでは、積み重なったブロックの下敷きになった母が死んでいた。

といつても、その場に残っているのはズボンを履いた足と付け根の一部であり、ほとんどの部分は瓦礫と一緒に何処かへと吹き飛ばされていた。

父親に至つては遺体の一部すら残つてはいなかった。

熱線に焼かれた後、倒壊した瓦礫に巻き込まれて全身がバラバラに散らばつていったためである。

堅太郎は熱線を浴びたが瓦礫には巻き込まれず、そのまま遠くへ飛ばされていった。地震のような地響きで吉道はその場に倒れ込んだ。

その正体はすぐに分かった。

僅か数百m先を、あの怪獣が歩いていたのである。

見上げても見上げきれないほどの高さを誇る巨神は、苦しみもかく人類をその目で確認しているかのように、ゆっくりと歩みを進めた。

「痛い……痛い………た……す……けて………」

妹のすすり泣く声は、次第に弱くなつていく。

吉道は、もう自分に成せる業が何もないことを知っていた。

妹を助けられる方法もないし、自分が助かる方法もない。

吉道の口と鼻から血が溢れ出た。

瓦礫の山の中に、まばらに転がる人の残骸。

そこにあるのは、虚無と絶望。

死という名の虚無に、人が還っていく。

だがここに広がる地獄は、人が生み出した叡智の焰と瓜二つであった。

人類の悪意が、悪意そのものが形を伴って歩いている。

それこそが怪獣である。

吉道は死の間際、その絶望によって怪獣の真理を知った。

だが、死にゆく彼がそれを知ったところで無意味なことだった。

死んでゆく人間の心を、一体誰が知るというのか。

「……………あ、に……………」

消えてゆく妹の手を握り、吉道はゆっくりと目を閉じた。

このような絶望を背負うくらいなら……………。

こんな醜い世界の真実を知るくらいなら……………。

いつそはじめから……………。

「生まれてこなければ……………よかった……………」

その言葉とともに、少年は虚無へと還った。



小幡堅太郎は廃墟と化した街を彷徨い歩く。

熱線を浴び、皮膚は溶けて垂れ下がり、瞼は繋がって目が開かなくなり、それでも彼はゆらりゆらりと歩いている。

時節苦し気な呻き声をあげ、倒れそうになっても歩き続ける。

目的も意味も分からない。

全身を針の山に刺されているかのような激痛の中、彼は歩く。

“痛い”と思う以外の感情が全て抜け落ちたまま。

歩く以外の行為ができないのだ。

彼がどこへ行き、どこまで命を永らえられるのか。

その答えは、誰も知らない。



遡ること数分。

千葉市内のとある病院。

レスキュー隊の到着を待たず攻め寄せてきた巨大怪獣の前に、職員たちは慌てふためいていた。

職務を放棄して病院から逃げ出す者も多数いた。

患者もまた、勝手に脱走するものが後を絶たなくなっていた。

吉道の曾祖母・長山ハルはそういった喧騒には全く興味を示さず、ただじつとベッドに座って窓の外を見ていた。

その視線の先には、うつすらと姿を現した巨大怪獣の姿があった。

ハルの頭脳に、はつきりと百年前の怪獣の姿が浮かび上がった。

あの怪獣が、今ここに帰ってきたのだ。

「……おかあさん……ごめんね……」

誰に促されたわけでもなく、ハルは掠れた声でそう呟いた。

「もう……お父さんのところに……行くよ……」

そう言うのと、ハルは目を閉じた。

ゴジラの熱線、その衝撃波が病院を吹き飛ばしたのはそれから間もなくのことであった。
た。

『もう、お父さんのところへ行くのよ』

それは、ハルが百年前、ゴジラに殺される直前に母から聞いた言葉であった。

百年経って、その言葉は現実となったのである。



【人類生存数：92億8630万人】

登場人物・用語などまとめ（第二部）

・登場人物

自衛隊

おおまつ ゆうじ
大松勇次

性別：男性

年齢：35歳

陸上自衛隊第四対戦車ヘリコプター隊隊長。二佐。優れた能力により若くして出世した生真面目な男。自衛隊史上初の実戦を前に、隊長ながら自ら一番機を駆って戦場に出る。

おぼた ゆきや
小幡幸哉

性別：男性

年齢：44歳

陸上自衛隊一等陸曹。富士教導団戦車教導隊に属し、34式戦車の車長を務める。小幡堅太郎の父親。飄々とした性格で緊迫した状況下でも軽口を絶やさない。

やました
山下

性別：男性

年齢：28歳

長根^{ながね}

性別：男性

年齢：27歳

いずれも小幡と同じ車両の乗組員で、階級は三等陸曹。砲撃手の山下は生真面目な性格。操縦士の長根は小心だがお調子者。

井村^{いむら}長俊^{ながとし}

性別：男性

年齢：60歳

統合幕僚長。空将。白髪混じりで細目の屈強な男性。制服組のトップとして官邸地

下で閣僚と共に戦況を見守る。

岡崎^{おかざき}征爾^{せいじ}

性別：男性

年齢：58歳

ICA：伊武雅刀

東部方面総監兼呉号作戦統合任務部隊指揮官。実戦部隊の総司令官としてゴジラと

対峙する。厳格な性格だが、部下の戦死に大きく動揺する一面も持つ。

・怪獣

ゴジラ（2054年の個体）

（イラスト：北岡ブルー様）

身長 262 m

全長 592 m

体重 150万トン（最小見積もり値）

人類の核実験により目覚めた史上最強の生物。百年前の個体と同様の種族であり、百年前の個体と同じく核実験の放射能を浴びて急速な進化を遂げたが、その時は地上に現れず、海中に留まった。そして百年間の間、海中で“完全生物”としての進化を続けていたが、2054年の核実験が引き金となって上陸を開始した。

太古の恐竜を思わせる巨大な体躯に長大な尾、荒れ狂う炎のような形状の背びれ、怒りを象徴するかのような血走った眼など、人類が畏怖するに相応しい異様な造形を持つ。その表皮及び体組織は全て未だ人類が知りえない未知の元素と構造で成り立って

おり、想像を絶するほどの高温・高圧・衝撃に晒されても全くの無傷で心臓部を防護する。

体内では百年前の個体と同様の「核分裂反応」と、進化の過程で新たに獲得した「核融合反応」が同時に行われ、生体エネルギーを抽出していると推測されている。核融合反応には海水に含まれる水素を燃料として用いているとされ、定期的に海や湖などで水を摂取する限り、ほぼ無限に活動が可能である。その膨大なエネルギーの余剰分、および強烈な放射線や励起した粒子を口から漏洩させ、大量の炎や高圧熱線を放出し、攻撃をすることができる。

その戦闘力は人類の抑止力を遥かに超え、地球のすべてを焼き尽くしてもなお有り余るほどの力を備えている。目的や意志といった概念は一切不明であるが、明確に人類に対する攻撃本能を備えており、五感のいずれかで人類の存在を認識した瞬間、無慈悲な攻撃でこれを一掃する。

また、百年間という短期間で核融合反応の獲得を始めとする大幅な進化を遂げたことから、従来の生物とは比べ物にならないほど高速で、かつ世代交代を経ることなく単独の個体で進化を行うと推測されている。今後も急速に進化を続けるものと思われる。

熱線放射の段階

第一段階

温度 1500～3000℃

強烈な体温で、体内で生成した何らかの物質を引火させ、猛烈な勢いの赤い火炎を噴き出す。着地点付近では車を紙屑のように吹き飛ばすほどの凄まじい風圧があり、障害物がなければ炎は数km先にまで届く。

第二段階

温度 3000～1万℃

さらに高压の熱放射を行う。炎の色は赤から青に変化し、1万℃近くになると炎からジェットエンジンのような熱線に見た目を変える。ゴジラが使用する頻度が最も高い段階である。熱線ははるか高空にまで届き、戦闘機も容易に撃墜する。

第三段階

温度 1万～1000万℃

TNT換算出力 10キロトン～10メガトン

口腔部で核爆発をおこし、その際に生まれる火球を前方に収束させ、熱線とする。非

常に明るい白色熱線。噴き出すと同時に熱線を浴びた空氣が急激に膨張し、強い衝撃波が発生する。直撃したすべての物体を溶解・蒸発させ、プラズマに変えてしまう。地面に当たるとその熱により容易に抉り、掘りぬく。本編では九十九里沖に現れた際に最初に発したものと、その1時間後に発した熱線がこの段階である。その後も自衛隊との戦闘の中で威力を押さえながらもこの段階を何度か使用。

発射の際の閃光や衝撃波は原水爆の核爆発そのものであり、人間の恐怖心を本能的に刺激する。

第四段階

温度 250万〜1億℃（瞬間最大温度）

TNT換算出力 10メガトン

体内の核融合反応を暴走させ、最大級の放射熱線を打ち出す。発射の衝撃波だけでも小さな平野に相当する広さの全建築物が破壊され、熱線本体は大気圏を超えて宇宙空間に到達するほど高威力・長射程である。また、その衝撃波は地球を何周も巡り、残留放射線は国家一つ分ほどの面積にわたって全生態系を破壊する。ただしそのエネルギー消費ゆえに連続使用はできず、一度使うと海に戻って大量の水素を補給する必要がある。本編においては、南太平洋上で最初にゴジラが放出した熱線がこれに該当する。数

千mの海底で射出したにも関わらず海面上にまで放射性物質を残し、太平洋に面する全国家に大津波をもたらした。

・自衛隊の防衛計画

X—X号計画（海上・海中・水際迎撃）

国内進行の恐れのある怪獣を海上もしくは海中で捕捉・発見し、日本領土到達まで時間的猶予があると認められた場合に発動される水際迎撃作戦。日本全国の領海と接続水域を大まかにA—Zのアルファベットで区切り、さらにその中の特定箇所を一桁の数字で区切ることに、計画名を記号化している。例えば、東京湾全域は作戦区域“A—A”に分類され、さらにその中で羽田沖・東京都近海での迎撃が決定された場合、“A—1号計画”となる。本土以外の領土、例えば孤島などは全て作戦区域“Z”に分類され、“A—1号”から“Z—9号”までの防衛計画は既に統合幕僚監部によって綿密に詰められ、発動準備が整えられている。

作戦は海上・海中が主な戦場となるため、主戦力は海自であり、以下のような流れで行われる。

作戦第一段階：哨戒機による威力偵察。対潜爆雷投下による攻撃。

作戦第二段階：高速哨戒艇・警備艇による爆雷攻撃。

作戦第三段階：護衛艦による爆雷・魚雷攻撃。

作戦第四段階：潜水艦による魚雷攻撃。海中索敵による敵怪獣殲滅の確認。

ただし、敵の規模や能力・作戦海域によつては、順番が前後したり行われない攻撃があつたりすることもあることには注意されたし。敵が海中ではなく海上に出てきた場合、砲撃やミサイルの使用も視野に入れられている。

本編中では自衛隊の展開速度に比べてゴジラの進行速度があまりにも早かつたため実行は見送られ、内陸迎撃作戦を実施することとなつた。

XX— X号計画（内陸迎撃）

水際迎撃で怪獣を撃滅できず、もしくは怪獣が発見された時点で目標個体が極めて陸地に接近しており、海上で攻撃を行う時間的猶予がないと認められた場合に発動される計画。上陸した後の怪獣に対し、主に陸上戦力を用いて攻撃を行う。内陸部はより詳細に戦闘区画を分ける必要があつたため、アルファベット二文字と一桁の数字で分けている（AA—1号など）。

内陸部が主戦場となるため主戦力は陸自と空自となり、主に以下のような流れで作戦が行われる。

作戦第一段階：哨戒機による威力偵察。対戦車ヘリによる攻撃。

作戦第二段階：戦車部隊、特化部隊による火力攻撃。

作戦第三段階：戦闘機による空対地ミサイル・誘導爆弾攻撃。敵怪獣殲滅の確認。
本編では千葉県東金地方を戦区画とするCB―5号計画が行われた。また、作戦第四段階として千葉市沖に配置された護衛艦隊による支援攻撃が設定されている。

また、米政府の意向に沿って在日米軍との共同作戦も検討されており、その際には一時的に米軍の一部が自衛隊の統合任務部隊の指揮下に入ることも認められている。

ゴジラに対する日本本土防衛作戦は“呉号作戦”と名付けられ、上に述べた計画に則って実行に移された。

・登場兵器

陸上自衛隊

・攻撃ヘリ

AH―64E “アパッチ・ガーディアン”

保有数：123機

価格高騰により調達が打ち切られたA H—64 D“アパッチ・ロングボウ”に代わり導入されたアメリカの攻撃ヘリコプター。初飛行から50年以上が経過しているが、内部構造や電子機器を改良して使用され続けている。なお、現在使用されているものは全て2030年代以降に新造された機体である（従来の機体は老朽化により解体された）。かつて使用されていたA H—1 S“コブラ”は老朽化により2020年代に全機退役し、アパッチに更新された。

・戦闘車両

50式戦車

保有数：50両

2050年に正式配備が始まった、最新鋭国産戦車。情報処理システム“C4I”のさらなる高度発展が顕著であり、敵を認識した瞬間にコンピューターが目標を定め、最適箇所に攻撃を加えることができる。主砲は従来と同口径の120mm滑腔砲であるが、改良を重ねた国産APFSDSを装備し、攻撃力は従来のものより大幅に増加している。防護力に関しては新複合素材の使用により、従来と同等性を保ちつつ軽量化が図られた。これによって重量は45tにまで抑えられ、C—3輸送機などによる空輸が可能となっている。

34式戦車

保有数：228両

2034年に配備が始まった、国産第五世代戦車。先代の10式戦車から標準装備となったC4Iシステムを維持しつつ、将来の装備発展を予期して高い拡張性を備える。最新鋭の50式戦車の配備両数が未だ少ないため、現状では日本の主力戦車である。

45式機動戦闘車

保有数：530両

2045年に採用された、国産装輪装甲車（装輪戦車）。先代の16式機動戦闘車を代替する形で配備された。装輪戦車として初めて120mm滑腔砲の搭載に成功しており、戦車部隊への強力な火力支援兵器として期待されている。装輪装備によって時速120km以上の高速で移動可能であり、50式戦車同様各戦闘区域への迅速な展開が可能。戦車よりも安価で数がそろえやすく、戦車を配備していない地方駐屯地にも積極的に配備されている。

海上自衛隊

・艦載兵器

艦砲用65口径127mm電磁加速砲（127mmレールガン）

2000年代初頭からアメリカで研究が開始され、2028年に完成、2041年に日本が正式採用した電磁加速砲（レールガン）。ローレンツ力により弾丸を加速し、射出する砲である。ミサイル・航空機の迎撃など、一般的な軍事活動を念頭に置いた兵器であるが、怪獣の殺処分への使用も視野に入れている。ミサイルより一発当たりのコストがはるかに格安で使用でき、新世代を担う兵器として期待が高まっている。弾丸初速はマッハ7に達し、有効射程は数百kmに及ぶ。しかしながら発射には大量の電力消費が付きまとい、これを賄うための大型の発電機が必要となるため、発射機構そのものが大型化してしまうという欠点がある。アメリカのズムウォルト級ミサイル駆逐艦、むつ型護衛艦などが標準装備。

・護衛艦

むつ型護衛艦

同型艦：「むつ」、「あまぎ」、「しなの」

2040年代から竣工が始まった護衛艦の艦級。日本の艦艇としては初めて電磁加速砲（レールガン）を装備している。基準排水量17000トン、全長210mの大型艦であり、名前も相まって“現代の戦艦”などと一部から呼ばれている。従来の護衛艦

に比べると対怪獣戦に重きを置いており、電磁加速砲のほか、対生体用に転用可能な対艦ミサイルを多く配備している。

・航空機

S H—60 L

保有数：96機

従来のS H—60 Kからさらなる改良を遂げた海自の哨戒ヘリ。レーダーと対潜能力が格段に上昇しているほか、対艦ミサイルの装備も可能。

航空自衛隊

※本作では、空自においても米軍などと同様、機体に公式の愛称を与える慣習が2020年代ごろから定着した。

・高射兵器

52式地对空戦術光子砲（対空レーザー）

アメリカの技術付与を受けた日本が、弾道ミサイル迎撃のために少数生産した対空レーザー砲。本体はトレーラーによって牽引され、レーダー車やアンテナ車など、複数

の車両で一つの迎撃ユニットを形成する。レールガン同様、従来の対空ミサイルなどと比べると一発当たりのコストが軽く、また電気さえあれば弾数はほぼ無限と考えることができる。これまで問題となっていた製造コストや小型化などの課題も技術刷新によってある程度解決されており、レーザー兵器は全世界で配備が進んでいる。

・戦闘機（支援戦闘・対地攻撃を主任務とする機体も含む）

F-51J “ヘルホーク”

保有数：148機

アメリカの第6世代ジェット戦闘機を日本がライセンス生産したもの。F-35よりもさらに強力な武装とステルス性を備える世界最高峰のマルチロール戦闘機。F-35の退役に合わせ、2040年代から配備が始まっている。

F-3 “スーパー・ファルコン”

保有数：135機

2032年に初飛行を遂げた、日本の半国産戦闘機。“ファルコン”は“隼”を意味し、旧日本陸軍一式戦闘機・“隼”に由来する。双発機であることから高度な機動性を有し、ステルス性も考慮された設計となっている。制空戦闘・対地対艦任務の双方をこなせるマルチロール機で、ウエポン・ベイには6発の対艦ミサイルを搭載可能。

F-4 “リファインド・ゲール”

保有数：16機

2051年に配備が始まったばかりの、最新鋭国産戦闘機。“ゲール（gale）”は“烈風”を意味し、旧日本海軍の試作戦闘機“烈風”に因む。戦後初めて、航空機エンジンから各部品に至るまでを完全に国産化した機体であり、戦後長らく他国の後塵を拝する状況にあった日本の航空技術が、本機をもって世界に並ぶレベルになったことを知らしめた。対地対艦攻撃力を維持したまま従来の戦闘機とは比べ物にならないほどの運動性を発揮させることに成功しており、レーダーやステルス機能の大幅強化も相まって、“烈風”の名に恥じぬ世界最強クラスの戦闘力を誇る。

・その他航空機

C-3 “トプシー”（輸送機）

保有数：67機

2020年代に計画され、2032年に正式採用された空自の大型輸送機。愛称の“トプシー”は、旧帝国陸軍の主力輸送機“一〇〇式輸送機”の連合軍によるコードネームに因む。全長は60mを超え、従来のC-1、C-2よりもさらに大型化しており、輸送重量の大幅な増加によって、国産輸送機としては初めて戦車などの主力機甲戦力に対

する空輸能力を備える。怪獣や非対称戦闘など、国家以外の仮想敵が重要視される時代になってからは、全国のかなる場所にも迅速な戦力輸送を可能とするため、機甲部隊が多く駐屯する基地に配備されている。

第三部 亡国の巨神

背水



【米国ワシントンD・C. 時間 11月3日 12:12 (日本時間 11月4日 1:12)】

ワシントンD・C.、ホワイトハウス。

「日本は怪獣^{モンスター}を仕留め損ねたか」

アメリカ合衆国大統領、トーマス・A・メルヴィルは椅子に深く腰掛けながら呟いた。
「大統領、日本の内閣より一刻も早い我が国の軍事行動を要請する旨が再三通知されています」

眼鏡をかけた金髪の女性、国務長官のアマンダ・アシュベリーがメルヴィルに告げる。
「安保がある以上、我が国が動かないわけにはいかない。：しかし、太平洋の主力たる第七艦隊をわざわざ神の怒りに触れさせるメリットはあるのか？」

アシュベリーに苦言を呈するのは、国防長官のマイルズ・フェアクロフであった。

「世界の目は今、日本のモンスターただ一つに向けられています。我が国の基地や大使

館を奴に破壊されるようなことがあれば、合衆国の沽券に関わります」

「しかし、自衛隊の装備は、数こそ少ないが質においては世界の上位に位置している。その自衛隊をもつてしても傷一つついていないというのだ！　我が国がまともに戦^やりあえるかどうかも定かではない！」

フェアクロフは声を荒げて反論する。

「手立てはいくらでもあるだろう」

メルヴィル大統領は両手を机の上で組み、正面を向いた。

「我が国には、日本にはない対生体兵器もある。グアムと横須賀の戦力で十分だ。日本に大ダメージを与えた怪獣を殺処分すれば、アジアにおける我が国の立場は一層上昇し、日本もより我が国に従順となる。…そも、我が国に対立する国家のほとんどは、かのモンスター……確か“Godzilla”と言ったか………それを生み出した責任は我が国にあると主張して憚らない。そう言った連中を黙らせるためにも、我が国がかのモンスターを倒すことに意義はあると私は考える」

メルヴィルの答えに、閣僚一同に緊張が走る。

「大統領…万が一、万が一、通常戦力で奴を倒せぬ時は…？」

フェアクロフが尋ねる。

「奴を生んだ焰を、もう一度浴びせてやればよい」

メルヴィルはそう即答した。

「…その一撃が英雄の刃となるか、愚かな過ちの繰り返しとなるか、楽しみですな」
フェアクロフは皮肉交じりにそう答えた。

【ワシントン時間12:15（日本時間1:15）メルヴィル大統領、大統領令20579号に署名】

【同刻 米軍、対怪獣防衛作戦『Operation Yamatoヤマト作戦』発動】



【1:20 ゴジラ、千葉市街を進行中】

「議長！ 早く避難の準備を!!」

怪防会では、都心からの避難指示を受けて職員たちが慌ただしく避難準備を行っていた。
目一杯のデータを持っていくこうとする者や、何も持たずに既に建物から逃げ出してしまった者もいた。

そんな中、議長の池田和宏は避難の意思を見せず、机の上の資料を読み漁っていた。

「議長！」

そんな池田に、副議長の福原謙三が声を荒げる。

「うるさいな。避難などしても無駄だ。君もSNSの映像を見ただろう？ シェルターにしようが、ここにしようが、死ぬ確率は一緒だ」

「そんなことは分かっています！ だからこそ、一刻も早く東京を離れないと！」

「考えることは皆同じだ。真実を知ったことで人々は混乱し、行政は完全に機能を停止している。交通は全て停止し、道も人でごった返している。そんな状況では東京はおろか23区すら抜けられないだろう」

池田はパソコンを開いて操作しながら冷静に答えた。

「では議長はここに残って何を？」

「決まっているだろう、仕事だ」

池田は印刷機の前に行き、そこから出てきた紙を一枚一枚眺めた。

「見たまえ。足跡の形状と深さ、上陸直後の写真などから割り出されたゴジラのスペックだ。身長は262m、体重は最小の見積もりで150万トン。さらに興味深いことに、ついさつき撮られた写真と比べると、建物の比率から身長が262.7m程度に伸びている」

「…伸びている……？」

福原が資料を見て怪訝そうに呟く。

「ああ。このゴジラは、今こうしている間にも成長している。奴が上陸して四時間足らず。その間にこれだけの成長を見せている。奴は生物の常識を遥かに超えた速度で進化しているんだ。恐らく、この成長はまだまだ続く」

「……そんな……じゃあ、あの化け物が……さらに強くなると……？」

福原は声を震わせながら尋ねる。

「そういうことだな。……よし、たった今、私達が割り出した精一杯のデータを、中東にいる私の友人に送った。これで我々が死んでもデータは残る。まずは一安心だな」

そう言つて池田は近くの椅子に腰掛けた。

「なあ、福原君。我々人類の百年間は何だったのだろうか」

「……………」

福原は立ち尽くしたまま答えられなかった。

「2006年に設立された怪防会は、“ゴジラが海中で死んだ”という情報を頼りに、その海域のあらゆる情報を探った。海中生物、バクテリア、海水成分に至るまで。全てを調べ尽くしたのだそうだ。だが、巨大生物を駆逐しうる要素は一切見当たらなかった。そして結局は、怪獣対策の方針は『現有兵器の強化』で固められてしまった。私も、それでいいと思い込んでいた。実に愚かな百年間だった」

やがて職員たちは全員部屋を後にし、静まり返った空間に福原と池田だけが残った。

「海に奴を倒すヒントがある。それが分かっていたのに、考えることをやめてしまっていた。それからの怪防会は君も知つての通り、徹甲弾や徹甲ミサイルを開発する兵器製作所のような場になっていった。ゴジラを倒せる唯一無二の方法から目をそむけた結果がこれだ」

池田は真つ暗になったモニターを見た。

そこには先ほどまで、ゴジラが市街地を蹂躪する様が映し出されていた。

「結局、人は何年たつても同じ過ちから進化することができないのかもしれない。水爆実験が繰り返されたこともまた然り……」

「議長！　日本は、人間はまだまだ先に進めます！　この国を、人類を最後まで見捨てずに戦いましょう！」

福原は机を叩きながら池田にそう呼びかけた。

「ああ……そうだな。分かっているさ。今、データを送った私の友人もそう言っていた。彼は、怪防会が解明できなかった謎を解き明かすために世界中を渡り歩いている。彼なら……ゴジラを倒す手がかりを得てくれるかもしれない……」

池田は上を向き、その友人の姿を思い出しながら言った。

「二人とも、まだ残っていたのですか！」

不意に声が響く。

二人が声の方向を向くと、怪防会と統幕監部の橋渡しを務めていた辻一尉がいた。「早くここから逃げてください！ ゴジラは都心に迫ってるんです!!」

「福原君、さっき私が君に言ったことをそのまま言っただけです。私は疲れたよ」

池田は椅子に深く座りなおしながら言った。

福原は困惑して池田の方を見る。

「辻君こそ逃げなくていいのか？」

「自分は自衛隊員です！ 他の方の安全を確認するまでは持ち場を離れません！」

「そうか。真面目だな……」

呆れたように言うと、池田はゆっくりと立ち上がる。

「やれやれ、ここを動くのは少し面倒だが、彼を言いくるめる方が面倒だ。彼の言うとおりにするか」

「二人とも、こっちです！」

辻の言葉に従って二人は部屋を後にした。



【1:10】

ゴジラが千葉市街に到達する直前にまで時間は遡る。

作戦の趨勢を見守る東部方面総監部は沈黙に包まれていた。

あのような惨事を目の当たりにして、誰も言葉を発する余裕などなかった。

ある者は怒りに、またある者は悔しさに体を震わせ、ただ悠然と闊歩する巨神を眺めていた。

「損耗率、戦車部隊、86%。特科部隊、73%。航空部隊、45%。いずれの部隊も残弾無し、後方へ撤退中。護衛艦隊、なおも攻撃続行中！」

戦闘経過の報告だけがその空間に響く。

「ゴジラ、千葉市に接近中！ 護衛艦隊を視界に収める距離に到達します！」

「…全艦に到達。砲撃戦用意。火砲及び電磁^{レールガン}加速砲、砲門開け」

岡崎総監は重い口を開いてそう命じた。

「了解！ 護衛艦隊司令部に砲撃戦の用意を傳達します！」

「Mr. 岡崎、失礼します」
ミスター

不意に、流暢な英語が岡崎の耳に入った。

ふと顔をあげると、海軍服を着た数人のアメリカ人がそこに立っていた。

「初めまして、岡崎中将。私はアメリカ海軍第七艦隊副司令官、サミュエル・D・テンパーソン海軍少将です。来たる「ヤマト作戦」の発動に伴い、我が軍は国際法に基づいて自

衛隊と統合的な作戦行動を行います。そのため、自衛隊の実戦部隊を運用するこの場に参りました」

テンパートン少将はそう名乗ってにこやかに握手を求める。

通訳の話を聞いて岡崎は握手を返したが、笑顔まで返す気にはなれなかった。

「…手始めにそちらの作戦概要を教えていただきたい」

テンパートンが席に座るや否や、中田幕僚長が尋ねる。

「はい。大統領令の発動を確認後、東京湾にて待機中の空母『フランクリン・ルーズベルト』より発進する第5空母航空団により、対生体爆弾を投下します。また、グアムのアーンダーセン航空基地を発進した第36航空団による攻撃も行います」

部下が渡した計画資料を見ながらテンパートンは答える。

「その、対生体爆弾というものは？ 通常兵器とは異なるものなのか？」

岡崎が尋ねる。

「はい。敵が単個の生物であるという事実在即し、硫酸や塩酸をはるかに凌ぐ酸性度を持つ『フルオロアンチモン酸』を内包した『超酸爆弾』を使用します」

その言葉に、自衛隊の幕僚達がどよめき立った。

「なにっ?! 超酸だっ?!」

岡崎はにわかに声を張り上げる。

「それは化学兵器じゃないのか!? 禁止条約に接触するぞ!」

「しかし近年、そういった条約を怪獣対策のために一部撤廃すべきであるという議論が巻き起こっていることは貴官も承知でしょう。我が国がその論理を証明する最初の例となればいいのです」

「何を言うか! 議論が巻き起こっていようと、現時点では条約に例外は認められていないのだぞ! それを黙認したとあつては、我が国と貴国の立場はどうなる!」

「総監! 恐れながら、今は我が国の立場ではなく、我が国の存続を考えるべきです!」
いきり立つ岡崎を止めたのは中田だった。

「通常兵器では傷の一つすらつけられない相手です。相手が生物であるという点を有効に突くことができる超酸爆弾の攻撃に私は賛成します!」

空間に再び沈黙、走る。

「…分かった。元より、我が国は貴国の作戦にノーと言える立場ではないのだ」

岡崎がそう言うのと、「ご理解に感謝します」とテンパートンは告げる。

「だが、ゴジラは現在人口密集地にいる。そんな場所で落として大丈夫なのか?」

「地上の建築物に被害が出る恐れがありますが、地下深いところにいる人間に危害を加える心配はありません。我が国は、日本政府の避難完了報告を信用して作戦を立案していますから」

テンパートンはそう答える。

「……そうか……」

岡崎の脳裏に、多目的シエルターに駐屯している部隊の連絡がよぎった。

『シエルター内で脱出を求める人々が暴動を起こしている』

…まさか、本当に脱走しているなどということはあるまい、と思うしかなかった。

多目的シエルターの連絡が途絶えた今となつては、人々が本当に脱走していることも、ゴジラがそれを蹂躪していることも知ることはできなかった。



【1:15 ゴジラ、千葉市を攻撃中】

千葉市沖。

第一護衛群旗艦「むつ」。

「艦長！ 5時方向に敵影見ゆとの報告です！」

「むつ」副長、大和田二佐が告げる。

「攻撃を艦砲射撃に切り替える!! 全砲門、照準合わせ!!」

報告を受け、艦長の黒木一佐が命じた。

右舷側の光景に釘付けになった乗組員たちは、やがて赤い空の中から巨大な生物が姿を現したことに気付き、戦慄した。

と、その時、パツと強い閃光が彼らの視界を覆った。

「総員伏せ——っ!!」

黒木一佐が叫ぶと、一斉に乗員たちは床に伏せる。

一瞬で閃光は消え、黒木は恐る恐る顔をあげて外の様子を見た。

空には悠々とキノコ雲が立ち上がり、衝撃波が建築物を薙ぎ払いながらこちらに向かって来ていた。

「対ショック防御——っ!!」

黒木が叫ぶと同時に艦の外を凄まじい暴風が吹き抜けていった。

艦は激しく揺れたが、やがてそれは収まった。

この頃、この一撃によつて安川一家は全滅していた。

乗員たちは次々に立ち上がり、状況の確認を急ぐ。

「各艦、航行及び作戦行動に支障なし!」

「砲撃準備を続行する! 各砲門、撃ち方用——意!!」

砲門が旋回し、キノコ雲の根元から姿を現したゴジラに向けられた。

陽炎が轟々と立ち上る中、ゴジラは遠くから自分を狙う愚かな艦隊を見下ろした。

「黒木艦長、やれるか?」

西野第一護衛群司令が尋ねると、「いつでもいけます!」と黒木は答える。

「よし! 全艦撃ち方はじめ——!!」

「全砲門、撃ち方はじめ!!」

二人の指令とともに、火炮と電磁加速砲が一斉に火を噴いた。

爆音が響き、艦全体に衝撃が走る。

音速を越えた弾丸がゴジラの胸に突き刺さる。

今までとは違う強度の衝撃に、思わずゴジラは足を止めた。

「初弾命中!」

艦内にその報告と次弾の射撃音が響く。

「奴も仕掛けてくるぞ! 全艦最大戦速だ!」

西野群司令が命ずると、黒木も「機関全速! とーりかーじ!!」と叫ぶ。

護衛艦隊は射撃を続行しつつ回避行動を開始した。

と、その時、彼らは射撃音とは別の爆音を聞いた。

空からの、聞きなれた音である。

「群司令、米軍機が現着しました! 怪獣に対し、爆撃を開始します!」

「了解した」

西野はそう答え、空を駆けていく友軍機を見据えた。

「……が最後……この艦と米軍が日本最後の砦だ……」

汗の浮かんだ額を拭いながらそう呟いた。

殲滅

「1:22 米空軍第5空母航空団、攻撃開始」

Attack now Weapons away
「攻撃開始：爆弾投下！」

空母『フランクリン・ルーズベルト』を発進した米軍機より、超酸爆弾が投下される。爆弾は真つすぐゴジラの頭部へ向け落下し、頭の少し上で爆発した。

爆弾の規模の割には小さい爆発である。

代わりに、爆弾内から弾け出た超酸液がゴジラの頭部に降りかかった。

周囲に飛び散った液の威力はすさまじく、それを浴びた車は一瞬にして大穴が空いていった。

ゴジラの鼻先、頬、首筋を超酸液が伝い、降りてゆく。

「超酸爆弾、命中を確認！」

砲撃を続ける「むつ」艦橋上で観測士が叫ぶ。

「効果はどうだ？」

「ゴジラの表皮に融解は認められず！ 効果なし！」

その報告に黒木一佐は顔を歪ませる。

「奴の体表は酸すらも通さないと……!?!」

西野群司令が驚きの声をあげる。

「米軍より通達! 目標を眼孔及び口腔部に再設定し、第二次攻撃を行うとのこと!」

「粘膜を狙うつもりか……それならばあるいは……」

「群司令! 我々も粘膜部に攻撃目標を移行しましょう! 表皮への攻撃は弾薬の無駄です!」

黒木一佐が西野に呼びかける。

「しかし、怪防会の見解は『核融合炉を搭載する心臓部の破壊こそ駆逐の決定打である』となっている。粘膜を攻撃したとて、本体を倒さねば意味が無からう!」

「しかし群司令! 数万発の徹甲弾と電磁加速砲でも傷すらつけられぬ表皮を攻撃することは無意味です! 少しでもゴジラに傷を与え、奴の戦意を奪うことこそ先決と考えます!」

黒木は懸命に自らの意見を述べた。

「ううむ……分かった…。超酸爆弾の炸裂後、同箇所集中砲火を浴びせる。次の攻撃に備えろ!」

「全砲門、撃ち方やめ! 目標変更!」

黒木の号令で砲撃は止み、米軍の第二次攻撃に向けて待機した。

米軍機は大きく旋回し、ゴジラの方へ向き直る。

その戦闘機群を、ゴジラは空を向いて睨みつけた。

そして、戦闘機から超酸ミサイルが発射された瞬間、ゴジラは大きく咆哮をあげた。その口内に、超酸を内蔵したミサイルが突き刺さり、爆発する。

同時に、顔面にもミサイルが命中し、その目に超酸液が降りかかった。

「撃ち方はじめえっ!!」

ミサイルの命中を確認した瞬間、黒木は叫んだ。

畳みかけるように電磁加速砲がゴジラの網膜と口腔内に炸裂する。

その時、男達を見た。

噴煙に紛れてほとぼしる赤い血。

ゴジラの粘膜部からの出血を。

「目標生物の出血を確認！ 効果あり!!」

観測士が告げると、艦内に「おお！」と歓声上がる。

これだけの長時間、限らないほどの弾薬と兵器、そして人命を消費し続けての初めての戦果である。

「続いて撃て!! 回復の暇を与えるな!!」

西野がそう叫ぶまでもなく、各艦は猛烈な射撃を続行する。

ゴジラは口から血を流しながらも、再び咆哮をあげる。そして沖合へと歩みを速め始めた。

そして、その口腔部から真つすぐに青い熱線を吐き散らす。

熱線は海上に落ち、水蒸気爆発が立て続けに起こった。

射撃を続ける各艦に水しぶきが落ち、視界が遮られる。

高速で回避運動をとる艦に狙いをつけ、ゴジラは熱線を吐いたままの首を横に振った。

瞬間、後列の「さかわ」が熱線の直撃を受けた。

上部構造物が一瞬で吹き飛ばされ、艦橋の職員たちは何が起きたかもわからぬまま蒸発してガス化した。

熱線を浴びた艦体も蒸発し、真つ二つに折れて沈んでゆく。

各艦の乗組員たちがあげていた歓声は、一瞬にして悲鳴へと置き換わった。

「さかわ」被弾!! 轟沈します!!」

「むつ」の艦橋にもその悲痛な報せが飛び込んでくる。

「周辺の艦は救助艇を出せ! 他艦は攻撃の手を緩めるな!!」

西野は海に消えてゆく「さかわ」の方を見ながら叫んだ。

そのままゴジラは顔を上空に向けてゆっくりと上げた。

青い熱線が天を二つに割り、空に昇ってゆく。

米軍機が回避運動を繰り返しつつ彼方の空へ飛び去ろうとするのを、ゴジラは見逃さなかった。

ゴジラが少し顔を傾けると、熱線は戦闘機を追いかけてゆく。

パイロットの顔が恐怖に歪む。

米軍機は、一機、また一機と熱線を受け、瞬間に爆散して夜空に消えていった。

ゴジラが顔を下ろすと、「むっ」の乗組員たちは、その眼球が傷一つない状態に再生されていることに気が付く。

「全艦戦域離脱!! 後方に退避して態勢を立て直す!!」

西野が辛うじて声を張り上げる。

希望は、一瞬にして潰えた。

ゴジラは海に向けて足を速める。

足元に転がる建築物を紙屑のように蹴飛ばしながら、真つすぐ“敵”の方角へと進んでゆく。

燃え盛る赤い炎を吐き、千葉市の街中を業火で彩りながら。

そして多目的シエルターがあると認識した部分は青い熱線で地面ごと抉り、マグマが流れる大穴を穿つことも忘れなかった。

護衛艦隊は、ゴジラに背を向けながらも砲撃、ミサイル射撃を続けていた。

「ゴジラ、速度上昇！ 本艦へ向け突貫する模様!!」

「むつ」の観測士が叫ぶ。

「我々を越えた先には都心がある。何としても進ませるわけにはいかん!」

黒木の言葉通り、ゴジラが護衛艦隊を越えて東京湾を横切れば、その先にあるのは国家中枢部、東京である。

大混乱に陥った市民が逃げ惑う東京が、そこにあるのである。

「……!? 艦長、緊急事態です!! 最後列の「くまの」より、ゴジラの周辺に民間人がいるとの連絡が!」

「なんだと!?!」

黒木と西野は驚愕を隠しきれぬ表情になる。

「そんな馬鹿な!! 我々は三十分以上前に千葉市の避難完了報告を受けているんだぞ!!」

「ですが、「くまの」の観測士が確かに確認しています!! このまま作戦を続行しては危険です!!」

あまりの衝撃に、西野は言葉を失った。

「米軍の第二次航空攻撃が開始されます!!」

「まずい!! 総監部と米軍に攻撃中止を伝えろ!!」

黒木がそう命じるころには、既に第二次攻撃が開始されていた。



「なにっ??! 民間人だど??!」

報告を受けた岡崎は思わず立ち上がっていた。

「や、やはりシエルターの混乱で脱走したのか…!! 攻撃中止!! 中止だ!!」

顔を赤くしてそう叫ぶが、「お待ちください!」と止めたのは米海軍のテンパートン少将だった。

「……で攻撃を中止したとして、東京にゴジラが進めばどのみち民間人の犠牲は増えるだけでしょ」

通訳が彼の言葉を伝えきる前に、「そうではない!」と岡崎は反論した。

「国民を攻撃した事例が生まれてしまつては、自衛隊はもう存在できなくなる…!! ゴジラを倒したとしても、その後がなくなる!!」

「今がなくなるか、後がなくなるか、あなたはどちらがお好みなのですか?」

「……………」

テンパートンの言葉に岡崎は黙り込む。

「我が軍も既に貴重な航空戦力を三機失いました。ですが、それと引き換えに、“粘膜部であればダメージを与えられる”という成果を得たのです。それを生かすべく、今から沖合の艦隊主力が総攻撃を行います。自衛隊にもご協力を願いたい」

「……我らに、国民を巻き添えにして戦う決断をしろと……」

幹部たちは黙るほかなかった。

◆◆◆
どちらの答えも正しく、しかし軍人の本義には反するからであつた。

東京湾洋上。

激戦地から20 km以上離れたこの海域でも、遠くの空が赤々と輝いているのはつきりと見える。

そのような中に、空母『フランクリン・ルーズベルト』を中核とする第五空母打撃群はいた。

Cleared for take off
「離陸許可！」

全長350 mに達する海の城塞、空母『フランクリン・ルーズベルト』からは、次々に最新鋭の戦闘機が飛び立っていった。

先行した仲間たちが撃墜されたという報を聞き、彼らの心は復讐に燃えていた。

世界最強の機動部隊としての矜持と、仲間を討ち果たしたもののへの義憤が、彼らを“神”との決戦へと駆り立てていく。

その闘志が絶望に打ちひしがれる時は、そう遠くはなかった。

空母打撃群と駆逐艦隊に随伴する第七艦隊旗艦、揚陸指揮艦『ロッキード』の司令を受け、全艦は一齐にミサイルと艦砲による射撃を開始した。



ゴジラは遂に再び海に足をつけた。

自分から逃げてゆく護衛艦隊を追いかけるように、海を割って突き進んでゆく。

だが、その視線の先にあるのは護衛艦隊ではなかった。

護衛艦隊よりはるかその先、水平線上に浮かぶ小さな影。

米軍第七艦隊である。

ゴジラの顔が突如酸液に包まれた。

米軍機による第二次攻撃である。

そして、米艦隊の対艦ミサイルと砲弾が続けて着弾した。

自衛隊とは比較にならない密度の火力投射が休みを置かずに襲い掛かる。

ゴジラは海上で足を止めた。

自身への攻撃など歯牙にもかけず、遠くに位置する米艦隊へと体を向けた。

背びれが先ほどより強く、白く輝き始める。

ゴジラが体を細かく震わせると、それに呼応するかのように周囲の空気や海水も振動を伝える。

ゴジラが正面に向けて口を開いた瞬間、まばゆい閃光が全てを包んだ。

口腔部で核爆発が起き、その閃光を浴びた全てのは数千度の熱に晒された。

人間の皮膚は一瞬で溶け、無機物は水分を失って焼き尽くされる。

その数十万分の一秒後には、核爆発のエネルギーは強烈な熱線となつてゴジラの前方に射出された。

百万℃を超える光の柱が海上を突き進む。

それと同時に、口腔部の爆発から生まれた衝撃波が千葉市街の建造物を全滅させた。

その威力たるや、隣の市原市、船橋市、八千代市に至るまでがほぼ綺麗に更地と化し、さらにその外の地域にも壊滅的な打撃をもたらした。

衝撃波は全てを呑み込みながら円状に広がる。

そして、未だ人々が逃げ惑う都心へと進んでいった。

その熱線は、一連の戦いの中で最も規模が大きく、最初にゴジラが千葉県沖合で放つ

た熱線すらも凌駕していた。

熱線は亜光速で海を進む。

その先には、空母『フランクリン・ルーズベルト』が鎮座していた。



米艦隊の乗組員たちは、何が起きたかを理解する暇がなかった。

彼らの視点に立つと、「眩しい光に襲われ、同時に艦が強く揺れ、いつの間にか沈み始めていた」としか言いようがないのである。

空母『フランクリン・ルーズベルト』の中央部は熱線の直撃を受けて消滅した。

艦橋もまた同様であり、艦長を始めとした艦橋職員達はそれが自らの最期であると理解することもなく消えた。

先ほどの「さかわ」と同じように、中央部を失って真つ二つに折れた艦体が、艦載機ごと海に沈んでゆく。

後方では、『フランクリン・ルーズベルト』を襲ったものと同じ熱線に巻き込まれたミサイル駆逐艦二隻と、艦隊旗艦『ロッキード』も轟沈していた。

続いて、その熱線の超高温に押しのけられた空気が衝撃波を生み、周りの艦を粉々に

吹き飛ばす。

海には乗組員たちの悲鳴と嘆きの声がこだまする。

もう一度、閃光がほとばしる。

次の瞬間には別の艦が艦体を消し去られ、沈んでいった。

視界にまばゆい光が満ちるたびに、何隻かの艦が海の藻屑へと消えていく。

生き残った兵士達は恐怖のどん底へと叩き落とされた。

誰もが手を組み、十字を切り、神に祈りを捧げた。

だが、救済の時は訪れない。

裁きの光は、彼らを残らず一掃するまで続けられた。

【1:48 米軍第七艦隊、戦域に投入した全艦が沈没、司令官戦死】



壊滅したのは米艦隊ではなかった。

護衛艦隊もまた、超威力の熱線を何度も至近距離で浴び、その衝撃波を受け、上部構造物が破壊され尽くした。

半数ほどの艦は既に横転し、転覆していた。

生き残った艦の乗組員達もまた、米軍と同じように神に助けを求め始めた。

だが、この世界には残酷にも、裁く神はいても救う神はいなかった。

「我々は……最後の砦……」

黒木は遺体の転がる「むつ」の艦橋で呟く。

彼の体は既に、飛来した鉄片やガラス片でズタズタになっていた。

「貴様を倒さねば……貴様を……」

黒木の視線のすぐ先には、悠々と海を歩くゴジラの姿があった。

操縦を失い、大破漂流状態となった護衛艦隊のすぐ横を歩き去り、都心へと進んでい

く巨神の姿が。

艦を叩き潰すわけでも、炎を吹き付けるわけでもなく、黙って通り過ぎてゆくのは、

きつとそれが我々にとって最も絶望に値する行為だからなのだろう。

黒木はそう思った。

「1:54 護衛艦隊、艦隊の半数が沈没、残り全艦が大破、西野群司令戦死」



こうして、陸・海・空全ての防衛網を突破したゴジラの前に立ちはだかるものは何もなくなつた。

だが、あれだけの人間を虐殺してもなお、ゴジラ表情からは少しも怒りが消えてはいなかった。

ゴジラは何も語らず、ただ足を進める。

運命の地、東京へと。

【1：56 井村統幕長、呉号作戦の終了を下命】

【1：58 米海軍作戦本部、ヤマト作戦の終了を下命】

【同刻 自衛隊、及び在日米軍による組織的な抵抗が終結する】

【2：00 ゴジラ、都心へ向け東京湾を進行中】

【人類生存数 92億8571万人】

蹂躪



米国・ホワイトハウス。

「全滅、だと？」

フエアクロフ国防長官は手にした書類を取り落とした。

「太平洋最強の第七艦隊が？ ものの20分ですか？」

そしてその場に膝をつく。

「…馬鹿馬鹿しい夢だ。早く覚めてくれ……」

茫然自失、といった様子で彼はただそう呟いていた。

「なるほど」

メルヴィル大統領は椅子に座ったまま呟く。

「この作戦における唯一の成果は、我々がこの世界の現状を正しく把握できたということだ。教育費は世界一高くついたがな」

眼鏡を拭きながらそう言った。

その口調はつとめて冷静であったが、どこか焦点の合わぬ視点は彼の焦燥を如実に表

していた。

「大統領……グアムの航空部隊を引き返させるべきでは……？」

アシユベリー国務長官が告げたが、メルヴィルは「もう遅い」と返した。

「グアムの離陸時間と現在の時刻を考えれば、彼らはもう東京に到達している。そして恐らくは……」

その直後、グアムの航空部隊全滅との報が入った。

「奴は核から生まれ、核を自在に操る。そんなモンスターを核で倒せるものだろうか？」

メルヴィルは椅子に深く腰掛けたまま天を向いた。

「英雄の刃どころか、栄養満点のディナーなのかもしれない」

絶望は、世界に伝播し始めていた。



【1:53 グアムの第36航空団、東京湾上空へと到達】

護衛艦隊が全滅する直前、はるか高空に爆音が響いた。

米軍の最新鋭ステルス爆撃機が現着したのである。

ゴジラに滅ぼされた数万の米兵の恨みを果たすべく、バンカーバスター地中貫通爆弾、MOPⅢが投下

された。

厚さ数十mのコンクリート陣地すらも容易に貫通し、木っ端微塵に破砕する、核兵器を除けば世界最強クラスの威力をもつ爆弾である。

弾頭尾部のロケットブースターが点火し、音速を越えた速度で20トンの巨体が一斉にゴジラの頭部、背鰭に命中した。

あまりの衝撃にゴジラは頭を少し下に動かした。

瞬間、猛烈な爆炎がその頭部から背中を包む。

「命中!!」
BINGO

爆撃機のパイロットは確かな手応えを感じていた。

そして、爆炎の下からゴジラの死体が見つかることを期待する。

爆炎の下から現れたのは、天空に向けて口を開け、背鰭を輝かせるゴジラの姿だった。



【1:34】

やや時は遡る。

首相官邸屋上。

そこでは閣僚達が集結し、陸自の輸送ヘリの到着を待っていた。

東京湾の方角の空は赤く染まり、さながら爆撃下の戦時中を彷彿とさせる。

誰もが言葉を失い、下を向いていた。

「畜生……。なぜ日本なんだ……。なぜアメリカでもX国でもなく日本なんだ……。日本人が

何をしたって言うんだ……。畜生、畜生……」

悔しげにそう呟く桜坂を除いて。

すぐに二機のヘリが現れた。

まず一機目のヘリが屋上のヘリポートに着陸し、閣僚の乗り込みを待つ。

「総理！ 呉号作戦の可否について井村統幕長より連絡があります！」

運悪く、ヘリが着陸すると同時に首相補佐官からその報が入る。

「後にしてくれ！ 今は総理を乗せるのが先だ！」

桐谷がそう呼びかけたが、吉田は「いや」と首を横に振る。

「早急な事態の対応を優先したい。私は二機目でいい。君たちが先に行ってくれ」

桐谷は少し不満げな顔を見せるが、すぐに「分かりました」と答えた。

吉田は補佐官から携帯電話を受け取ると、騒音を避けるため磯谷防衛相とともにいったん官邸内に戻っていった。

桐谷、桜坂を始めとする閣僚九名が一機目のヘリに乗り込む。

すると桐谷は、思い出したように携帯電話を取り出し、何者かに電話をかける。

「山根君か。私だ、桐谷だ。池田君から例のモノは受け取ったか。…ああ、良かった」

そんな桐谷の様子を、隣に座る土井文科相が訝し気にのぞき込む。

「ああ、日本はもうダメだ。ゴジラがどこまでやるのかは分かんが、もうアメリカも当てにできない。君だけが頼りだ。くれぐれも変なことで命を落とすなよ。…ああ、それを言いたかっただけだ。頑張れよ。また会おう」

それだけ告げて電話を切る。

「誰ですか？ 相手は」

深溝外務相が問いかける。

「古い知り合いだよ。知り合いと言っても年は離れているがね。真面目だが気さくで面白い奴だ。また会って話すのが楽しみだよ。前に会ったのはいつだったか……」

これまでとは打って変わって桐谷は穏やかな表情を浮かべる。

「あまりにも絶望的な非日常に出会うことで、日常の尊さが分かるものだな。先月までの日々がこんなにも恋しいとは」

やがて、ヘリがゆつくりと宙に舞う。

「ちやうど百年、か。嫌な時代に生きてしまったものだ…」

その時、遠くの空がまばゆく光った。



「……もう無理か。分かった。自衛隊最高指揮官として、護衛艦隊の撤退終了後、呉号作戦の終了を許可する」

そう告げて吉田は電話を切った。

「……………」

磯谷防衛相は肩を震わせ、必死に涙をこらえていた。

そんな磯谷の肩を、吉田が何も言わずにポンと叩く。

二人がヘリポートに向けて歩き出そうとした時だった。

窓の外で、まばゆい閃光が煌いたのである。

「…なんだ、今のは。雷か？」

吉田が怪訝そうに呟く。

その正体は、米空母『フランクリン・ルーズベルト』を撃沈せしめた最大級の核熱線であった。

光の柱が東京湾を貫き、米艦隊の中核たる『フランクリン・ルーズベルト』を一撃で全壊した。

衝撃波が千葉市と周囲の都市を全滅させ、海を越えて都心部に迫りつつあった。

「総理、危険です。一旦建物の奥に」

首相補佐官がそう言いかけた直後だった。

バリン、と勢いよくガラスが割れる轟音が響いた。

「なんだ!？」と吉田が背後を振り向いた瞬間。

大量のガラス片とともに衝撃波が暴風となつて襲い掛かった。

吉田の正面に立っていた磯谷がガラス片を全身に浴びて吹き飛ばされ、さらに吹き飛ばされた磯谷の体にぶつかった吉田も同じように壁に向けて飛ばされた。

補佐官たちの悲鳴が響き渡る。

同じ頃、二機の陸自ヘリも衝撃波の洗礼を受けた。

中に乗っていた桐谷たちは、何が起きたかを推察することすらできなかった。

突然乗機が激しく揺れ、桜坂など何人かがヘリから吹き飛ばされて落ち、何処かに衝突して肉片となった。

ヘリは桐谷など中に残った乗員を乗せたまま近くのビルに激突し、爆発四散した。

もう一機のヘリは官邸に着陸することすらできぬまま、一機目と同様の運命を辿った。

「……………」

官邸内が静まり返った後、吉田はうめき声をあげて目を開いた。

右手の甲に大きいガラス片が刺さり、とめどなく血が流れている。

周辺にも数えきれないほどの細かい瓦礫やガラス片が落ちていた。

建物自体には深刻なダメージはないようだった。

吉田は自分に折り重なって倒れている磯谷をどかしながらゆっくりと起き上がる。

そして、自分の体がやけに濡れていることに気が付く。

「磯谷君……君は」

無事か、と言いかけて吉田はその言葉を飲み込む。

磯谷の体には、顔、腕、体の至る所にびっしりとガラスが突き刺さっていたのだ。

その体からは途方もない量の血が染み出していた。

吉田は、自分の体が濡れていた原因を悟り、戦慄する。

「あ……………」

磯谷は口をパクパクと動かし、掠れた声を出した。

その目にもガラスが刺さり、物を見ることすら叶わなかった。

吉田は、磯谷が意図せず自分の身代わりとなってガラスを全身に受けたことを知り、

その場にガクリと膝をつく。

周囲では、首相補佐官ら役員が折り重なって死んでいた。

この衝撃波は都心中の建物に大打撃を与え、地下に逃げずにいた都民の多くが飛来したガラス片と瓦礫の餌食となり、死亡した。

一方、米艦隊を殲滅したゴジラは東京湾を歩き、都心へと向かいつつあった。



【2:03 ゴジラ、都心まで10km圏内に到達】

東京は既に行政としての機能を完全に喪失していた。

都庁では多数の人員が逃走しながらも、都知事を始め一部の役員は最期まで自らの職務を果たすべく避難誘導を続けていたが、先の衝撃波で人員に多大な被害を受け、ついにその機能を停止することとなった。

閣僚の大半は既にこの世になく、警察や消防も統制を失って路頭に迷うばかりであった。

SNSで多目的シエルトアがなすすべもなく焼却されている様子を目撃した人々は、車や瓦礫で埋め尽くされた都心をただその足で逃げ惑う。

その人の流れを制御できるものは、もはやどこにもいなかった。

その時、人々は終末の咆哮を聞く。

そして、高層ビルの隙間から、都庁ビルより大きい山のような生物がこちらに迫っていることに気付く。

怪獣と対面した人間。

それは例えるなら、幼児と、その目の前にいる蟻の大群のようなものだった。

幼児が遊戯のつもりで彼らを踏みつぶせば、彼らは簡単に全滅する。

あるいは石を落として一匹ずつ潰していくかもしれない。

もはや、都心に残された数百万の生命は、ゴジラ的手中に収められたのである。

人々は終末を呪った。

己が迫られた理不尽な宿命を恨んだ。



【2：15 ゴジラ、江東区新木場に上陸】

運命の時は来た。

怪獣王は、百年の時を経てついに東京に帰還したのである。

ゆっくり海から足をあげると、ゴジラは立ち止まって東京を見下ろした。

その街は既に、衝撃波の洗礼を受けて廃墟と化していた。

建物自体は無事なもの、ガラスと細かい瓦礫がそこら中に散乱する死の街と化している。

そしてそういったものの隙間に、生き残った人間たちがもがいているのが見える。

地上に逃げた人たちを置き去りにして締め出す形で、都心内にある多目的シエルターの入り口は全て閉められていた。

だが、ゴジラは知っている。

その扉の下に幾万もの人間が怯え隠れていることを。

ゴジラが自分たちに気付かない僅かな可能性にかけて、身を寄せ合って恐怖に震えていることを。

怪獣王が気付かないはずがないのだ。

ゴジラを前にしては、皆、殺される。

貴賤も年齢も性別も、一切の別なくただ殺される。

その真理だけが都民に突きつけられる。

ゴジラはビルを積み木のように容易く崩しながら赤い火炎をばら撒いた。

火炎は建物の隙間に入りこんだ人間を綺麗に洗い流し、黒炭へと変えてゆく。

洪水の濁流のように炎は都心中に流れ出していった。

次にゴジラは口から吐き出すものを青い熱線に切り替え、シエルターの扉に向けて撃ちだした。

扉はあつという間に蒸発し、中に籠る人間ごと気化したガスへと変貌させられた。



中央合同庁舎第4号館前。

「シエルターまでもう少しです！ さあ、早く！」

「もういい！ もう遅い」

辻一尉の言葉を振り切り、池田は庁舎の前で足を止めた。

「何故ですか!! さっきの衝撃波で足を止められた以上、今急がなくては間に合いませんよ！」

福原が懸命に叫ぶ。

三人は、先の爆発の際に防火扉の中に避難していたため、衝撃波による被害を免れていた。

「何度も言っただろう。どこに逃げても同じだ。ゴジラはどんな場所であっても焼き尽くす」

「まだそんなことを言ってるんですか！ いい加減にしてください！」

辻は怒声を張り上げて池田を叱咤する。

「そう思うならあそこを見てみる」

そう言つて池田はビルの隙間を指さした。

「ゴジラだ。本物だぞ。もうどこに逃げても間に合わん」

池田が指を差した先。

遠くの空にそびえ立つ巨神がそこにいた。

今まさに日本という国そのものを滅ぼそうとしている、大いなる亡国の巨神が。

「あああ……!!! あれが……!!」

福原はゴジラに気付くとガクリと膝をつく。

「あいつが……!!!」

一方で辻は拳を握りしめ、怒りを露わにしていた。

「ついに本物とご対面だ。長らく怪獣の研究者をやっていたが、最期に本物と出会えただけ私は幸せ者なのかもしれないな」

池田はそう言いながら自らのスマートフォンでゴジラの写真を撮った。

「さて、私は家族に電話する。君たちは逃げるなり諦めるなり好きにしてくれ。君達には世話になったな。感謝している」

池田はそれだけ告げてスマホで家族に電話をかけ始めた。

「議長……私は一体どうすれば……」

福原は当ても問いかけるが、家族と言葉を交わす池田にその問いは届かない。

怪獣王の咆哮が天に轟く。

三人はついに自分の運命を知る。

ゴジラがここまで来たということは、単純な事実を物語っていた。

国家をかけて動員された自衛隊、そのすべてが壊滅し、突破されたということだ。

「……………負けたのか……………自衛隊が……………」

辻はその場に崩れ落ち、落涙する。

「議長!! 議長、助けてください!! 議長——!!」

福原は自分の頭を抱えながら池田に助けを求める。

同時に、ゴジラが赤い火炎を噴き出した。

「ああつ!! 来るつ!! 来る来る来る来る!!!」

福原が頭を抱え込んだまま地面にうずくまると、ほぼ同時に池田は家族との電話を切った。

炎が都心を縫ってその場に迫る。

「これが、怪獣か」

池田がそう呟いた瞬間、その空間は猛烈な赤い炎に飲み込まれた。



見渡す限りの、赤。

全てが業火に包まれた美しい世界。

その様子だけを見た人間は、いったいどうやってここが東京であると気付くだろうか？

何もかもが赤のこの世界に、人間がいた痕跡はないのだから。

怪獣王は高らかに咆哮をあげた。

それは、百年前の同胞の無念を晴らしたゆえか？

醜い人類への復讐を果たしたゆえか？

人間にそれを知る術はない。



倒壊した瓦礫の隙間で、吉田は辛うじて生を保っていた。

だがその命も、今まさに尽きようとしていた。

百年前の首相の血を授かって生まれ、自らも首相になった男。

彼に与えられた宿命とは、今ここでゴジラに倒されることだったのだろうか？
百年前と同じ、否、それ以上の悲劇を繰り返すことだったのだろうか？

「私は……」

閉じかけた目で必死に怪獣王の姿を睨みつけながら、彼は声を絞り出す。

「貴様を……」

一瞬、ゴジラが彼と目を合わせた。

そして、勝利の雄叫びを上げる。

吉田を嘲笑うように。

ゴジラの背鰭が淡く光り始める。

「許さない……絶対……」

その男の体は瓦礫とともに綺麗に消え去った。

【2：30 千代田区はじめ都心部壊滅、閣僚及び自衛隊幹部の生死不明】

【同刻 日本国の国家機能が喪失する】

【2：45 メルヴィル大統領、大統領令20580号に署名】

【同刻 在日米軍の全面撤退が決定する】

【人類生存数：92億8169万人】

進撃



千葉県沖合における最初の爆発から僅か6時間。

この短い時間に、東京は滅びた。

日本を主導する面々は軒並み破壊の業火に消え、日本そのものの機能が完全に停止したのである。

破壊と恐怖だけがこの街を支配した。

逃げることにすら疲れた人々は、その場に力なく座り込み、そのまま炎を身に受けた。最後の希望をもつて怪獣と対峙し続けた人々は、今ここに万策尽きたことを悟った。

それはここ、市ヶ谷の中央指揮所も同様であつた。

【2：15】

「ゴジラ、都内に上陸！」

観測士の悲痛な叫びが響き渡った。

まだ呉号作戦の終了より20分も経っていない。

「統幕長、間もなく脱出用のヘリが到着します、それまで…」

「いや、間に合わないだろう」

閣僚の避難に伴い首相官邸より中央指揮所に戻った井村統幕長だったが、部下の言葉を遮るようにそう告げた。

「皆、これまでのようだ。ここまでよく戦ってくれた」

井村は席から立ち上がると、全員に聞こえるように大声で言った。

「……………」

その場に沈黙が走る。

井村をはじめ、そこにいる全員が自らの運命を理解したのである。

「呉号作戦の開始から僅か二時間余りだ。二時間余りで参加部隊の八割以上が消滅した。我が国が誇る精鋭集団と最先端の兵器が、だ。もはや、誰にもあの化け物を倒すことはできない」

「しかし統幕長！ 西部方面隊と無傷の航空戦力を結集すれば第二次攻撃は可能です！ ただちに“呉二号作戦”を立案すべきと自分は考えます！」

有永航空幕僚長も声を張り上げた。

「そんな暇はない！ もうゴジラはここから数km圏内にいるんだぞ！ 退避する暇も、

次の行動に移る暇も与えてはくれないんだ、奴は……」

それに対し、利賀陸上幕僚長がそう反論する。

「だから諦めて何もするな、と言うのか！ 死する瞬間まで職務を全うしてこそその自衛隊員だろう、違うか!!」

「……」

有永の言葉に答えるものはいなかった。

「考えましよう。我々に残された時間で、何ができるか」

長野統幕副長が井村に呼びかける。

「……岡崎総監に繋いでくれ」

ふと井村はそう命じた。

「岡崎総監ですか？ ……了解！」

やがて、正面モニターに岡崎の姿が映された。

『統幕長……ご無事でしたか……』

意気消沈し、心身共に消耗した様子の岡崎がそう言った。

「いや、もうすぐ無事ではなくなる。ゴジラはたった今都心に上陸した」

『……!! では、統幕長は……』

「中央指揮所より朝霞へ、最後の司令を伝えたい」

井村がそう告げると、岡崎の表情がにわかに変わった。

「我々が生きて帰らぬ時は、岡崎総監を陸幕長臨時代理とする。君が主導となり、生き残りの統幕監部の面々から我々の後任を選出してくれ。以上」

『…………』

井村の言葉が岡崎の胸に重くのしかかる。

だが、こみ上げるものをこらえて岡崎は答えた。

『了解いたしました。必ずや次の作戦でゴジラを討ちます』

「感謝する。武運長久を祈る」

そう言つて井村は画面に向かって敬礼を送った。

一人、また一人とそれにつき敬礼を送る。

岡崎たちが同じように敬礼を返した後、画面は暗転した。

それとほぼ同時に、指揮所内が大きく揺れた。

「!!」

その地響きこそ、まさしく怪獣王の到来を物語っていた。

「奴め……真つ先にここを狙う気か」

長野統幕副長が苛立たし気に呟く。

「皆、慌てるな。ここからが最後の任務だ」

腕を組みながら井村が告げる。

その表情に恐れはない。

「これから臨時に部隊を編成、奴に可能な限り接近し、何か弱点がないか探す。これから奴と戦うであろう人類全体のために、我々が」

井村が言葉を告げている最中だった。

その瞬間、真つ赤な炎が指揮所内に猛烈な勢いで流れ込んできた。

紅炎は一瞬にして指揮所内を埋め尽くし、壁を溶かし、蒸発させながら建物の隅の隅にまで広がった。

自衛隊員たちは井村の話を聞く態勢のまま、瞬時に全身の水分が抜けて真つ黒な消し炭に変貌した。

井村たち幹部も全く同様であった。

ほんの一瞬だけ全身を焼かれる激痛を味わいながらも、一秒後には自分が死んだことにも気づかないまま黒炭となっていた。

人生最後の任務を全身全霊をもってこなす、ただその意思を堅く胸に秘めたまま、しかし彼らが最後の任務を果たすことはなかった。



【3:00】

ゴジラは都心中央部に鎮座し、地平線の彼方の先、数kmに及ぶ広範囲を滅した。東京23区はほぼその構造を完全に失い、埼玉県南部に至るまでが丸ごと消滅した。

ゴジラから見える範囲の全てが荒原と化したのである。

もう、何人の人間が死んだのかすら誰にも見当がつかなかった。

日本国民はただただ恐怖に怯え、狂い、泣き叫ぶのみであった。

政府が崩壊し、情報発信も停止し、テレビはひたすら数時間前に発せられた避難情報を繰り返し続けた。

政府の公式発表も途絶え、何人もの人間が連絡を試みるが通じない。

ゴジラが高空に向けて射出した核熱線により都心上空に大規模な電磁パルスが発生し、都内は電波すらも届かなくなっていた。

もし仮に届いたとしても、情報の担い手である人間が全滅している以上、返信の可能性は全く見込めない。

警察も消防も自衛隊も息の根を止められ、“逃げ方”を統制する組織もいなくなつた。

皆が思い思いの方法で逃げようとし、それ故に事故や衝突が多発する。避難者が当たり前のように車に轢き殺され、道に放置されている。

しまいには、精神を蝕まれたものが快樂殺人まで犯すようになった。そのような光景が日本中で起こり始めていた。

だが、それだけ多くの人間に悲劇をもたらしても、ゴジラの怒りはほんの少したりとも緩和の兆しを見せなかった。

上陸当初と全く変わらぬ怒り狂った表情で、ゴジラは南に向けて移動を開始した。彼が目指すは、人類絶滅。

たった一人の人間すらも生かすつもりはない。

全ての人類を等しく死と絶望の底に叩き落すまでその足が止まることはないのである。



【3：15 ゴジラ、神奈川県川崎市に到達】

東京以降の蹂躪の様子は、どこもかしこも似たようなものであった。

人々は統制を失って逃げ回るか観念して多目的シエルターに籠るかのどちらかとなり、そしてどちらもゴジラによって須く抹殺された。

【3:25 ゴジラ、横浜市に到達】

ゴジラは時節咆哮をあげながら、視界の中に存在する全ての人工物に攻撃を加えた。人々の怨嗟と恐怖の声をその耳に刻みながら、ひたすら壊し、壊し、壊した。



「ごめんなさい!!」

瓦礫に挟まれた一人の女性が涙を浮かべて叫ぶ。

彼女の腕には、片腕が千切れ、息も絶え絶えになった小さい娘の姿があった。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!!」

“誰に”、“何に対して”『ごめんなさい』と言っているのか、彼女自身も分からなかった。

ただ口をついて現れる言葉はそれだけだ。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

その言葉を繰り返す声は、次第に氣力を失っていく。

腕の中の娘は、もう完全に冷たくなっていた。

瓦礫が彼女の全身にのしかかった。

全身の皮膚が引き裂かれ、体がバラバラに千切れていくのが分かる。

「めんなさい……………」



【4：00 ゴジラ、鎌倉市を経由して平塚市に到達】

【4：35 ゴジラ、静岡県熱海市に到達】

【5：58 ゴジラ、静岡県静岡市に到達】

ゴジラの進撃は終わらない。

赤く燃え盛る日本の姿は、衛星写真ですらはつきりと確認されていた。



【2054年

11月4日

6：06

東京都の日の出】

東京の街に朝日が昇る。

そこは、一切の物音が絶え、静寂に包まれていた。

瓦礫の山が平坦に広がる広大な空間は、雲に覆われて薄暗さを保っていた。

”死”を具現化したその街跡に、人影はない。

やがて、厚い雲から雨が降り始める。

ゴジラが飛散させた放射性物質を濃密に含んだ、死の黒い雨である。

雨は都心の各所で燃え盛る炎の勢いを弱めさせたが、一方で僅かに生き残っていた人々にはさらなる苦しみをもたらした。

わずか6時間前にはここが日本国の中心地であり高層ビル群が立ち並ぶ大都会であつたなど、誰も信じられないくらいに東京は破壊しつくされていた。



静岡県浜松市。

そこに住む住人は、いつも通りの朝を迎えていた。

『関東に巨大生物上陸 自衛隊の防衛作戦続行中』

『避難区域拡大 関東全域に避難指示』

SNSに表示された情報はそこで止まっていた。

内閣やテレビ局などのアカウントは、全て夜1時頃から更新が停止していた。テレビはどのチャンネルも映らない。

このような状況に、浜松市の市民は不安を覚えずにはいられなかった。しかし彼らは日常へと動き出す。

ある者は会社へ行き、ある者は学校へと向かう。

ある者は買い物へ赴き、またある者はレストランへ足を運ぶ。

危機感が欠如している、と言えば確かにそのとおりである。

しかし彼らは決して、事態を楽観視していたわけではない。むしろ心の奥底では今も言いようのない不安を抱えている。

だが、どうすることもできないのだ。

避難の指示がなければ避難すらできない。

何も言われないのであれば、いつも通りに過ごすしかない。

何をすべきか分からない人間は、結局いつも通りの日常を歩む選択肢をとることしかできなかったのである。



【6:10】

浜松中央警察署。

ここでは、早朝であるにもかかわらず招集された職員たちが情報の収集と今後の動向を話し合っていた。

「ついさつき県警本部からの連絡があつたのか？ 本当なのか？」

現場に現れたばかりの田丸たまる なおや直哉警察署長が部下に尋ねる。

「間違いありません。かなり錯乱している様子でしたが、”ゴジラの攻撃を受けている”と言っていました」

部下の報告を受けて田丸はにわかに体を震わせた。

「そんな馬鹿な……。政府発表が停止したままなのも、警視庁とも公安委員会とも連絡がつかなかったのは、やはり……」

「署長、話し合っている時間はありません。一刻も早く住民の避難誘導を行うべきです！」

部下の一人が田丸に詰め寄る。

「市役所は何をしているんだ？ 一刻も早く避難指示を出すべきだろう」

「それが…先ほど市役所に連絡したところ、あちらもかなり混乱しているようで…。まともに取り合ってもくれませんでした」

「首都圏の一切の機関と連絡が取れなくなつたのだ、混乱するのも無理はない。…では、静岡は避難指示を発令する暇すらなく……」

「署長、もはや国や市の指示を待っている暇はありません。我々だけでも独自に避難誘導を行うべきです！」

「そうだな……だが我々だけでは圧倒的に数が少ない。付近の消防や自衛隊にも協力を要請しよう」



【7：04】

警察署でそのような緊迫した話し合いが設けられている間にも、浜松市の人々はいつも通りの日常へと動き出していた。

避難指示や警報が発令されていないため、電車も普段通りに動いている。

「あ、おはよー」

「おはよー！」

通学路で出会った女子高生の集団が友人に挨拶をする。

「ねえヤバくない？ 昨日からテレビもネットも全部つながらないの」

「それ！ 何も家ですることなかった！」

昨晚の不安すらも話題の種にして彼女たちは談笑する。

彼女たちもまた、何か嫌な予感を感じていた。

彼女たちの短い人生においても、何度か災害やそれに類するものを経験したことはある。

しかしそう言った事例においても、テレビやネットの全てが悉く機能を停止するなどと言う事態にはならなかった。

今身の回りに起きていることが明らかに異常な事態であることは、彼女たちであつても認識できていた。

「ねえ……ウチら、大丈夫なんだよね？」

談笑のさなか、誰に促されるわけでもなくふと一人の女子が言った。

「……………」

沈黙が走る。

親や大人たちが言う“大丈夫だ”などという言葉を、彼女たちが鵜呑みにできるはずがなかった。

ただ彼女たちは、仲のいい友人と一緒にいることで不安を紛らわせているに他ならぬい。

「私、死にたくないよ」

違う女子が言うのと、「あのさ」とさらにもう一人の女子が声を張る。

「みんな考えすぎだつて！ 死ぬわけないじゃん！ 大体さ」

彼女が言い終わる前に地面が小さく揺れた。

「……は？ 地震!？」

しかし、その揺れは彼女らがそれを認識したところには止んでいた。

「え？ 何?!? 一瞬じゃん」

と、呟いた時には再び揺れが起きていた。

かと思えば、またその揺れは数秒で収まる。

「何、何!? ちょっと待ってよ、本当に怖いんだけど……!!」

女子の一人が友達にしがみつきながら叫ぶ。

「……」 足音「………?」

その時、彼女は遠くから迫ってくるパトカーの音を聞いた。

『住民の皆さんは直ちに多目的シエルターに向かってください！

怪獣が浜松市に接近

しています!! 住民の皆さんは直ちに……』

彼女らは呆氣にとられるばかりだった。

「……ウソでしょ」

かりそめの日常は、あっけなく立ち切られた。

映画の中のような光景にいつの間にか入りこんでいる感覚が、彼女たちに襲い掛かる。

だがそれ以上にストレートに彼女らの心に突き刺さったのは、他ならぬ死への恐怖である。

訳も分からないまま彼女たちは走った。

怯え泣き、言葉を発する暇すらなかった。

やがて、女子の一人が足を止める。

日向を走っているはずなのに、いつの間にか日陰になっていたからだ。

友達是她女の方を振り向くことなく走り去ってゆく。

一人残された彼女は、全てを悟って後ろを見た。

全長264mの巨神が、東の大地、掛川方面に立っていた。

漆黒の巨体が東の空に昇る太陽を遮っている。

日本国を滅ぼした亡国の巨神は、自らに焼き尽くされんとする矮小な人間たちをぐる

りと見渡した。

人々の阿鼻叫喚がこだまする中、その少女だけはその場から動かず、否、動けずに怪獣を見つめていた。

怪獣の咆哮が浜松市の全ての空間に響き渡る。

彼に殺された一千万の人々の恐怖と苦痛をその絶叫に乗せて。

【7：15 ゴジラ、静岡県浜松市に到達】

【人類生存数：92億7332万人】

登場人物・用語まとめ（第三部）

・登場人物

自衛隊

黒木鶴雄くろぎ かくお

性別：男性

年齢：47歳

ICA：高嶋政伸

護衛艦隊旗艦「むつ」艦長。一佐。豪胆かつ冷静な思考を持つエリート士官。

呉号作戦最終段階では、米軍の空爆が行われるといち早く粘膜部への攻撃を進言するなど、その能力を遺憾なく発揮している。

にしの
西野孝太郎こうたろう

性別：男性

年齢：54歳

護衛艦隊第一護衛群司令。海将補。黒木ら幕僚と共に「むつ」に座乗し、現場の最高司令官として前線指揮を執る。

柔和な性格であり部下には親しまれている。

・ホワイトハウス

トーマス・A・メルヴィル

性別：男性

年齢：64歳

アメリカ合衆国大統領。米国の体裁を重んじる思想からゴジラの駆除に前向きであり、そのために核使用も辞さぬ考えを示す。

アマンダ・アシュベリー

性別：女性

年齢：44歳

アメリカ合衆国国務長官。若くして国務長官にまで上り詰めた優秀な政治家。ゴジ

ラ駆除には賛成だが、核使用については中立的な意見を持つ。

マイルズ・フェアクロフ

性別：男性

年齢：61歳

アメリカ合衆国国防長官。自国の権益を第一に考え、異国のために怪獣と戦うことに消極的であり、核使用にも懐疑的な意見を持つ。

・アメリカ軍

サミュエル・D・テンパートン

性別：男性

年齢：57歳

アメリカ海軍少将。第七艦隊副司令官。化学兵器使用など、物議を醸すような上層部の作戦にも素直に従う柔軟さと徹底さを持つ。

・怪獣

ゴジラ（2054年の個体）

身長 262m ↓ 263.5m

体重 150万トン ↓ 195万トン（最小見積もり値見直し後）

第二部までに自衛隊の猛攻を難なく突破し、これを壊滅させ、九十九里から千葉市のライン上の全市町村を滅却した。その肉体は戦いの衝動からか急激な進化を続けており、数時間の戦闘の間にも身長と体重が増加し続けている。最も効率的に人間を虐殺する方法を選び、人間側の作戦や思考を見破る節があるなど、極めて高い知能を有する可能性が指摘されている。また、シエルターなどに隠れている人間も本能的に知覚して全滅するまで攻撃を続ける習性があり、人間の存在を知覚するための“第六感”的な感覚を有する可能性も示唆されている。

眼球や口腔内などの粘膜部ならば電磁加速砲などの物理的攻撃でダメージを与えることも可能だが、その傷口は数十秒程度で完治し、ゴジラ自身もその負傷に対して無反応だった。また、その体表は超酸すらも完全に無効化することが証明された。米軍では超酸の他に毒ガス（化学兵器としてはこちらの方が一般的である）や生物兵器の使用も検討されていたが、核エネルギーによって活動するゴジラは呼吸を行っておらず、数千度を超えるゴジラの体内で生息できる菌やウイルスが存在しないことなどから効果無

しと判断され、実用には至っていない。

・第三部終了時までの時系列まとめ

《本編以前》

【1945年7月16日 人類史上初の核実験（トリニティ実験）】

【1953年3月1日 ビキニ環礁において米国の水爆実験（キャッスル・ブラボー）】

【1954年8月某日 大戸島で巨大生物“ゴジラ”が発見される】

【1954年10月某日 ゴジラが都心を攻撃、東京は廃墟と化す】

【同日 首都機能を一時的に大阪に移転】

【1954年11月3日 民間科学者・芹沢大助博士の開発物質“オキシジエン・デストロイヤー水中酸素破壊剤”

よりゴジラの抹殺に成功する】

【1959年12月10日 首都機能が東京に戻される】

【1961年2月9日 多目的国民シエルターの建設が始まる】

【1966年10月30日 ベルリンで核実験全面禁止条約が締結される】

【1972年4月24日 怪獣対策基本法が立法される】

【2006年7月18日 内閣府怪獣対策防災会議が設立される】

《本編第一部》

【2054年10月某日】

【11:03（日本時間） X国の核実験が南太平洋上で実施される】

【14:50（日本時間） 南太平洋上で正体不明の超大規模爆発、宇宙空間へ到達した光線が観測される】

【翌 3:30〜5:00 日本各地に南太平洋爆発による津波が到達する】

【2054年10月26日 怪防会にて「海中爆発の原因たる怪獣の生態研究と対策検討に関する報告会議」が行われる】

【2054年11月3日】

【14:20 米国調査団、太平洋マリアナ海溝付近で水蒸気爆発の痕跡があったと発表】

【20:37 千葉県東方沖にて大規模な爆発が発生】

【20:39 千葉県九十九里町などに爆発の衝撃波が到達】《死者数（累計）：0人》

【20:45頃 内閣府危機管理センターが大規模爆発の情報収集を開始】

【21:00頃 吉田総理、官邸入り】

【21:15 磯谷防衛大臣が海上警備行動を発令、千葉県沿岸部に避難指示】

【21:17 海上自衛隊館山航空基地より、第51航空隊所属の哨戒ヘリSH-60Lが発進】

【21:36 千葉県太平洋沿岸部にて正体不明物体の目撃情報が寄せられる】

（この頃から、ゴジラの姿がSNSなどを通じて全世界に拡散される）

【21:38 千葉県沿岸部にて二度目の大規模爆発が発生、衝撃波により沿岸部の街が壊滅的な被害を受ける】《死者数：約8000人》

【21:53 海自の哨戒ヘリSH-60L、ゴジラを発見】

【21:57 爆発の被害を受け、千葉県知事が自衛隊に九十九里町の災害派遣を要請】

【22:00 吉田総理、怪獣対策基本法に則って自衛隊創立史上初となる防衛出動を命じる】

【同刻 関東全域にJアラート発動、避難区域拡大】

【22:15 自衛隊統合幕僚監部、対怪獣駆逐作戦“呉号作戦”の発動を下令、呉号

作戦統合任務部隊を結成し、在日米軍へ作戦通達完了」

《本編第二部》

〔2054年11月3日〕

〔22:20 富士教導団機甲部隊、作戦区域へ空挺開始〕

〔22:40 ゴジラ、上陸地点直前で進行停止〕

〔22:47 九十九里の災害派遣部隊に撤退命令が下る〕

〔23:18 青森県三沢航空基地より第三航空団第三飛行隊が離陸〕

〔23:25 木更津駐屯地より第四対戦車ヘリコプター隊が発進〕

〔23:30 石川県小松航空基地より第三〇三飛行隊が離陸〕

〔23:34 東部方面隊45式機動戦闘車大隊、国道468号線に展開完了〕

〔23:42 富士教導団機甲部隊、国道468号線付近に空挺完了〕

〔同刻 米国防省が緊急声明を発表、日本への支持を表明〕

〔23:45 護衛艦隊第一護衛群及び第二護衛艦隊第六護衛群、東京湾千葉港付近に

展開完了〕

〔23:54 富士教導団機甲部隊、国道468号線上に展開完了〕

【2054年11月4日】

【0：00 呉号作戦第一段階、発動】

【0：04 ゴジラ、活動再開】

【0：21 第四対戦車ヘリ部隊全滅、呉号作戦第二段階へ移行】

【同刻 九十九里の多目的シェルターがゴジラの攻撃を受け壊滅】《死者数：約3万人》

【0：28 呉号作戦、第三段階に移行（第二段階の攻撃は継続）】

【0：32 吉田総理の緊急記者会見】

【同刻 三沢の第三航空隊が現着、攻撃開始】

【0：48 民間人の男性二名による生配信が行われ、怪獣災害の様子が全世界に拡散される】

【0：52 ゴジラ、呉号作戦防衛ラインを突破】

【0：58 避難区域拡大】

【1：00 米軍第七艦隊、横須賀を出港】

【1：02 呉号作戦、最終段階に移行】

【1：03 護衛艦隊、誘導弾攻撃開始】

【同刻 ゴジラ、千葉県中野IC付近を通過、付近に存在する全組織が壊滅】《死者

数：約12万人》

〔1：06 ゴジラ、千葉県野呂町付近を通過〕

〔1：10 米軍第七艦隊副司令、東部方面総監部に合流〕

〔1：14 ゴジラ、千葉市に到達〕

《本編第三部》

〔1：15 メルヴィル大統領が大統領令第20579号に署名、対怪獣防衛作戦『オペレーション・ヤマト』発動〕

〔同刻 護衛艦隊、砲撃戦開始〕《死者数：約26万人》

〔1：22 米軍第五空母打撃群、攻撃開始〕

〔1：28 ゴジラ、史上最大級の熱線を射出、米空母『フランクリン・ルーズベルト』轟沈〕

〔1：31 衝撃波が都心に到達、死者多数、閣僚15名死亡〕《死者数：約83万人》

〔1：48 米軍第七艦隊全滅、司令官戦死〕

〔1：53 グラムの第三十六航空団現着、攻撃開始〕

〔1：54 護衛艦隊壊滅、群司令戦死〕《死者数：約85万人》

【1：56 井村統幕長、呉号作戦の終了を下令】

【1：58 米海軍作戦本部、オペレーション・ヤマトの終了を下令】

【同刻 この時刻をもって、東京近郊における人類の組織的な抵抗は終結する】

【2：03 ゴジラ、都心まで10 km圏内に到達】

【2：15 ゴジラ、江東区新木場へ上陸】

【2：30 千代田区はじめ都心部壊滅、閣僚及び自衛隊幹部の生死不明】《死者数：約

487万人》

【同刻 日本国の国家機能が喪失する】

【2：45 メルヴィル大統領、大統領令第20580号に署名、在日米軍の全面撤退

が決定する】

【3：15 ゴジラ、神奈川県川崎市に到達】

【3：25 ゴジラ、神奈川県横浜市に到達】

【4：00 ゴジラ、神奈川県平塚市に到達】

【4：35 ゴジラ、静岡県熱海市に到達】

【5：58 ゴジラ、静岡県静岡市に到達】

【7：15 ゴジラ、静岡県浜松市に到達】《死者数：1324万人》

・ 呉号作戦におけるゴジラの進路マップ

第四部 慟哭の島

探求

関西各地の行政機関がようやく混乱を落ち着かせたときには、ゴジラは既に名古屋の寸前にまで迫っていた。

SNSなどによる情報の広がりから、多目的シエルターも意味を成さないことを知った国民の多数は、己の足で当てもない脱出劇を開始した。

機能を停止した空港には群衆が押し寄せ、便はまだかと騒ぎ立てる。

沿岸部では個人の漁船などに人が殺到し、転覆する船も相次いだ。

人々が目指す先は、怪獣の被害を免れ得たであろう北関東と東北・北海道・北陸東部。もしくは、日本国外への逃亡。

ようやく動き出した自衛隊や行政機関の指導も虚しく、今の群衆に効率的な行動などできるはずもなかった。



【12:15】

茨城県・小美玉市。

ゴジラの猛火を免れたこの地は、静寂に包まれていた。

市が自宅待機命令を出したことにより街に人影はなく、鳥のさえずる声と風だけが虚しく響いている。

そんな中、市民は空から舞い降りてくる一機の小型機を目にした。

その機体は百里飛行場へと降り立っていった。

その機体が飛行場へ着陸すると、すぐに数人の自衛隊員が機体へと駆け寄っていった。

暫くすると機体の扉が開き、中からスーツを着てサングラスをかけた初老の男性が現れた。

「山根良平博士、お待ちしております！やまねりようへい 遠路はるばるお疲れ様です！」

彼を出迎えた自衛隊員の一人が声をかけた。

「わざわざお迎えを……。ありがとうございます。基地の方ですね？」

スーツの男：「山根良平」博士は機から降りると、会釈して尋ねた。

「は！ 私は第七航空団副司令、やすだひろと安田寛人一佐であります。大林航空団長がお待ちしております

おりますので、こちらへどうぞ」

安田一佐の案内に応じ、彼らは百里基地へと歩みだす。

「霞ヶ浦の向こうは焼け野原……ですか」

南の方角に横たわる霞ヶ浦の湖を眺めながら、山根が問いかけた。

現在は分厚い雨雲が南関東を支配し、霞ヶ浦の向こうは雲に邪魔されて見えなかった。

「はい……。つい数時間前まで南の空は赤く染まっておりました。その業火の中で、数多くの戦友と国民が死んでいました」

淡々と事実を述べる安田一佐の語調は、次第に乱れていくのが山根には分かった。

「信じられん。たった六時間で……」

「今も奴は濃尾平野を進行中と連絡がありました。こうしている間にも多くの国民が……」

安田一佐は声を震わせ、激情に耐える。

「そうは言っても、今我々にできることは限られています。私も尽力しますから、共に怪獣撃退のため頑張りましょう」

安田を慰めるように山根が声をかけた。

「山根博士、よくぞ来られました。航空団長の大林です」

航空団司令部ビルの執務室に着くと、第七航空団司令、おおばやし たけまさ大林武正空将補が敬礼で出

迎えた。

「山根良平です。百年前のゴジラ研究員、山根恭平の曾孫です」

山根は名刺を渡しつつ大林と握手を交わす。

「お話は聞いております。博士は怪獣研究の第一人者であり、各国を渡り歩いていらつしやると」

「12時間前まで、中東のサラジアという国にいました。離陸の直前に桐谷先生から電話がありました」

「桐谷先生…と仰いますと、まさか官房長官の…?」

「ええ、そうです」と山根は頷く。

「先生には昔からお世話になっておりまして…。そういえば、閣僚の方々は無事なのですか?」

山根の問いに、大林と安田は顔を合わせて沈黙する。

そして、重く口を開いた。

「立川からのヘリに搭乗する予定でしたが、ヘリは突如連絡を絶ち、恐らくは撃墜されたものと考えています。そして、都心部の状況も加味しますと……」

「……そうですか。分かりました」

山根は表情を変えずに答える。

「ご心配なく。半ば覚悟はしていましたから」

「…閣僚のみならず、我が自衛隊も統合幕僚監部及び陸海空幕僚監部の一切と連絡が取れず、中枢を一挙に失った状態です。今は各々の部隊が各個の判断で行動している状況です」

そう言つて大林は窓の外を見る。

雨雲に覆われた薄暗い空が眼前に広がっている。

「絶望的過ぎます。あまりにも……あまりにも……」

大林の声、そして拳は少し震えていた。

「祖父も父も、ゴジラの研究に生涯を捧げましたが、とうとう生きたゴジラと直接対峙することなく世を去りました。まさか私に、その運命が回ってくるとは」

山根も窓の外を見て呟く。

「ともかく被災地を調査しないことには始まりませんね。調査隊は派遣されていますか？」

「陸自の中央特殊武器防護隊の残存部隊が化学防護車で向かっていると統合任務部隊より連絡がありました。ただし被災地は電磁パルスで電波が阻害され、通信もままならぬ

状況です。連絡にはしばらく時間がかかるものと思われます」

「どこまで行けばその部隊と連絡が取れるのでしょうか？」

山根の言葉に、大林は不審そうな顔をする。

「……まさか、被災地まで行かれるつもりですか。ここから南は高い放射線量が予測され、大変危険です。一般の方を侵入させるわけにはいきません」

「“一般人”ではないでしょう、私は。専門家ですから。それに、都心まで行くわけではありません。調査部隊の皆さんと直に連絡が取れる場所まで行くことができれば十分です」

「……………」

大林は沈黙して考え込んだ。

「……で情報の到着を待つばかりでは時間がありません。ゴジラは今も日本を蹂躪しているのです。奴の活動の痕跡を詳細に調べることができれば、打倒にも一歩近づくというものです。どうかお願いします」

山根は自らの言い分を通すべく声を張り上げ、懸命に訴えた。

「……それとも、さらに上の立場の方にお伺いを立てる必要でも？」

「……いえ、先ほども申しあげたとおり、この基地で起きることは全て私に一任されています。分かりました。輸送へりを出しましょう。博士には隊員の放射能防護服を着て

いただきます」

大林は熟考ののち、そう答える。

「ありがとうございます……」

山根は深く頭を下げた。

彼が目指すのは南、数多くの盟友の命を奪った地獄の跡地であった。



山根博士が日本に降り立つ直前のこと。

アメリカ合衆国・ニューヨーク。

国際連合本部ビル。

【11月4日 12:00（日本時間） 11月3日 23:00（現地時間）】

日本で起きた非常事態解決のため、国連安保理の緊急会議が招集されることとなった。

「怪獣が我が国に上陸して15時間余り。まだ吉田総理はじめ閣僚との連絡はつかず、我が国は混迷を極めております。どうか安保理による日本国の救済を伏してお願ひ申

し上げたい……」

日本国国連大使・五十嵐十造いがらし じゅうぞうは悲痛な面持ちで頭を下げた。

「そうは言っても、米国が誇る太平洋艦隊の半数が僅か20分で壊滅させられたのは日本が一番よく知っているはずでしょう？」

イギリス国連大使がそう述べると、五十嵐は何も答えられず沈黙した。

「怪獣の実力は我々人間の常識を大きく超えています。通常戦力をもつて攻撃したとて、倒せる見込みはないと自衛隊と米軍が証明したのです」

「方法は、まだあるでしょう」

イギリス大使の言葉に答えたのは、曾心儒そう しんじゆ中国国連大使であつた。

「怪獣は現在日本国を西進し、我が国に向かいつつあります。この魔物を駆逐することは、我が国の国是であります。そのためには、我ら同胞たる人民解放軍による怪獣への核攻撃を行うしか方法はありません」

「核攻撃……!」

会場にざわめきが走る。

「曾大使……! その発言は、我が国で核攻撃を行うという意思と受け取つてよいのか?!」
五十嵐は顔色を変えて曾を問いたです。

「日本国民には申し訳ないことをするが、それも止むを得ますまい。ここで怪獣を止め

なければ、東アジアは焦土と化すことになる」

「そのような案を受け入れることはできない！」

五十嵐は机をダンと叩いて怒鳴った。

しかしその一方で、“迅速な核攻撃”という選択が最も合理的で迅速な解決方法であることは内心で五十嵐も感じていた。

「日本の都市部での核攻撃は多くの人民の被害を招くものであり、人道的観点から我が国は反対する」

フランス大使が反対の意を述べると、曾大使は「その意見は最もですが」と切り返す。「このまま怪獣を放置すれば、奴は人口密集地を練り歩いて多くの日本国民を焼殺することとなりましょう。それに日本の都市部には対核シエルターもある。適切な事前通告を行えば、例えば核を用いたとしても、人民が全滅することにはなりません。むしろそれ以降に怪獣に蹂躪される都市を救うことに繋がる。我が国の提案こそ人道的見地に則ったものであるとご理解いただきたい」

曾大使は理路整然と自らの意見を述べた。

核攻撃を人道的とする意見は前代未聞であるが、彼の言うことに一理の道理があることもまた事実であった。

中国は焦っている。

ゴジラが海を渡れるとすれば、日本の次に焦土となるのは、朝鮮半島か自国。手段を選んでいる暇はないのである。

「しかし……！ 我が国に今一度核を落とすことなど……！ 容認できません……！」
五十嵐には中国の焦りは痛いほど理解できたが、それでも賛意を示すことはできない。

それが唯一の被爆国たる日本人としての心であつた。

「それについて、我がアメリカより一つ申し上げたい」

アメリカ国連大使、ジャック・K・リチャードソンが挙手とともに述べた。

「我が国の研究機関が解析したデータにより、ゴジラの発した熱線は核爆発による火球と同等のエネルギーを持つことが判明しました。体組織がそれに耐えうる物質でできているとなると、核攻撃で決定的なダメージを与えられる保証はありません」

「核に耐える、だと……!?!」

各国大使の表情は驚愕に染まった。

「そのデータは信用できるのですか？」

「数値の厳密性は置いておくとしても、桁は正確に計算されています。少なくとも数万度規模の温度に耐えうることは間違いありません」

怪獣は、人間が知りうるどの物質でも説明ができない防護性と攻撃力を備えている。

それだけはすぐに各国の大使に伝わった。

「よって我がアメリカは、核攻撃によるゴジラの駆逐ではなく、無人兵器による飽和攻撃にてゴジラのエネルギーを損耗させ、生命活動の停止を促す戦術を提案したい」

「……………」

議場にざわめきが走る。

「ゴジラの体内エネルギーは核融合で調達されているそうだが、その作戦にいかほどの勝算があるのですか？」

曾大使は毅然とリチャードソン大使に尋ねた。

「はつきりとしたことは申し上げられません。ですが、怪獣といえどエネルギーは無限ではありません。核攻撃よりは確実に勝算は高いでしょう」

「我が国は米国の提案に賛同したい……」

すかさず五十嵐はリチャードソンに賛意を示す。

「しかし、横須賀の艦隊の壊滅を受けて、日米同盟を放棄し本国に撤退している貴国にそのような戦力があるのか？」

ロシア大使がそう口を挟む。

「撤退は戦力の立て直しを図るためであり、条約の破棄を示すものではありません。それに、今現在、本国から無人攻撃機を極東に向け輸送中です。あと半日あれば全戦力が

整う手はずになっております」

「…随分と準備のいいことだ」

「無論、我が国だけでなく周辺国のお力をお借りしたく思います。特に、近年航空戦力の機械化を推し進めている中露の二か国には」

リチャードソンは中露両大使の顔を交互に見ながら告げる。

「…承知した。米国の提案に則り、人民解放軍機械化航空部隊を派遣しよう。しかし、万一の場合に備え核の発射準備は怠らずに行わせていただく」

曾大使がそう述べると、ロシア大使も同様の意見を述べた。

こうして、無人機を主戦力とした多国籍軍の結成と、世界各国を動員した第二次対怪獣攻撃作戦が安保理によって決定された。



【16:27】

東京都足立区竹ノ塚・竹ノ塚警察署前。

東京の街で形を保っている人工物は何一つなく、全てが瓦礫の山と黒煙の中に埋もれ

ていた。

午前から降り続いた雨で火は消し止められていたが、未だ煙は至る所に立ち上り視界は悪い。

廃墟と化したその街で、重厚な防護服を着た山根博士を始めとする調査部隊は降り立っていた。

「凄いですね……。都心から離れていてもこれだけの有様とは……」

山根の横に立つ隊員が声を震わせながら言った。

「上空からも見えたと思いますが、瓦礫が山のように折り重なっている市街地の中に、溝のように滑らかな地形が広がっています。この『溝』の部分が、ゴジラの発した熱線が通った箇所と推測できます」

山根はそう言って足元に転がる石を拾う。

彼らが立っている場所もまた、その『溝』に当たる部分である。

「見てください。一度溶解した建材が蒸着した痕跡があります。一瞬の間に分厚い建材を完全に溶解していた証拠です」

彼が拾い上げた石の表面には気泡が立ち、火山から噴き出た軽石を連想させる。

「ところで、放射線量は怎么样了か？」

「はい。現在空間放射線量は250ミリシーベルトで安定しています」

「こんなに離れたところでもそれだけの濃度の放射線が……」

隊員が驚きの声をあげた。

「中心部では最大4シーベルトの超高濃度放射線が観測されています。これだけの濃度では生態系は全滅してもおかしくはありませんね……」

「やはりゴジラは核融合だけでなく、核分裂も同時に体内で行っているようですね」

紙の資料をめくりながら山根は言った。

「放射性物質の解析結果を見ると、組成は百年前のゴジラの活動痕に見られた元素と92%の割合で一致しています。これは、現在のゴジラが百年前と全く同じ核分裂プロセスを体内で行っていることの証拠となります」

「では、この高濃度の放射能も、核分裂に由来すると？」

「間違いないでしょう。ですが、これは私には嬉しい報せです。体内の構造が百年前と大きく変わっていないのであれば、私の研究成果をそのまま奴に適用できるかもしれない……」

「研究成果……？」

隊員の一人が訝し気な顔をする。

「まだ実用レベルではありませんが、私が所属していたサラジアの研究チームが間もなく実現を成功させるでしょう」

「失礼ながら博士、その研究とは……？」

「微小酸素という構造の応用です。平たく言うと…」

「オキシジェン・デストロイヤー水中酸素破壊剤。ゴジラを抹殺した唯一無二の兵器の実現です」



この頃ゴジラは、濃尾平野を壊滅させて京都に迫っていた。

禍乱

米国カリフォルニア州・某所。

無人航空機製造メーカー。

「とにかくすぐに製造を開始しろ！ 軍の発注など待たんでいい！！ 国外にいるエンジンアも全て呼び戻せ！」

本社ビルの中で、CEOである彼は受話器を手に怒鳴っていた。

「金などいくらでも出す！！ わが社が借金しようが破産しようが構うものか！ とにかく全力で作り続けろ！！ ……過労死！？ 馬鹿を言うな！」

彼は早口でまくしたてながら本社ビルの窓を見る。

その先には太平洋が広がっていた。

この海の向こうに、“滅びの神”がいるのだ。

「過労で死ぬのと、炎と放射線でのうち回りながら死ぬのと、どっちがいい！？ 異論は聞かん！ 一秒でも長く、一機でも多く攻撃機を作れ！！」

そう叫ぶ彼自身の目にも隈が浮かんでおり、夜を徹した多忙の影響が確実に彼を蝕ん

でいた。

しかし彼に休む暇はなかった。

「二機でも作り損ねれば我々の明日はないと思え！ 攻撃機は何機あつても足りないんだ!!」

間もなく米国を中心とする多国籍軍による総攻撃が始まる。

無人機の“数”が、作戦の可否を握っているのだ。

この作戦に間に合わなくとも、その次の作戦のために彼らは作り続けなくてはならない。

怪獣との戦いは、日本からはるか遠く離れた場所においても“戦場”となつたのである。



【11月4日 12:30 国連安保理決議2646発動、多国籍軍の派遣が決定】

【17:25 ゴジラ、滋賀県守山市を通過】

太陽が沈み始め、再び日本は恐怖の夜を迎えることとなった。

朝方に比べると格段に歩行速度を落としたゴジラは、しかし確実に日本を蹂躪しつつ

あった。

東京湾から都心に上陸して以来、約15時間にわたって一切エネルギー補給を行っていないにも関わらず、その威容と憎悪の表情に些かの綻びも見られなかった。

関西の人々の混乱は頂点に達していた。

18時ごろ、漁船で周辺国賛否や議論を避けるため本作ではこのように呼称する。地理的な要因から「周辺国」と表現したが、X国と同様、作者には特定の国家を指し示す意図はなく、本作に政治的意図を込めるつもりもないことを明記する。に向かおうとした数十人の避難民が、周辺国の警備部隊に撃沈される事件が起きた。

乗っていた人間のうち半数が逮捕され、残りは死亡、もしくは行方不明となった。

漁船が領海に不法侵入し、停船命令を無視して沿岸にたどり着こうとした故であるが、この事件の一部始終を映した動画が事件の数時間後にはSNSに流れ、人々の不安をますます煽ることとなった。

不安の渦はやがて憎悪へと変わり、漁船撃沈事件を起こした国の出身者が各地で暴行、監禁などの被害に遭い、あるところでは逆にその国の移民団が集団で襲撃事件を起こすなど、日本のありとあらゆるところで無秩序な暴力行為が頻発することとなった。

抗いようなない死への恐怖を潤滑油とした憎悪の連鎖は、時間が経つにつれて凄惨を極めていった。

自警団と称した暴力集団が、敵と断じた相手を夜通し暴行し続ける姿さえも稀ではなくなつた。

赤子や妊婦でさえその餌食となつた。

略奪や強姦、放火など、理性を失つた蛮人たちの行為はおびただしい数にのぼつた。暴虐の動機は政治・民族などの範疇にとどまらず、遂には日頃の私怨や鬱憤を糧に蛮行を働くものまで現れ始めた。

つい昨日まで共に酒を交わしていた同僚が首を絞めあい、昨日まで共に家路を歩いていた学生たちがナイフで咽喉を切り裂きあつている。

もはやゴジラが手を下すまでもなく、人間は自然にその数を減らし始めたのである。



【19:38 ゴジラ、京都府に到達】

千葉県沖の最初の大爆発から間もなく24時間が経とうとしていたころ。

ゴジラは時速15 km程度の極めて遅い速度で京都府を横切りつつあった。

二千年以上に及ぶ日本の文化を伝え続けてきた建築や書物を見る影もなく焦土と化

し、または蒸発し、赤々とした光でゴジラの圧倒的な姿を照らしあげるのみであった。そのゴジラの真上を飛ぶ、無人機が一機。

中国人民解放空軍、無人航空機“翼竜—12”である。

ゴジラは自らの直上を飛翔する無人機存在に気付きつつも敢えて反応を示すことはなかった。

京都の街は、それまでゴジラが蹂躪してきた全ての都市と同じように、一辺の希望もない焦土と化した。

大半の市民が逃げた後とはいえ、未だ逃げ遅れた人々や避難を諦めてシエルターに籠る人々が数多くいた。

時節核熱線を発すると、その閃光に焼かれた皮膚は瞬時に溶解し、全身が建物に張り付いた糊と炭の中間のような死体へと変貌した。

それを逃れたところで、次は衝撃波による瓦礫の飛来、建物の倒壊が待っている。爆心地をわずかに離れたところでも、閃光を浴びた身体は水分が抜けて炭化していく。

一番悲惨なのは皮膚が炭化しても内部組織がまだ生きている状態に晒された人々であり、地獄をも超える全身の激痛と焼けた気管が腫れ上がることに伴う呼吸困難の双方

の責め苦を受け、死に至るまで声にならぬ悲鳴を上げ続けた。

閃光と瓦礫の飛来を切り抜けた後に待っているのは、高濃度放射線による急性障害。この空間を生きる術を、人類は持ち合わせていなかった。

全身を焼かれつつ死を逸した人々は、我先にと煮立った川へ飛び込み、残らず死んでいった。

純粹に死から逃れたくてもがく者もいれば、むしろ死を求めて彷徨うものもいた。

すなわち、死を救済と錯覚させるほどの地獄であった。

全ての感覚が錯綜した中、彼らが感じるのはただ二つ。

天をも揺るがす地響きと、終末の咆哮。



【20:00（日本・韓国時間）】

韓国・ソウル郊外。

この場所に臨時で編成された国連軍ただし実態は国際連合憲章第7条に基づく国連軍ではなく、安保理の決議を受けて各国が自発的に派遣した多国籍軍である。の本部が

置かれ、各軍の司令官たちが続々と集結しつつあった。

「これがゴジラか……。何と禍々しい姿だ……」

中国人民解放空軍戦略無人偵察機師団長、唐慶中^{とうけいちゅう}中将は無人機より送られた画像を見て戦慄とともに言葉を漏らした。

「これがこの世の生物だというのか……。まさか抗日戦以来の国家を挙げた戦があのような化け物との戦いとはな……」

「恐れを抱いている時間はありますまい」

横合いからロシア連邦航空宇宙軍第11航空・防空軍司令、ニコライ・グリズロフ中将が告げた。

「ゴジラの進路を見るに、このまま直進し、都心部を破壊しつつ大阪湾に入水する意図があることは明白。入水を阻止できねば、奴は海水でエネルギーを無尽蔵に回復することになる……」

「つまりここであの化け物を食い止めねば、我が国の防衛は果たされぬ、ということか……」

唐中將は画面の向こうを悠然と歩くゴジラを睨みつけながら呟く。

「各戦闘部隊に通達！ 21:00より総攻撃を開始する！ 作戦開始時刻に合わせ、各無人機の離陸準備を徹底させろ！」



【20:21】

兵庫県伊丹市・伊丹駐屯地。

「総監、国連軍より通達がありました。『我が軍の攻撃は無人機による断続的ミサイル攻撃に限る。これを妨害せぬ限り、貴隊の一切の行動の自由を認める』と」

通信兵が告げると、中部方面総監・新堂永治陸将は重い表情のまま頷いた。
しんどう ながはる

「総監、呉の護衛艦隊及び各航空基地の部隊より作戦参加を希望する連絡が多数届いています…」

「いや、許可は出せない。今は統幕監部が壊滅し、各々の部隊が各個に動いている状態だ。連携を失った軍は攻撃力を発揮することはできない。本作戦はあくまでも我が中部方面隊のみで行う」

幕僚長の報告に新堂は毅然とそう返した。

「しかし、数万発の砲とミサイルを受けて無傷の敵に、我々の攻撃は意味を成すのでしょうか…?」

「本作戦の目的はゴジラにダメージを与えることではない。僅かでもゴジラに攻撃を行わせ、以てエネルギーの消耗を促すことだ。攻撃は注意を引くためのきつかけに過ぎ

ん」

新堂が述べた作戦概要はいかにも単純なものであった。

しかしその内容がいかに残酷なものであるか、他ならぬ新堂自身が一番身に染みて知っていた。

戦車や装甲車に乗った部下たちを、ただ死なせるために戦地に赴こうとしているのだから。

「だが、やらなくてはならんのだ……」

自分に言い聞かせるように、新堂は呟く。

「僅かでも可能性があるなら、僅かでも戦力があるなら……やるしかない……」
今、彼らに残された戦力も決して多くはない。

日本中が混乱する中で離散した部隊や隊員も決して少なくはなかった。

秩序と治安を失った自治体の中で、家族が心配になって隊を抜けるのも、人としては当然の心である。

新堂には離散した隊員を責める気にはなれなかった。

だがそのような状況においても、任務に備えて隊に残り続けた謹厳実直な隊員達。そんな彼らを使い捨てなければならぬ状況に、新堂は断腸の思いを断ち切れなかった。

「総監―」

そんな新堂の思いを一蹴するかのように、その報は飛び込んできた。

「ゴジラが県境を越えて枚方市に進入！ 間もなく作戦展開区域に進入します！」

「うむ」と新堂は答え、正面のモニターを見据えた。

「戦場を淀川河川敷に想定、現場に急行中の戦車及び車両部隊は淀川方面へ急行せよ。ゴジラの接近を確認後、呉二号作戦を開始する！」



【19：26】

この頃、元都心部での放射線調査を終えた山根博士らは、茨城県つくば市のとある大病院にいた。

「部隊の報告では、その人物はこちらの病院に収容されているはずです」

竹ノ塚での調査で山根に協力した中央特殊武器防護隊所属・近藤次郎こんどう じろう二尉が先導する。

病院内には関東中のあらゆる場所からへり輸送されてきた病人や怪我人が運び込まれ、圧倒的に場所と人員が足りていないのは山根の目にも明白に理解できた。

死亡した人々を安置する場所すら足らず、ベッドの上に置かれたまま眠っている遺体も垣間見える。

入り口の方には収容者の家族が押しかけており、生き残りの警察や自衛隊員たちが辛うじてそれを押しとどめる有様であつた。

「この部屋です」

近藤二尉が通した部屋は、他の部屋と違って患者一人が横たわっているだけの殺風景な部屋だつた。

しかし生命維持装置などは大がかりなものを取り付けられており、この病院の患者の中で明らかに特別な扱いを受けていることが分かる。

「この子が……最もゴジラに近い場所で生き残つたという少年ですか？」

山根の問いかけに、近藤は「はい」と答えた。

ベッドに寝かされている患者は、全身に隙間なく包帯が巻かれ、顔や性別すら外見では認識することができない。

「全身を重度の火傷で損傷し、さらに高濃度の放射能障害を受けています。発見されたときは文字通り虫の息だったと部下は言っておりまして。ですが輸送ヘリの中でも息絶えることなく、辛うじて今も生を保っています」

近藤の話を聞きながら、山根は彼から書類を受け取って眺めた。

「発見場所は千葉市……。持ち物から断定されたプロフィールは……。高校生なのか……」

こんな若い少年が、と山根の胸中に悲哀の情が走る。

「はい。名前は『小幡堅太郎』というそうです」

二人が言葉を止めると、ヒュー、ヒュー、という小幡の呼吸の音だけが機械越しに聞こえてくる。

「ゴジラが通過した場所3 km以内で発見された生存者は、現在のところ彼一人です。都心部、神奈川県などの各所において、その範囲で生存が確認された者は一人もいません」
「『絶滅』……。まさしく奴は自分の近くにいる人類を一人たりとも残さず絶滅しているんだ……」

山根は重く言葉を発する。

「だが、彼がもし目覚めることがあれば、何か有用な情報が得られるかもしれません。至近距離でゴジラを見て唯一生き残った人物の証言……。何としても聞かなくてはなりません。彼の回復を祈るしかないですね」

近藤は小さくうなずいた。

だが、近藤は内心では山根の言葉に賛同しきれない思いを隠していた。

彼は、部下からの報告で小幡のより詳しい状態を知っている。

発見されたとき、小幡は息も絶え絶えな状態で、ずっと呻き声をあげていたのだ。

全身を襲う堪えがたい痛みから逃れる方法が分からず、ただ苦しんで助けを求めて、呻いていたのだ。

彼の肉体には溶解した服が張り付き、脱がせることすらできなかったという。

よしんば彼が意識を取り戻したとして、その常軌を逸する激痛が僅かでも消え去っている保証はあるのか？

“いつそ、死なせてやった方が彼は救われるのではないか？”

自衛官として、それだけは抱いてはいけない情だと彼は十分理解していた。

だからこそ、部下にも山根にもその思いを言うことはなかった。

だが、このまま苦しみから救う方法がないまま生かすことこそ、最も残酷な対応ではないのだろうか？

「お気持ちは分かりますよ」

近藤の心を見透かしたかのように、山根は言った。

「ですが、オキシジェン・デストロイヤーさえ完成すれば……もうこんな不幸な子が現れることはなくなります。オキシジェン・デストロイヤーさえあれば……」

「……………」

近藤はなんと返答すればよいか分からなかった。

その兵器の名は先ほど初めて山根から聞いたものであり、近藤が推測するに自衛隊の最高幹部すらも知らない名前である。

山根いわく“百年前のゴジラを倒した兵器”のようだが、突拍子もなくそのようなことを言われても素直に信用しがたいというのが率直な感想だった。

ゴジラの明確な死因が長らく明らかにされていないのは確かに疑問だったが、だからと言って突然出てきたどんなものかも分からない兵器のことを無闇に信頼する気にもなれない。

山根は世界に認められた怪獣研究の第一人者であることは近藤も存じてはいたが、彼の話の内容までを鵜呑みにはできなかった。

一方で、“ゴジラを倒せる存在がある”ことに縋りつきたくなる自分をも否定できずにいた。



ゴジラが絶望の大進撃を開始してから二度目の夜が訪れた。
呉二号作戦の発動は近い。

【人類生存数 92億5971万人】

なお、現時点で日本人の約22%が死亡している。

孤軍

呉二号作戦。

先日の呉一号作戦これまでは二回目の作戦を行うことが想定されていたいなかったため“呉号作戦”と呼称されていたが、二回目の作戦の実施に伴い“呉一号作戦”と呼称が変更された。の失敗を受け、生き残った自衛隊の幹部たちが急遽作成した対怪獣作戦である。

草案は以前より作成してあった防衛計画に基づいているものの、まともな統率を保ち動員が可能な部隊はごくわずかであり、また内陸部から大阪が侵略されるというストーリーは想定外であった。

それは、作戦と呼ぶことすら危ぶまれるほど脆弱な計画だった。

しかし上に立つ者や組織が壊滅してもなお動ける部隊が僅かでも存在する以上、彼らは戦わぬわけにはいかなかった。

作戦を立てる暇も戦力を整える猶予も与えぬまま、巨神ゴジラは京都府を超えて大阪府へと進入した。

巨神が見据える先は、大阪湾。

彼にとってエネルギーの宝庫である、海だった。



同刻・韓国ソウル郊外。

多国籍軍司令部。

「翼竜攻撃隊第一波、全機離陸を終え東シナ海上空を航行中。間もなく日本国領空へ到達します」

兵士の報告に唐中將は頷く。

「しかし妙だな」

横に立つグリズロフ中將が呟くと、唐は彼の方に顔を向ける。

「水が欲しいのならば何故奴は琵琶湖に入らなかった？ それに今現在も奴は淀川の近くを歩いている。川の水を飲めばよいのではないのか？」

通訳越しに彼の呟きを聞き取った唐は顎に手を当てて熟考した。

「海水でなければいけない理由でもあるのか、それとも……」

「しかしそんなことは科学者に考えさせればよいではありませんか」

唐の言葉にグリズロフは表情をこわばらせた。

「我々軍人の仕事は目前の敵を排除すること、そしてそれにより国家人民を守ることだ

す」

「うむ……それは我が軍も同じこと。分かつてはいるが……気になるものでね」

やがて彼らの目前のスクリーンには、偵察機が撮影するゴジラの巨大な姿が浮かび上がる。

「奴は我々の意図を見透かして、その上で……我らに淡い希望を抱かせようとしているのではないかと」



【20:37】

千葉県九十九里沖の爆発からついに24時間が経った。

淀川の河川敷を突き進むゴジラ。

民家が立ち並ぶ住宅街を視界に収めると、その口内から猛烈な勢いの紅炎を吐き出した。

炎は一瞬のうちに枚方市中を駆け巡り、これらを文字通り火の海に変貌せしめた。

しかし、これまでの破壊劇に比べその勢いは強くなかった。

口から発せられるのはひたすらに赤い炎であり、青い熱線やキノコ雲を伴う核熱線を

使う気配はない。

だがそれは、決してゴジラの生体エネルギーの欠乏を示す現象ではなかった。

既にほぼ全ての人間が逃げ失せたこの街に対して、エネルギーを浪費する意義をゴジラ自身が見出せぬがゆえの行動であつた。

わずかに残る人間……見捨てられた高齢者、被介護者、逃げることを諦めた人々、自殺願望者……それらを虐殺するには紅炎で事足りると判断したのである。

攻撃の手は抜いていても人類の滅却に手拔かりはない。

一部分ずつ確実に焦土とし、自身が知覚できる全ての生体反応が止んでから前に進む。

【21:00】

枚方市を超え、いよいよ大阪市を視界に収めようとしていた時、ゴジラは空に異変を感じた。

雲に覆われた夜空を睨むと、それはすぐに現れた。

中国人民解放空軍、翼竜——12の大群であつた。



「全部隊に通達。G2作戦、第一フェイズを開始する。全機、攻撃開始」

「目標、前方巨大生物！ 目標捕捉！ 攻撃開始！」

唐の怒号が飛ぶと同時に、無人機部隊は一斉に攻撃の火蓋を切った。



ゴジラが敵の趨勢を見極めると同時に、翼竜から空対地ミサイルが射出された。視界一杯に広がった無人機の群れから一斉に射出されたミサイルが突き刺さり、ゴジラの肉体は大規模な爆轟に覆われた。

無人機群はゴジラの上を通り過ぎると旋回し、第二次攻撃の態勢に移る。

その時であつた。

黒煙を切り裂いて撃ちだされた青い熱線。

その切っ先が無人機の一群を一挙に消滅させた。

黒煙が晴れると、何の負傷もない巨神の姿がそこにはあつた。

生き残った翼竜は次々に抱きかかえたミサイルを撃ちだしてゆく。

だがミサイルの攻撃には目もくれず、ゴジラはあくまでも無人機を精密な射撃で撃ち

落していった。

瞬きをする間に無人機の群れは数を減らしていく。



「第一波、全滅！」

攻撃開始より僅か63秒で第一波は全滅した。

この報に多国籍軍本部内にも動揺が走る。

だが、「うろたえるな！」という唐の言葉が彼らの表情を変える。

「この報はむしろ好都合！ 我らの作戦は実を結んだのだ！ 奴は迎撃にエネルギーを割いている！ 回復の暇を与えるな！ 第二波、攻撃開始！」



ゴジラが息をつく暇もなく、すぐに次の翼竜が大挙して現れた。

ゴジラは少しずつ大阪方面へと歩みを進めながら、無人機の群れを撃墜する。

その爆炎は、はるか遠くからでも容易に観測することができた。



大阪府・城北公園前。

中部方面隊第37普通科連隊の残存部隊は、都市中の街道に散開し、作戦開始の時を待っていた。

「見えるぞ……既に多国籍軍の攻撃が始まつてるな……」

第二普通科中隊長・桐島丞二きりしま じゅうじ三佐は双眼鏡を覗き込みながら呟いた。

「敵はもうすぐですか？」

という部下の問いに「ああ」と短く返す。

「全く、信じられんな……。つい昨日まで普段通り職務に就いていたのに、今日になって突然“化け物から逃げ回れ”、なんて……。悪夢すら超越した現実に放り出されると、不思議な気分になるもんだ……」

そう言うのと桐島は高機動車の後部座席に座り込んだ。

「作戦開始は近いぞ。怖いだろうが、気を引き締めろよ。きちんとやれば必ず生きて帰れる」

「了解！」



【21:24 ゴジラ、大阪市に到達】

「総監、ゴジラが作戦区域に進入しました！」

ゴジラが大阪市に入ると同時に、伊丹駐屯所・中部方面司令部ではそのような報告が飛んできた。

「よし……呉二号作戦を発動する！ 各部隊、作戦行動開始！」

新堂は雑念を捨て、目をカッと見開き、命じた。



この頃、既に翼竜第二波が全滅し、攻撃は第三波に移行していた。

空中の無人機の一掃に気を取られていたゴジラは、思わぬ方向からの攻撃に気が付く。

地上、大阪の街の建物の隙間から、軽装甲機動車や装甲車がゴジラに向けて機銃掃射を行っている。

同時に、何両もの高機動車が閃光弾を装填した軽機関銃を打ち上げ、ゴジラの視界にその存在を見せつけた。

そして、淀川の河川敷からは戦車と機動戦闘車が砲撃を開始していた。

ゴジラは地を這う敵をぐるりと一瞥した。

それと同時に、自衛隊の各車両は攻撃を中断、あるいは一部の車両は攻撃を続行したまま、全力でゴジラから遠ざかり始める。

人も車も消え失せた大阪の街を駆け巡り、ゴジラの目を欺く。

その間にも翼竜の群れは次々とゴジラに向けてミサイルを投げ出した。

陸と空の同時攻撃。

それはゴジラにとって一日ぶりに遭遇した本格的な人類の抵抗であった。

僅かな望みをかけた一撃。

エネルギー切れという、万に一つ起こるか起こらないかの事象に賭けた一か八かの作戦。

その願いは、神に届くか。

ゴジラは青い熱線を吐きだして一気に頭を振り、視界内の翼竜を一気に灰燼に帰す。だが地上の部隊には熱線を浴びせぬまま、前に歩き出した。

その歩みは次第に早くなり、建物はその巨大な脚の一撃で粉々に粉砕されてゆく。

全ての建造物を足跡に変え、進んだ先には、閃光弾を打ち上げながら必死に後退する一両の高機動車があった。

ゴジラは地虫を潰すかの如くその巨脚を振り下ろした。



『中隊長殿!! ゴジラの歩行速度大幅に上昇! 追いつかれます!!』

桐島の無線に部下からの悲痛な叫びが届く。

「石田、大通りに入って全速で離脱しろ!」

桐島は指示を出しながら後部座席からゴジラ的位置を確認した。

「……!!」

そして、短時間のうちに巨神があまりにも近くまで迫っていたことに驚愕した。

ゴジラは大股で市街地を蹴り崩しながら進撃し、数秒のうちに桐島車の背後を通り抜けていった。

『ゴジラ接近!! 逃げきれません!! 隊長!!! わあああーっ!!!』

「石田!! 状況を確認…」

桐島はそこまで言いかけた言葉を呑み込んだ。

状況報告など意味はない。

今の断末魔こそ、彼の置かれた結末を如実に物語っているからだ。

ゴジラは桐島車の後方で立ち止まっていた。

自らが踏み潰したちっぽけな命を嘲るように見下ろすと、ぐるりと次の標的を探した。

そして標的が決まるとそれに向かって駆けだしていく。

「後ろを見るな!! 前だけを見て全速で飛ばせ!!」

桐島は運転手にそう命じた。

背後から迫るゴジラの足が見えた瞬間、運転手は正気を失うだろうと判断したゆえである。

エネルギーを温存するためか、はたまた単に狩りを楽しんでいるだけなのか分からないが、奴は熱線を封じてその巨体で我々を一台ずつ圧殺しようとしている。

恐怖と絶望を与えるために、一台ずつ確実に。

このままでは、我々はゴジラに殺される前に“恐怖”に殺される。

抗わねば。

我らは絶望などに屈しない、屈してはならない。

だが、その覚悟もまた、ゴジラの慧眼の前では容易く見透かされていた。



鈍重な装甲車はゴジラの追撃から逃れるには分が悪かった。

ゴジラは後方で迫撃砲を撃つ一台の装甲車を認識すると、その頭上から真つすぐに自

らの尾を突き刺した。

ドズン、と轟音が響き、土埃が周囲を覆う。

ゴジラが尻尾を上げると、道路の真ん中には深く大きな穴が穿たれ、その底にはひしゃげた鉄塊と化した装甲車の残骸が横たわっていた。

続けざまにその尾を横に強く振ると、音速を超えた先端部は衝撃波を伴い、高層ビルを中段からへし折った。

ビルの先端が倒れる先には、逃げ遅れた高機動車が一台。

哀れな車両は瓦礫の山に埋もれて見えなくなった。

直後、翼竜のさらなる大群が飛来すると、ゴジラはそちらの迎撃に移行した。

青い熱線が夜空をぐるりと撫でまわす。



「クソオオオーツッ!!!」

桐島は絶叫とともに車両の扉を殴った。

この作戦に何の意味があるというのか。

ただ部下が恐怖の中で虐殺されていくだけではないか。

「CP……CP!! 残存部隊数少数、作戦続行は困難!! 送れ!!」

連隊本部に怒鳴るように告げると、がっくりと前の座席にもたれかかる。

「畜生……畜生………」

「その……中隊長殿……」

横に座る射撃主が声をかけると、「なんだ」と桐島は小さく答える。

「中隊長殿……血が………」

「……………」

桐島が口元に手を当てると、その手にはべったりと血がついていた。

「……………俺は……………」

この時、桐島は自らの命運を悟った。

約20分後、桐島丞二三佐は急性放射性障害により死亡した。



ゴジラはなおも各部隊を追いかけ、その巨軀をもってこれを根絶やしとしていった。腕を振りかざしてビルを崩し、尻尾を薙ぎ払ってすり潰すように地上の車両を破壊

し、地面を這う隊員を足底で踏み潰す。

地面には車両や砲の残骸、糊のようにこびりついた人体の残骸が散乱した。

その熾烈な攻撃と濃厚な放射能被害は、みるみるうちに僅かな戦闘部隊の数を減少させていった。

それでも地上の戦闘員たちは諦めない。

エンジンが壊れた車両を打ち捨て、生身の身体で銃を乱射し、ゴジラの視界を誘導する。

無反動砲や対戦車砲を担ぎ出し、弾薬が残る限り撃ち続けた。

ゴジラは一人たりとも見逃さず、殲滅を続けた。

彼らがゴジラを大阪で足止めさせた時間は、40分程度だった。

【21:46 陸上戦闘部隊壊滅】

同じ頃、中国軍の翼竜航空機もついに全滅の危機に瀕していた。

すると、それと入れ替わるようにロシア空軍第257独立混成航空機連隊が北の空より現れた。

大阪の街は炎に沈み、それでも攻撃の手が緩むことはない。



「総監、隷下の部隊はほぼ全て損耗しました……」

幕僚長の言葉に新堂は答えず、俯いて黙っていた。

「しかし彼らは十分にゴジラの注意を引きました。国連軍の攻撃は続いています。彼らの犠牲は無駄ではなかったはずです……」

「そのようなことが言える根拠がどこにある」

新堂は心から憔悴しきった表情でそう呟いた。

「志を共にした部下を虫のように踏み潰させるくらいならば……このような作戦は行うべきでなかった……なぜ私は……」

後悔の言葉を押し並べる新堂に慰めをかけてやれる者は誰もいなかった。

元より勝ち目などない戦だった。

エネルギーを消費しきる確信もなく、蹂躪されるだけだと分かったうえでの戦いだっ
た。

それでも隊員は自らの意思で参加したのだ。

離散した仲間もいるというのに、最期まで国民を守る戦いに身を投じる道を選んだ。

その顛末が、あの屈辱にまみれた手法での虐殺である。あまりにも、あまりにも報われない。



「なんと……恐ろしい………」

ソウルの多国籍軍本部で戦闘映像を確認するグリズロフは、戦慄とともに呟いた。

その映像の中には、玩具のように殺される陸自隊員たちの姿がはつきりと映されていた。

「おのれ……!! もう翼竜は残っていないのか!! 米軍は!? まだ来んのか!!」

唐は顔を真っ赤に紅潮させて怒鳴る。

「このままでは大阪を突破される!! 化け物が我が国へ迫るのだぞ!! なんとしてもここで殺せ!!」

「ロシア軍機も間もなく全滅……! 防衛ラインを突破されます!!」

唐の命令も虚しく、兵士の叫びが本部中に響き渡った。

【22:25 無人攻撃機、全滅】

【同刻 G2作戦、及び呉二号作戦終了】



ゴジラは大阪市街を駆け抜ける。

紅蓮の炎に包まれた大阪城天守閣が音を立てて崩れ落ちる。

目の前に広がるのは、大阪湾。

だがゴジラは、湾の直前で足を止めた。

数秒の沈黙ののち、くると向きを右に変え、歩み始める。



「ゴジラ、進路変更！ 大阪湾に入水せず、湾沿いに神戸方面へ進行！」

「なんだと!？」

本部の幹部たちは唖然とする。

「何故だ、ゴジラ……！ 我々を挑発しているのか……?」

「その通りかもしれん」

グリズロフが力なく呟く。

「初めから間違っていたのだ……。奴のエネルギーは核融合……太陽にも等しい熱源だ。あれだけの攻撃をしてもなお……補給に値しない程度の力しか消費していないのだ……!!」

「……………」

本部の人間たちに衝撃、そして沈黙が走る。

神だ。

神の武力が迫っているのだ。

ある兵士はそう思った。

「爆弾の王……」
ツァーリ・ボンバ

「…!?!」

グリズロフが呟いた言葉を唐は聞き逃さなかった。

「我が軍が製作した人類史上最強の爆弾……あれを使うしかない」

「中将、気は確かか?」

という唐の言葉が通訳に介される前に、グリズロフは歩き出していた。

「大統領に繋げ! 作戦を第二段階に移行する!」

「待て! 独断の核攻撃は安保理の決議に反するぞ!」

唐は部下とともにグリズロフを追うが、それをグリズロフの部下たちが止め、もみ合

いになる。

やがて他の国の高官も異を唱え始め、本部は騒然となった。

再び安保理を招集する暇はない。

自国が率先して防衛行動を行うべきだ。

そう考える者達が増え始めていたのである。

巨神への恐怖は狂気に置き換わり、恐るべき世界大戦の幕を切つて落とそうとしていた。

背徳

呉二号作戦、及びG 2 作戦は人類の敗北に終わった。

ゴジラは最初に上陸して以降、一度もエネルギーを補給することなく破壊行為を続行している。

山陰山陽地方に残された僅かな自衛隊員たちは、住民を誘導しながら西へ西へ潰走を続けた。

それを追うかのごとく巨神は山陽地方を西進し続ける。



大阪から遠くない位置にある伊丹駐屯地はすぐにゴジラの餌食となった。

「無駄死にさせた部下達には……靖国で謝らねばならん……」

炎に巻かれ阿鼻叫喚の駐屯地の中で、新堂永治中部方面総監はそう呟いて息絶えた。

関西以西には組織だつて活動できる防衛戦力は既になく、ここに至り日本防衛の希望

は完全に絶たれた。

【23：07 ゴジラ、神戸市を通過】

関西地方が赤々と燃え盛る中。
近隣の諸国に動きがあつた。



【11月5日 午前0：12（日本・韓国時間）】

G2作戦の失敗より数時間後。

混乱を極める多国籍軍本部の中で、密かに唐中將を呼び出した者がいた。
別室に連れてこられた唐は何も言わず席に座る。

「結果は芳しくないようだな」

背後に二名の歩哨を立たせた中国中央軍事委員会連合参謀長・李建宇^{りけんう}上將は冷たくそう言い放った。

「畏れながら、返す言葉もございません…。敵生物は人知を超えた生物であると言わざ

るを得ません」

唐は神妙な口調で告げる。

「私はそんな感想を聞きにわざわざソウルまでやってきたわけではない」

李上將の言葉に唐は押し黙る。

「私の目でも分かる。あれを無人機ごときで倒すのは無理だろう。もはや無人機部隊のみの管轄にはしておけん。これより多国籍軍に所属する我が人民解放軍の指揮は中央軍事委員会が直接執ることになった」

「は……」

唐は小さく頷く。

「で、あるからには今後は事態を好転すべく陸・海・空・その他各軍が統合的な作戦を行うことになる」

「まさか李閣下、あれと陸上部隊を戦わせるおつもりでありますか!」

唐の脳裏に先ほど呉二号作戦で蹂躪された陸自部隊の惨状が浮かんた。

人間が文字通り虫けらのように弄ばれ、潰されてゆく地獄。

他国軍ながら、あのあまりにも無残な死に様は直視に堪えなかった。

あんな地獄を自分たちの軍にまでも味わわせるなど、唐は言語道断の思いであった。

「心配するな。そんな無謀なことにはせんよ。陸軍はもつと有意義な作戦を行う」

李上將は少し口角を釣り上げてそう言った。

「あの化け物を倒すのは急務だ。だが、奴を倒したその先のことも見据えなければならん。つまり今は不思議なことに……我が国にとって存亡の危機でありながら、千載一遇の機でもあるということだ」

「……？」

唐は李の言葉の意味が分からず困惑した表情を浮かべる。

「今更機密にしておくことでもないな。単刀直入に言おう。陸軍は数時間後、日本国能登半島に奇襲上陸し、北陸及び中部地方を占領する。ロシア軍も同様に北海道と東北地方を占領する手はずとなっている」

「……………!!」

唐は電撃を受けたかのように硬直した。

「首都圏は米国に譲るという条件でかの国の承諾も得ている。どうせ破壊しつくされて復興もままならぬ土地だ、くれてやったところで問題にはならん」

「……………そ…その話はいつかから…」

唐は言葉を震わせながら尋ねる。

「つい先ほどな。党の最高幹部が米露と話をつけた。ヤルタ会談の再現だよ。英仏にはまだ伝えていないが、知られたところで抗議などすまい」

唐は言葉を失っていた。

戦略的に見れば至って論理的な手法である。

戦力を失って無政府状態の日本を占領して領土にするのは容易いだろう。

日本の復興を支援するという名目で統治すれば世界への言い訳も立つ。

軍としては最良の選択のほうであつた。

しかし唐は根本的な疑問を抱かずにはいられない。

抗日戦の折には、日本は我々との戦争の結果として米国に統治された。

だが今我々は日本と戦っているわけではない。

全国家が一致団結して人類共通の難敵と戦っているのではないのか？

なぜ今、わざわざ人間同士で戦う必要がある？

中央委員会には、ロシアには、米国には、その疑問を浮かべたものはいなかったのか

？

だが唐をさらに狼狽させたのは、続けざまに放たれた李の言葉であつた。

「そして肝心のゴジラの駆逐だが……下関市付近で大規模核攻撃を行う計画が立案された。中露米全ての核弾頭を用いてね」

「……………なっ!？」

唐は思わず立ち上がった。

「それだけは、それだけは絶対にやってはいけません!! 閣下!!」

机に両手を突いて唐は叫ぶ。

すると即座に李が右手を上げ、背後に立つ二名の兵士が小銃を構えた。

「……!!」

「私はね、旧ソ連の軍人のように党の威光を盾に部下を射殺するような将軍にだけはないたくないのだ。頼むから私に射撃の号令をさせないでくれたまえ」

あまりに強硬な李の態度は、その方針がもはや絶対に覆せない段階にまで来ていることを示していた。

唐は絶望の表情を浮かべて椅子に座りなおす。

「私は無能な将軍とは違う。部下の意見に耳を貸す度量がある。落ち着いてまずは意見を聞かせてくれ。何故核攻撃はいかんと思うのだ?」

意見を述べたところで党の決定が覆らぬことは唐も重々承知していた。

唐は動揺を隠しきれずにいたが、それでも何とか息を整えて自らの展望を述べた。

「意見は……意見は二つあります。まず一に、ゴジラは核を体内の燃料としているのです! 核爆弾は奴の餌となるだけです!」

「…君は生物学の教授か何かかね? 君の知識で恣意的に効果を断定するのは感心しないものだ。仮に核エネルギーがゴジラの燃料であろうとも、口から炎を吸うように核爆

弾の火球を吸い込むことなどできん。我が国の生物学者は皆そう言っているよ」

李は平然と答えを返した。

唐の額に玉のような汗が浮かぶ。

「第二に、絶海の真ん中で攻撃をするのならともかく、人工密集地である街で核攻撃など、人の道に反しております！」

「そんなことか。下関市の住民避難は既に完了しているよ」

そんなはずはない、と唐は即座に思った。

自衛隊と連絡がつかぬ現状でこれほど早期に大きな街の避難完了を確認できるはずがない。

無人機で上空から視察した程度だろう。

もしかしたらそれすらもしていないかもしれない。

大国が口裏を合わせれば、事実など簡単に作り出せる。

「ただ怪物を駆逐するためだけに焰を使うのであればまだしも、人がいるやも分からぬ地に、人命と自然を根こそぎ無に帰すあの焰を使うことなど……自分は納得できません。核はあくまでも抑止力であります。何卒ご再考を」

「我らが偉大なる党に、人民の指導者に異を唱えるのか、君は」

李は冷たく言い放った。

「……………」

「君の意見は全て自らの一方的な思い込みであり、偏見で党の意見に叛意を露わにし、全人民に危機をもたらそうとしたわけだな」

「李閣下!! そのような」

唐が思わず逆上した瞬間、乾いた銃声が数発響いた。

【0：48 ゴジラ、姫路市を通過】



【11月5日 1：28】

北海道・網走郡美幌町。

陸上自衛隊・美幌駐屯地。

関西地方が蹂躪され、国家機能が停止した今においても極北の基地は機能していた。だがこの地で関西の戦況を見守っていた部隊の面々は、思わぬ報を聞くこととなる。

「連隊長殿! 空自より緊急連絡です! 先ほど国籍不明機が北方より我が国の防空識別圏に到達! 既に領空に到達している可能性があります!」

「なに!? スクランブル緊急発進はしたのか?」

第六普通科連隊長・浜野一佐は部下に問いかける。

「それが……防空司令部の壊滅によりスクランブルの判断を行う機関がなく……先ほど第二航空団司令が独断でスクランブルの命令を下したそうであります」
最悪の想定が浜野の脳裏をよぎる。

「まさか……いや馬鹿な……いくらなんでもそんなことをするはずが」

浜野がそう呟いた瞬間、爆音とともに基地が大きく揺れた。

周囲の幕僚が悲鳴を上げて倒れる中、浜野は真つすぐ外へと駆けだす。

彼が見たのは、爆撃を受け炎に包まれる駐屯地の姿であつた。

「ふ、ふざけるな……」

浜野は震える声で虚空に向け声を放つ。

「貴様ら、それでも人間かああ!!!」

浜野の叫びは、誰に届くこともなかった。

【1:30 ロシア空軍による攻撃が開始される】

それは、宣戦布告はおろか事前の武装解除勧告すら行わない完全な奇襲攻撃。

宣戦布告を行う相手である日本国政府が存在せず、世界の目がゴジラ一つに向けられていることを利用した巧妙な作戦であった。

やがて千歳基地をスクランブルした戦闘機部隊はロシア軍機と自衛隊史上初となる熾烈な空中戦を繰り広げ始める。

F-3とF-51の混成部隊は日本上空に襲い掛かったロシア軍に対し決死の奮闘を見せる。

しかし他基地の支援を得られず単独の部隊が個々で戦わざるを得ない空自に対し、ロシア軍は高度に統率された編隊と電子支援により次々と空自機を撃墜してゆく。

戦闘機を殲滅し、地对空ミサイルの散発的な迎撃も回避したロシア軍機は、自衛隊の基地や部隊を次々に爆撃し、壊滅させていった。

そして空爆開始から数時間後、朝方にはロシアの大船団が北海道東海岸に接近しつつあった。

翌朝、同じような経緯を経て中国軍は能登半島に上陸した。

この時の北陸には北海道ほどの戦力もなく、ただでさえ少ない兵器の大半は呉号作戦に投入して損耗されており、さらに中部方面総監部が既に壊滅していたことも相まっ

て、反撃を行う暇すらなかった。

ほとんどの部隊は先行爆撃により壊滅し、上陸した中国軍はほぼ何の抵抗も受けぬまま次々と日本の主要都市を占領していった。

そしてこれらの攻撃を、米国は一切黙認していた。



【1:57】

埼玉県さいたま市、陸上自衛隊大宮駐屯地。

ロシア軍の攻撃が開始されてから約30分後、山根博士とその一行はこの場所を訪れた。

「失礼します」

司令室へ入室した山根を待ち構えていたのは、疲労困憊し生気を失った東部方面総監部の面々であった。

「…あなたが山根博士か。総監の岡崎です」

岡崎総監は腰を上げるのもやっという様子で立ち上がり山根に一礼する。

「見ての通り我々もほぼ機能を失っています…。昨夜の攻撃で朝霞が壊滅、生き残りの隊員となけなしの装備を携えてこの大宮まで撤退し、今は住民の救出指揮すらろくに行

えぬ状況…。博士のお力になれるかどうかも…」

「いえ、総監が、そして僅かでも自衛隊員が生きていらつしやることに意味があるので
す」

山根は力強く述べるが、岡崎の表情から陰りが消えることはなかった。

「部下から聞いたが、あなたはゴジラを倒しうる兵器の研究を行っているそうですね…。
一体それはいつ完成するのでしょうか」

「はつきりとしたことは申し上げられませんが、ひと月かふた月ほどあれば恐らくは…。
私が現場で収集したデータも既にサラジアの研究チームに共有しておりますので、あと
はチームが全力を挙げて完成させてくれるのを待つほかはありません」

「ひと月かふた月、か……………」

総監部の面々に重い沈黙が走る。

たった24時間余りで日本が壊滅させられているのだ。

最低でも一か月、指をくわえてあの怪獣の進撃を見過ごすとなれば、一体世界は如何
ほどの被害を被ることになるのか。

「…博士は、ゴジラが、怪獣が、いかなる理由を持ってこの国を襲ったとお考えなの
でしょうか…?」

腕に包帯を巻き、生々しい負傷の跡を残す中田幕僚長が山根に尋ねる。

「理由は一つしか考えられません。やはり曾祖父が警告とおりでした。ゴジラは人類の罪を懲罰しに現れたのです」

山根の言葉に、岡崎はにわかに表情を変える。

「曾祖父は著書で述べていたはずです。『人類が核実験を繰り返せば再びゴジラは現れ、今度こそ世界を焼き尽くす』と。奴の怒りは人類の罪に対する怒りで」

山根がそこまで言った時だった。

「馬鹿げたことを言うな!!!」

岡崎は吠えていた。

「何が懲罰だ!!! 殺されたのは罪なき国民だぞ!!! 懲罰したいのなら何故核を操った連中の元へ現れなかった!!!」

「総監!!」

中田幕僚長の声も聞かず、岡崎は立ち上がって山根の胸ぐらに掴みかかった。

「愚かなことを……! ゴジラが憎むのは人類全体であり、そこに老若男女の別はないのです!」

山根も思わず声を張って反論する。

「だから奴の行いを黙って受け入れろと言うのか!!! 何故核兵器のかの字も知らぬ子供までもがのたうち回って死ななければならなかった!!! 奴は神でも懲罰者でもない、た

だ醜く残虐な殺戮者だ!! 二度とそのような思いあがったことを言うな!!!」

「総監!!!」

中田が岡崎の両肩を掴んで絶叫すると、ようやく岡崎は山根から離れ、憔悴した面持ちで椅子に座りなおした。

「山根博士、我々も数十時間に及ぶ緊張状態で心身共に満身創痍なのです。申し訳ないが、言葉は慎重に選んでもらいたい」

中田が懇願するように言うのと、「…失礼いたしました」と山根は返す。

「しかしゴジラに我々の道徳という概念が通じないことだけは確かです。今後とも奴は日本を蹂躪すべく活動を続けるでしょう」

「どうすればよいのだ……我々にできることはないのか……」

岡崎が消え入りそうな声で呟いた時だった。

「総監殿、緊急事態であります!」

通信士が声を張り上げる。

「現在、北海道美幌駐屯地が国籍不明機の攻撃を受けている模様!」

「……なんだと!?!」

岡崎はじめ総監部の面々は、その報を頭で理解しきるのに数秒を要した。

国籍不明と言えど、北海道が攻撃を受けている時点でどの国の差し金であるかは容易

に察しが付く。

「以下は北部方面総監部よりの緊急通達です！『我が北部方面隊は、日本領土に上陸せんとする敵部隊の進行に際し、内閣及び統合幕僚監部の消失を理由として、自衛隊法違反を承知の上で北部方面総監の責任の下、麾下の部隊に反転攻勢を下令する。第二航空団をはじめとする空自各部隊もこれに同期して反撃を期す。我が隊は、如何なる状況においても、わが国固有の領土と国民を断固として死守する覚悟である。』」

「し、信じられん……!! この状況で戦争をしようというのか!!」

「ゴジラに加え、他国軍とも戦わなければならないのか!？」

幕僚達の動揺の声が室内に響きわたる。

「なんと愚かな……!! ゴジラを放置して戦争など……!! 正気の沙汰ではない……!」

山根も拳を震わせ、怒りを露わにする。

「正気、か……。もうこの世界に、正しいことなど一つもないのかもしれない……!」

岡崎は静かに呟く。

「国家は滅ぼされ、国土は他国に蹂躪され。何もかもが狂っている。怪獣が人を狂わせたのか、それとも元から狂っていたのか……!」

“ゴジラの目的は愚かな人間への懲罰である。”

岡崎はつい先ほど山根が述べたその意見を即座に唾棄したにもかかわらず、今は無性

にそれを信じようとする自分がいることに気付いていた。

「何ゆえ、人間はここまで醜くなれるのか……」

利を求め、モノを奪い、焰を落とす。

それは、国家の別なく古くから人間が行ってきた行為である。

人類そのものの存亡の危機でさえ、その本能に従おうとする人間。

その愚かさに対するツケだというのなら、確かに怪獣による破滅は当然の帰結なのかもしれない……。

そう思いかけて岡崎はハッと我に返る。

例えそこに一筋の道理があろうとも、断じて受け入れてはいけない。

このような理不尽を、哲学の一つで言いくるめて納得するようなことなど、あつてはならない。

納得してしまえば、これまでに殺された命はどうなる。

これから殺される命はどうなる。

「うろたえるな！ 現状では我らの任務はあくまで関東圏における負傷者の救出とライフラインの回復に限られている！ 北部の作戦は北部に任せ、我らは我らの本懐を達するのみ！」

岡崎が声を張り上げ、総監部を一喝する。

あまりにも残酷な逆境の中で、僅かながら生氣を取り戻し始めた総監部は再び動き出す。

もはや絶望にすら麻痺してしまった彼らは、休む間もなく次の戦いへと身を投じる。

【2：08 ゴジラ、岡山市を通過】



【3：16（日本時間）】

ロシア軍の大型戦略爆撃機がシベリアの空を駆け抜ける。

その胴体の中で、超大型核爆弾“ツァーリ・ボンバⅡ”が静かに炸裂の時を待っていた。

【4：00 ロシア陸軍、北海道網走及び根室に上陸開始】

【4：16 ゴジラ、広島県三原市を通過】

【6 : 3 0 中国陸軍が能登半島に上陸開始】

【6 : 5 4 ゴジラ、山口県に進入】